木古内町　大平4遺跡(2)・蛇内2遺跡(2)

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第292集　平成23年度

北埋調報 292

木古内町（きこないちょう）

大平（おおひら）4遺跡(2)・蛇内（へびない）2遺跡(2)

— 北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成23年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

木古内町（きこないちょう）

大平（おおひら）4遺跡(2)・蛇内（へびない）2遺跡(2)

— 北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成23年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、独立行政法人鉄道建設･運輸施設整備支援機構による北海道新幹線建設事業工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成22・23年度に委託を受けて実施した、木古内町大平４遺跡と蛇内２遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。両遺跡とも２冊目の報告書となる。

2．報告内容は、大平４遺跡の平成22年度調査範囲のうち450㎡（補償道路部分350㎡、町道振替部分100㎡）、および蛇内２遺跡の平成23年度調査範囲77㎡、計527㎡の遺構と遺物である。

3．調査は第１調査部第３調査課（平成22年度）、第２調査部第２調査課（平成23年度）が担当した。

4．本書は、立川トマス、芝田直人、酒井秀治、佐藤和雄が執筆し、文末に執筆者を示した。編集は酒井が担当した。

5．遺物の整理は、大平４遺跡が土器を芝田、石器等を酒井、蛇内２遺跡が土器・石器等を佐藤が担当した。

6．現地調査での写真撮影は各担当者が、室内での写真撮影・整理は立川が担当した。

7．調査報告終了後の出土遺物は、木古内町教育委員会で保管される。

8．調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、木古内町教育委員会、北斗市教育委員会、
知内町郷土資料館、市立函館博物館、七飯町歴史館
石井淳平、大沼忠春、木元　豊、佐藤智雄、斉藤邦典、佐々木翼、関根達人、高橋和樹、
高橋豊彦、時田太一郎、西脇対名夫、福田裕二、森　靖裕、山田　央、横山英介

（五十音順・敬称略）

記号等の説明

1．遺構の表記には以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付けた。

　　Ｈ：住居跡　ＨＦ：住居にともなう焼土　ＨＰ：住居にともなう土坑・柱穴

　　Ｐ：土坑　　ＦＬ：剥片集中

2．遺構図等には真北を示す方位印を付した。図の天方向は、N－50°－Wである。遺構平面図の「＋」は調査区または小調査区ラインの交点で、傍らの名称記号は右下の調査区を表す。また、小黒丸とその下の数字およびセクションレベルは標高（単位m）である。

3．掲載した遺構・遺物の図は基本的に以下の縮尺に統一した。ただし、遺構位置図、地形図、遺物出土状況図などは任意の縮尺であるため、各図にはスケールを付けてある。写真図版の土器・石器は、およそ１：２で掲載している。

　遺　　構　１：40　　復元土器　１：３　　土器拓本　１：３

　剥片石器　１：２　　礫 石 器　１：３

4．遺構の規模は､｢長軸の上端×下端／短軸の上端×下端／確認面からの最大深｣(単位m）で示している。

5．土層の表記は、基本土層についてはローマ数字（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ・・・)、遺構内の層序についてはアラビア数字（１、２、３・・・）を使用した。

6．土層の色調は『新版標準土色帖29版』(小山・竹原2007）に準じた。

7．火山灰は『北海道の火山灰』(北海道火山命名委員会1982）に準じ、以下の略号を用いた。

　　駒ケ岳火山灰ｄ層：Ｋｏ－ｄ　　白頭山- 苫小牧火山灰：Ｂ－Ｔｍ

8．遺物図右下の太ゴチックアラビア数字は掲載番号であり、これに後続する小文字アルファベット（ａ、ｂ、ｃ・・・）は同一個体を示す。

9．復元土器の断面図上方に「▼」が付されている場合、正面図に「▼」が付されている部位の断面を表す。

10. 石器の大きさは、最大長・最大幅・最大厚（単位cm）で示した。破損しているものについては現存最大値を（　）で示した。

11. 石器の実測図中でたたき痕は「∨－∨」、すり痕は「 ↤⟷↦ 」で範囲を示した。

12. 文中において「北埋調報」としているものは、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書の略である。

目　　次

例　　言
記号等の説明
目　　次
挿図目次
表 目 次
図版目次

Ⅰ　緒　　言
1　調査要項……1
2　調査にいたる経緯……1
3　調査の経過……2
4　調査結果の概要……3

Ⅱ　遺跡の位置と環境
1　位置と環境……5
2　周辺の遺跡……7

Ⅲ　調査の方法
1　調査範囲……9
2　土工……11
3　測量と記録……11
4　整理の方法……11
5　保管……13
6　遺跡の土層……13
7　遺物の分類……14

Ⅳ　大平４遺跡
1　概要……15
2　遺構……15
3　包含層出土の遺物……26

Ⅴ　蛇内２遺跡
1　概要……39
2　遺構……40
3　出土遺物……42

一 覧 表
写真図版
引用参考文献
報告書抄録

挿　図　目　次

Ⅱ　遺跡の位置と環境

図Ⅱ－１　遺跡の位置と木古内町の地形……５
図Ⅱ－２　大平４遺跡周辺の地形と調査区……６
図Ⅱ－３　蛇内２遺跡周辺の地形と調査区……６
図Ⅱ－４　周辺の遺跡……７

Ⅲ　調査の方法

図Ⅲ－１　大平４遺跡
　　調査区設定図・年度別調査範囲図……10
図Ⅲ－２　蛇内２遺跡
　　調査区設定図・年度別調査範囲図……10
図Ⅲ－３　土層柱状模式図……13

Ⅳ　大平４遺跡

図Ⅳ－１　大平４遺跡調査範囲図……15
図Ⅳ－２　遺構位置図（全体）……16
図Ⅳ－３　遺構位置図（補償道路部分）……17
図Ⅳ－４　遺構位置図（町道振替部分）……17
図Ⅳ－５　Ｈ－１・２……19
図Ⅳ－６　Ｐ－27・28……21
図Ⅳ－７　FL－15・16 ……23
図Ⅳ－８　遺構出土の遺物（１）……24
図Ⅳ－９　遺構出土の遺物（２）……25
図Ⅳ－10　包含層出土の土器（１）……26
図Ⅳ－11　包含層出土の土器（２）……27
図Ⅳ－12　包含層出土の土器（３）……28
図Ⅳ－13　包含層出土の石器（１）……30
図Ⅳ－14　包含層出土の石器（２）……31
図Ⅳ－15　遺物分布図（１）……32
図Ⅳ－16　遺物分布図（２）……33
図Ⅳ－17　遺物分布図（３）……34
図Ⅳ－18　遺物分布図（４）……35
図Ⅳ－19　遺物分布図（５）……36
図Ⅳ－20　遺物分布図（６）……37
図Ⅳ－21　遺物分布図（７）……38

Ⅴ　蛇内２遺跡

図Ⅴ－１　蛇内２遺跡調査範囲図……39
図Ⅴ－２　遺構位置図(平成22・23年度調査範囲)
　　……40
図Ⅴ－３　Ｈ－11（１）……41
図Ⅴ－４　Ｈ－11（２）……42
図Ⅴ－５　遺構・包含層出土の石器……42

表　目　次

Ⅰ　緒　　言

表Ⅰ－１　大平４遺跡　年度別検出遺構・
　　遺物点数一覧……３
表Ⅰ－２　大平４遺跡　出土土器点数一覧……３
表Ⅰ－３　大平４遺跡　出土石器等点数一覧……４
表Ⅰ－４　蛇内２遺跡　年度別検出遺構・
　　遺物点数一覧……４
表Ⅰ－５　蛇内２遺跡　出土遺物点数一覧……４

Ⅱ　遺跡の位置と環境

表Ⅱ－１　周辺の遺跡一覧……８

一覧表

表１　大平４遺跡　検出遺構規模一覧……43
表２　大平４遺跡　遺構出土遺物一覧……43
表３　大平４遺跡　遺構出土土器点数一覧……44
表４　大平４遺跡　遺構出土石器等点数一覧……44
表５　大平４遺跡　包含層出土土器点数一覧……44
表６　大平４遺跡　包含層出土石器等点数一覧……44
表７　大平４遺跡　遺構出土掲載土器一覧……45
表８　大平４遺跡　遺構出土掲載石器一覧……45
表９　大平４遺跡　包含層出土掲載土器一覧……45
表10　大平４遺跡　包含層出土掲載石器一覧……46
表11　蛇内２遺跡　検出遺構規模一覧……46
表12　蛇内２遺跡　遺構出土遺物一覧……46
表13　蛇内２遺跡　出土遺物点数一覧……46
表14　蛇内２遺跡　掲載石器一覧……46

図　版　目　次

図版１　大平４遺跡　調査状況・遺構（１）
図版２　大平４遺跡　遺構（２）
図版３　大平４遺跡　遺構出土の遺物（１）
図版４　大平４遺跡　遺構出土の遺物（２）・
　　包含層出土の土器（１）
図版５　大平４遺跡　包含層出土の土器（２）
図版６　大平４遺跡　包含層出土の土器（３）
図版７　大平４遺跡　包含層出土の土器（４）・
　　石器（１）
図版８　大平４遺跡　包含層出土の石器（２）
図版９　蛇内２遺跡　調査状況
図版10　蛇内２遺跡　Ｈ－11、掲載石器

Ⅰ　緒　　言

１　調査要項

事　業　名　北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査
事業委託者　独立行政法人　鉄道建設・運輸施設整備支援機構
事業受託者　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
遺　跡　名　大平４遺跡（北海道教育委員会登載番号：Ｂ－05－29）
　　蛇内２遺跡（北海道教育委員会登載番号：Ｂ－05－19）
所　在　地　大平４遺跡：上磯郡木古内町字大平60
　　蛇内２遺跡：上磯郡木古内町字札苅518－3
調 査 期 間　大平４遺跡：平成22年４月１日～平成23年３月31日
　　（発掘期間：平成22年７月７日～平成22年11月５日）
　　蛇内２遺跡：平成23年４月１日～平成24年３月31日
　　（発掘期間：平成23年８月22日～平成23年８月30日）
調 査 面 積　大平４遺跡：450㎡
　　蛇内２遺跡：　77㎡
調 査 体 制　大平４遺跡（平成22年度）
　　第１調査部　部長　千葉英一
　　第１調査部第３調査課　課長　鈴木　信
　　主査　立川トマス（調査担当者）
　　主査　芝田直人（調査担当者）
　　主任　酒井秀治（調査担当者）
　　蛇内２遺跡（平成23年度）
　　第２調査部　部長　三浦正人
　　第２調査部第２調査課　課長　熊谷仁志（調査担当者）
　　主任　佐藤和雄（調査担当者）

２　調査にいたる経緯

「北海道新幹線」事業は、全国新幹線鉄道整備法（昭和45年法律第71号）に基づき、整備計画が定められている。平成10年１月には、政府・与党整備新幹線検討委員会において、新規着工区間として３線３区間の着工が認められ、平成12年12月の同委員会では、すでに着工している区間と新たに着工する区間を併せて、平成13年から３線６区間として整備を推進することとなった。平成17年４月27日、北海道新幹線・新青森－新函館間の工事実施計画認可が国土交通省から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備機構（以下､｢鉄建機構」という）へ交付された。

鉄建機構は、北海道教育委員会（以下､｢道教委」という）に北海道新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。それを受けて道教委は路線内および付帯施設建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を実施し、木古内町内では蛇内２遺跡ほか５遺跡について工事計画の変更が困難な場合は発掘調査が必要とされた。

大平４遺跡は、平成22年８月に道教委から北海道埋蔵文化財センター（以下、「センター」という）に対して、新幹線本線工事および付帯工事により通行できなくなる町道大平２線の切り替えに伴う補償道路部分について調査の指示があり、センターは調査を受諾し、計画を立案、発掘調査を実施した。また、10月に道教委からセンターに対し、町道の振替工事に伴う部分について調査の指示があり、センターは調査を受諾し、計画を立案、発掘調査を実施した。

蛇内２遺跡は、平成23年７月に道教委からセンターに対して、平成22年度調査範囲に隣接する工事用道路の迂回路部分について調査の指示があり、センターは調査を受諾し、計画を立案、発掘調査を実施した。

３　調査の経過

（１）発掘経過

大平４遺跡（平成22年度）

７月１日：本線部分、重機による表土除去開始。

７月７日：基準杭・方格杭打設。調査開始。

７月23日：本線部分の調査を終了。

９月15日：補償道路部分、重機による表土除去開始。

９月16日：基準杭・方格杭打設。

９月22日：調査を開始。

９月30日：補償道路部分の調査を終了。埋め戻し。遺構は剥片集中２か所を検出した。遺物は縄文時代中期のものが出土。土器67点、石器等7,120点、合計7,187点が出土した。

10月25日：町道振替部分、重機による表土除去開始。

10月27日：基準杭・方格杭打設。調査を開始。

11月５日：町道振替部分の調査を終了。埋め戻し。遺構は住居跡２軒、土坑２基を検出した。遺物は縄文時代早期後半・前期後半・晩期中葉のものが出土。土器596点、石器等5,779点、合計6,375点が出土した。

蛇内２遺跡（平成23年度）

８月22日：重機による表土除去。

８月24日：基準杭・方格杭打設。

８月24日：調査を開始。

８月30日：調査終了。遺構は平成22年度調査時に検出した住居跡の続きを１軒検出した。遺物は縄文時代前期後半・後期前葉のものが出土。土器116点、石器等59点、合計175点が出土した。

（２）整理経過

平成22年度：（大平４遺跡）11月４日から整理作業開始。遺物注記、破片接合、土器復元、遺構素図作成、写真整理。

平成23年度：（大平４遺跡）４月１日から遺物実測・墨入れ、写真撮影、図版作成、原稿執筆。

（蛇内２遺跡）11月14日から整理作業開始。遺物注記、破片接合、遺物実測・墨入れ、遺構素図作成、写真整理・撮影、図版作成、原稿執筆。

４　調査結果の概要

大平４遺跡：平成21・22年度の２か年にわたって調査を行った。平成22年度に報告した本線部分では縄文時代早期後半・前期後半・晩期中葉の遺構・遺物が検出されている。遺構は土坑26基、礫集中１か所、焼土３か所、剥片集中14か所が検出された（北埋調報280）。

今回報告する補償道路部分では縄文時代中期、町道振替部分では縄文時代早期後半・前期後半・晩期中葉の遺構・遺物を検出している。遺構は、補償道路部分から剥片集中２か所（中期）、町道振替部分から竪穴住居跡２軒（早期後半）、土坑２基（前期後半・晩期中葉）を検出した。遺物は土器663点、石器等12,899点、合計13,562点が出土している（表Ⅰ－１～３）。

蛇内２遺跡：平成21・22年度に続く３年目の調査である。平成21・22年度調査部分では、縄文時代早期後半・前期・中期後半・後期前葉の遺構・遺物が検出されている。遺構は、住居跡15軒、土坑96基が確認されている（北埋調報281）。

今回報告する平成23年度調査範囲からは、縄文時代前期後半と後期前葉の遺物が出土している。遺構は、平成22年度に調査を行った竪穴住居跡（Ｈ－11）の東側未調査部分を検出した。新たに柱穴１基を確認した。遺物は土器116点、石器等59点、合計175点が出土している（表Ⅰ－４・５）。（酒井）

表Ⅰ－１　大平４遺跡　年度別検出遺構・遺物点数一覧

調査年度	調査範囲	調査面積（㎡）	遺構名					遺物		
			住居跡	土坑	焼土	集石	剥片集中	土器	石器等	合計
平成21・22年度	本線部分	2,733	0	26	3	1	14	10,265	30,174	40,439
平成22年度	補償道路部分	350	0	0	0	0	2	67	7,120	7,187
平成22年度	町道振替部分	100	2	2	0	0	0	596	5,779	6,375
合　計		3,183	2	28	3	1	16	10,928	43,073	54,001

表Ⅰ－２　大平４遺跡　出土土器点数一覧

種別	調査範囲	分類								合計
		Ⅰ群b－3類	Ⅰ群b－4類	Ⅱ群	Ⅱ群b類	Ⅲ群	Ⅲ群b類	Ⅳ群	Ⅴ群b類	
遺構	補償道路部分	0	0	3	0	19	0	0	0	22
	町道振替部分	0	2	0	4	0	0	0	2	8
包含層	補償道路部分	0	0	1	0	43	0	1	0	45
	町道振替部分	1	182	0	401	0	1	0	3	588
合　計		1	184	4	405	62	1	1	5	663

表Ⅰ－３　大平４遺跡　出土石器等点数一覧

種別	調査範囲	分類																合計
		石鏃	石錐	石槍・ナイフ片	つまみ付きナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク	石核	剥片	石斧片	すり石	たたき石	扁平打製石器	加工痕ある礫	礫・礫片	
遺構	補償道路部分	1	0	0	2	3	4	8	0	3	5,876	0	0	2	0	0	5	5,904
	町道振替部分	0	0	0	3	1	1	0	0	0	17	0	1	0	0	0	7	30
包含層	補償道路部分	1	0	1	0	6	1	11	4	5	1,174	0	0	4	0	2	7	1,216
	町道振替部分	0	2	2	2	8	1	22	5	13	5,392	2	2	13	1	3	281	5,749
合計		2	2	3	7	18	7	41	9	21	12,459	2	3	19	1	5	300	12,899

表Ⅰ－４　蛇内２遺跡　年度別検出遺構・遺物点数一覧

調査年度	調査面積（㎡）	遺構名						遺物		
		住居跡	土坑	焼土	集石	剥片集中	一括土器	土器	石器等	合計
平成21年度	10,430	8	90	14	1	9	5	32,888	93,284	126,172
平成22年度	850	7	6	0	0	0	0			
平成23年度	77	(1)	0	0	0	0	0	116	59	175
合計	11,357	15	96	14	1	9	5	33,004	93,343	126,347

（　）は前年度調査の続き

表Ⅰ－５　蛇内２遺跡　出土遺物点数一覧

種別	分類							合計
	土器		石器類					
	Ⅱ群b類	Ⅳ群a類	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	剥片	礫・礫片	
遺構	27	0	2	0	1	10	8	48
包含層	71	18	0	1	1	13	23	127
合計	98	18	2	1	2	23	31	175

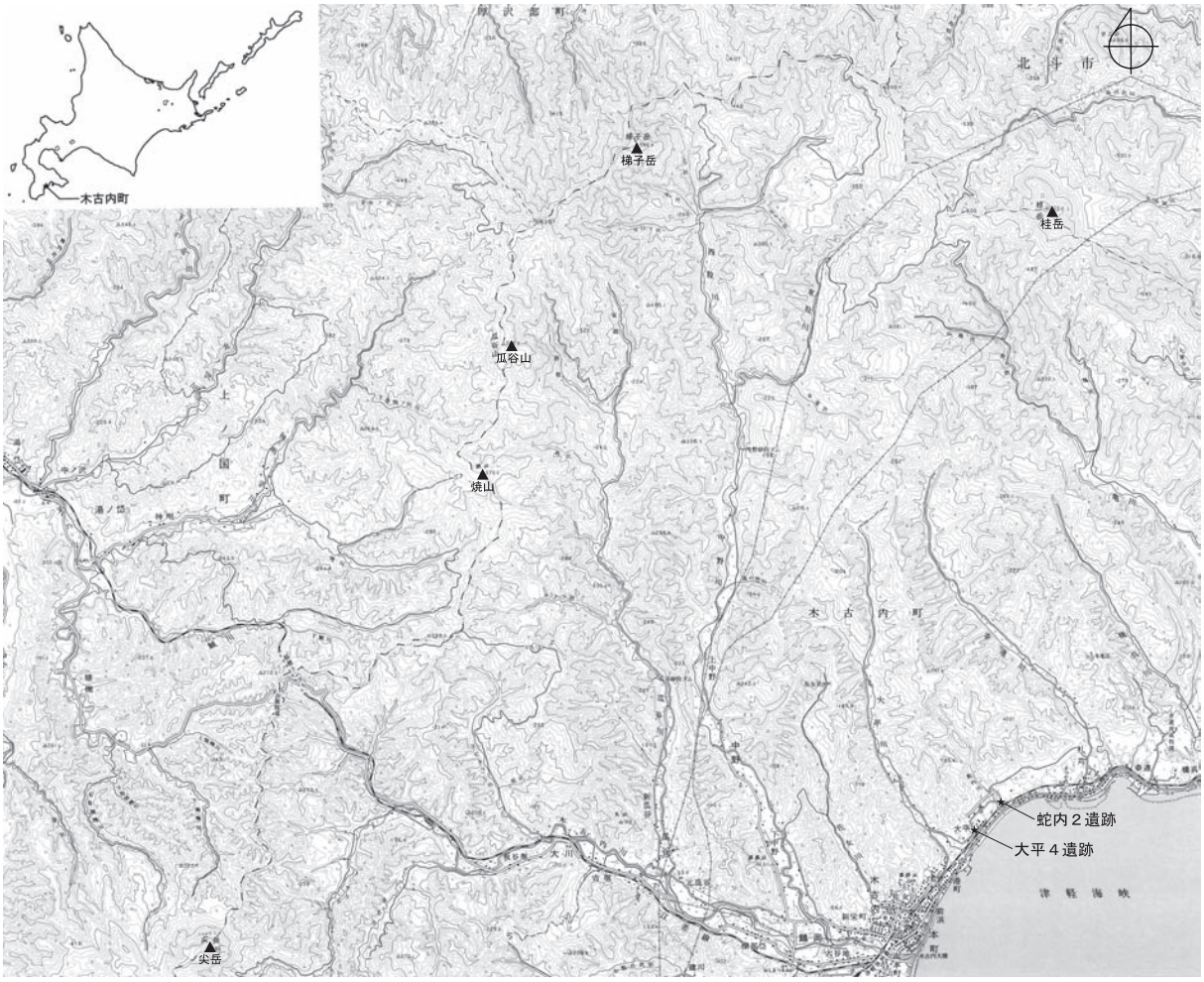
Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　位置と環境

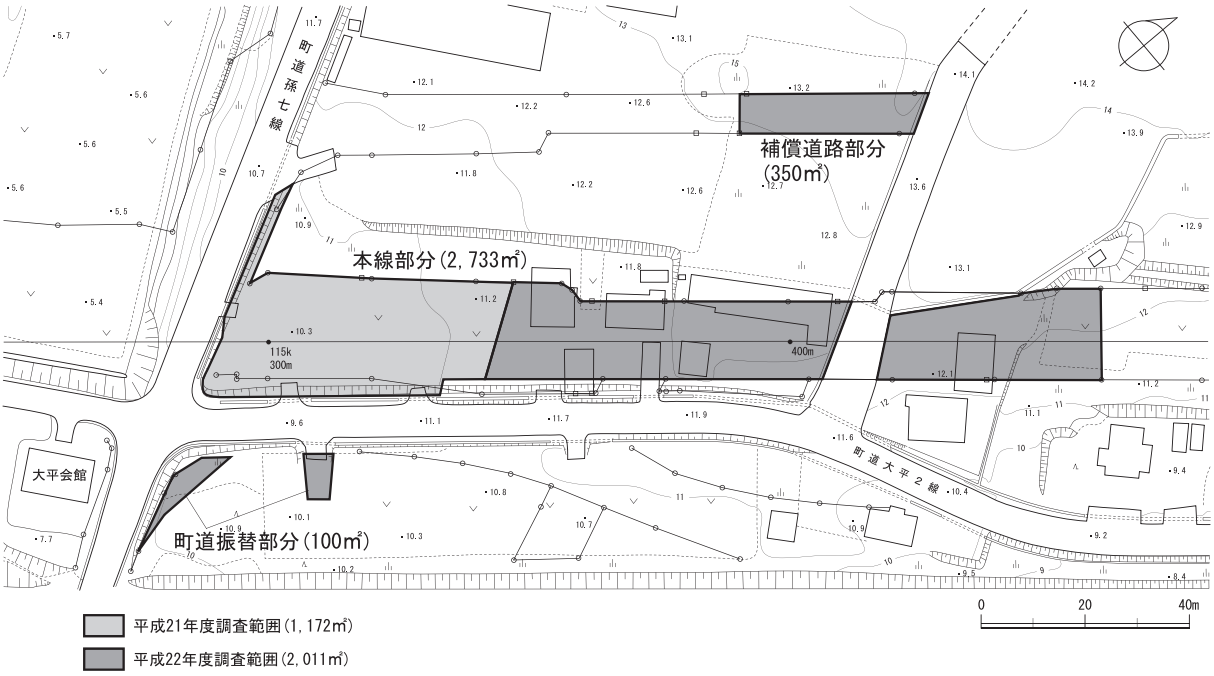
大平４遺跡・蛇内２遺跡の所在する上磯郡木古内町は、北海道の南西部に位置する渡島半島の南側にある。亀田半島と松前半島の境目にあたる。北東側で北斗市、北側で厚沢部町、西側で上ノ国町、南西側で知内町と町界を接している。函館市からは西へ約40㎞である。町域はおよそ東西21㎞、南北18㎞、総面積は222㎢、人口は平成23年で5,215人である。南東側は津軽海峡に面しており、北～北西側は300～700ｍ級の桂岳、梯子岳、瓜谷山、焼山、尖岳、袴腰岳などの山々に囲まれている。海岸線には低位の海岸段丘が発達し、この段丘上に多くの遺跡が立地している。両遺跡は木古内町の西側、市街地寄りの海岸線付近に位置している。遺跡からは南西側に松前半島の燈明岳、岩部岳、大千軒岳などが見え、南東側には天気の良い時は青森県の下北半島を望むことが出来る。

大平４遺跡は、ＪＲ木古内駅から北東へ約２㎞離れたところに位置する。孫七川下流左岸にあり、河口からは約200ｍ遡った海岸段丘上の平坦面に立地している。標高は補償道路部分で12～13ｍ、町道振替部分で７～10ｍである。

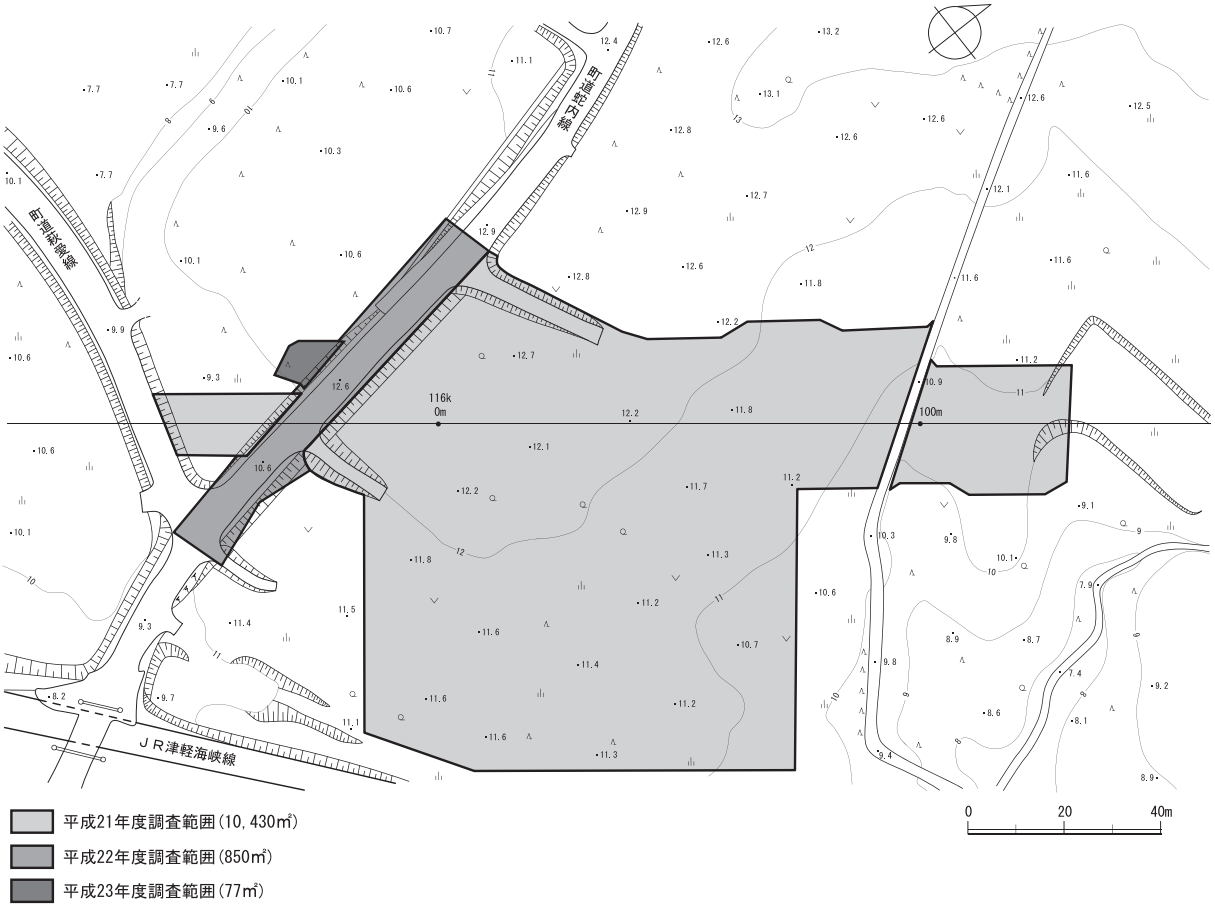
蛇内２遺跡は、ＪＲ木古内駅から北東へ約2.8㎞離れたところに位置する。蛇内川下流左岸にあり、河口からは約200ｍ遡った海岸段丘上に立地している。標高は11～12ｍである。　（酒井）



図Ⅱ－１　遺跡の位置と木古内町の地形　（平成20年国土地理院発行の50000分の１地形図「木古内」を加工して使用）



図Ⅱ－２　大平４遺跡周辺の地形と調査区



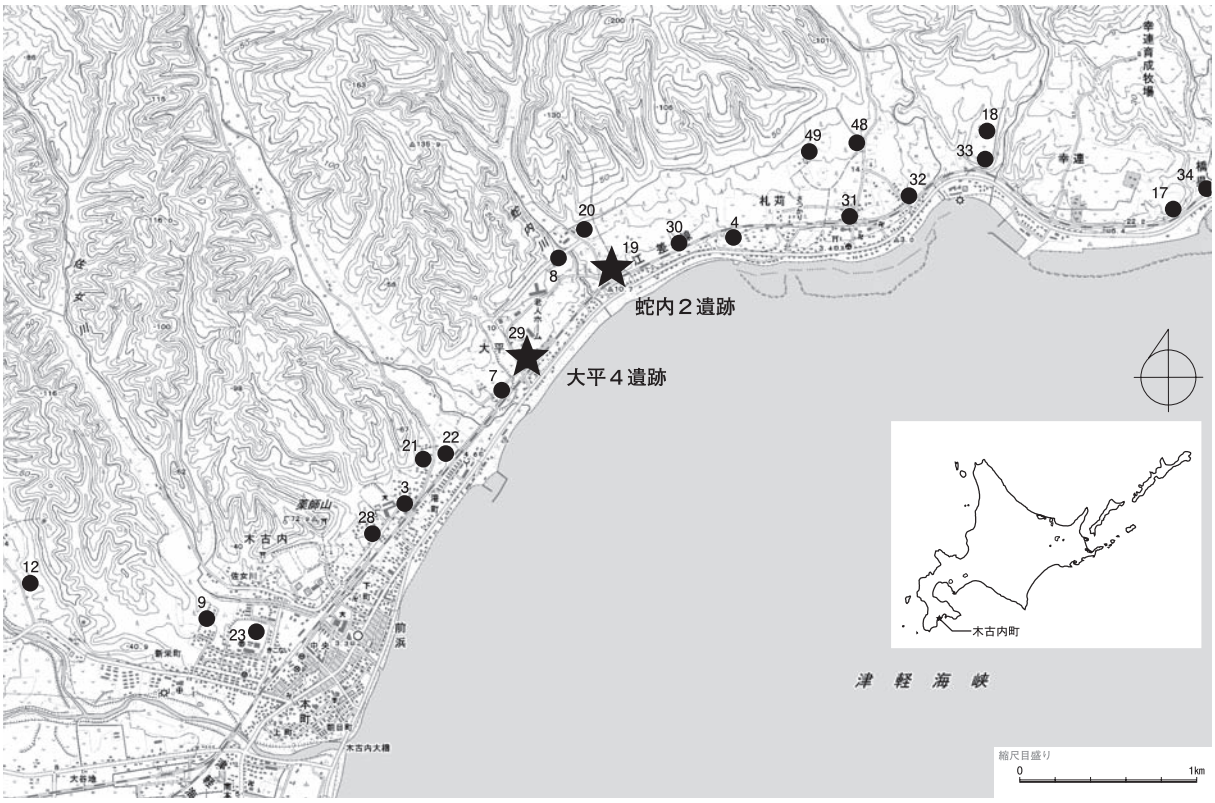
図Ⅱ－３　蛇内２遺跡周辺の地形と調査区

２　周辺の遺跡

木古内町内の遺跡は、海岸線に沿った段丘上に集中することが知られている。現在、木古内町内で周知されている遺跡は51か所である。このうち、これまでに調査あるいは一部調査の行われた遺跡は21遺跡である。近年、緊急発掘調査が増えており、農道整備事業で９遺跡、砂利採取事業で２遺跡、北海道新幹線建設事業で５遺跡、高規格道路建設事業で３遺跡の調査が行われた。大平４遺跡・蛇内２遺跡の周辺に所在する遺跡は、木古内市街地側に木古内遺跡（３）・木古内２遺跡（28）・大平遺跡（７）・大平２遺跡（21）・大平３遺跡（22）など、北斗市側に蛇内遺跡（８）・蛇内３遺跡（20）・札苅遺跡（４）・札苅２遺跡（30）などがある。このうち、木古内遺跡・木古内２遺跡・大平遺跡・蛇内遺跡・札苅遺跡については発掘調査が行われている。（　）は登載番号。

木古内遺跡：平成22・23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。主に縄文早期後半・前期後半・後期前葉・擦文文化期の遺構・遺物が確認されている。遺構は、竪穴住居跡32軒、土坑152基などのほか、擦文文化期とみられる溝状遺構が検出された（「調査年報」23・24（北海道埋蔵文化財センター 2011・2012）。擦文文化期の竪穴住居跡を木古内町で初めて検出した。平成23年度現在、整理作業中である。

木古内２遺跡：平成22・23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。主に縄文前期・後期の遺構・遺物が確認されている。遺構は、縄文前期後半の竪穴式住居跡６軒などが検出されている（「調査年報」23・24（北海道埋蔵文化財センター 2011・2012）。平成22年度調査範囲については、『木古内町　木古内２遺跡』北埋調報278（北海道埋蔵文化財センター 2011）が刊行されている。平成23年度に調査を行った範囲については整理作業中である。



図Ⅱ－４　周辺の遺跡

（国土地理院刊行の数値地図25000（地図画像）『木古内』を加工して使用（平成18年発行））

大平遺跡：平成21～23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。縄文早期～晩期・擦文文化期の遺構･遺物が検出されている。遺構は竪穴住居跡55軒、土坑230基などが検出されている。擦文文化期の竪穴住居跡や縄文前期後半の竪穴住居跡、縄文前期後半を主とした盛土遺構、フラスコ状土坑などが確認されている（「調査年報」23・24（北海道埋蔵文化財センター 2011・2012）。平成21年度に調査を行った範囲については『木古内町　大平遺跡・大平４遺跡』（北埋調報280）が刊行されている。平成22・23年度に調査を行った範囲については、平成23年度現在、整理作業中である。

蛇内遺跡：平成12年度に農道整備事業に伴う発掘調査が行われた。主に縄文時代前期後半～中期前半の遺構・遺物が検出された。遺構は、竪穴住居跡８軒、土坑39基、柱穴状ピット64基などである。前期後半の捨て場遺構が確認されている。歯形土製品が出土している。『蛇内遺跡』（木古内町教育委員会2004）で報告されている。

札苅遺跡：昭和46・47年度に北海道開拓記念館による学術調査、昭和48年度に国道拡幅に伴う発掘調査、昭和60年度に津軽海峡線に関わる発掘調査が行われた。縄文晩期中葉・近世の遺構・遺物が検出された。遺構は、竪穴住居跡２軒、土坑41基などである。『札苅遺跡』（木古内町教育委員会1974）、『札苅』（北海道開拓記念館1976）、『木古内町　札苅遺跡』北埋調報34（北海道埋蔵文化財センター1986）で報告されている。（酒井）

表Ⅱ－１　周辺の遺跡一覧

登載番号	遺　跡　名	種　別	時　期	調　査　歴（報告年）
Ｂ－05－03	木古内遺跡	集落跡	縄文（前期・中期）・擦文	2010・2011　道埋文
Ｂ－05－04	札苅遺跡	集落跡・墳墓	縄文（晩期）・近世	1971・1972　北海道開拓記念館（1976）
				1973　町教委（1974）
				1983　道埋文（1986）
Ｂ－05－07	大平遺跡	集落跡・盛土	縄文（早期～晩期）・擦文	2009～2011　道埋文（2011）
Ｂ－05－08	蛇内遺跡	集落跡	縄文（前期～後期）	2000　町教委（2004）
Ｂ－05－09	新栄町遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期）	
Ｂ－05－12	中野Ａ遺跡	遺物包含地	縄文	
Ｂ－05－17	橋呉遺跡	遺物包含地	縄文・続縄文	
Ｂ－05－18	幸連遺跡	遺物包含地	縄文（中期・後期）	
Ｂ－05－19	蛇内２遺跡	集落跡・土坑	縄文（早期～晩期）	2009～2011　道埋文（2011・2012本書）
Ｂ－05－20	蛇内３遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期）	
Ｂ－05－21	大平２遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期）	
Ｂ－05－22	大平３遺跡	遺物包含地	縄文（中期)	
Ｂ－05－23	高校高台遺跡	遺物包含地	縄文（後期・晩期)	
Ｂ－05－28	木古内２遺跡	集落跡	縄文（前期）	2010・2011　道埋文（2011）
Ｂ－05－29	大平４遺跡	集落跡・墳墓	縄文（早期～中期・晩期）	2009・2010　道埋文（2011・2012本書）
Ｂ－05－30	札苅２遺跡	遺物包含地	不明	
Ｂ－05－31	札苅３遺跡	遺物包含地	不明	
Ｂ－05－32	札苅４遺跡	遺物包含地	不明	
Ｂ－05－33	幸連２遺跡	遺物包含地	不明	
Ｂ－05－34	橋呉２遺跡	遺物包含地	不明	
Ｂ－05－48	札苅５遺跡	集落跡	縄文（早期・前期・後期）	2011　道埋文
Ｂ－05－49	札苅６遺跡	集落跡	縄文（中期・後期）	2011　道埋文

町教委：木古内町教育委員会、道埋文：北海道埋蔵文化財センター

Ⅲ　調査の方法

１　調査範囲

（１）調査区の設定と座標値

ａ　大平４遺跡

平成21年度調査の際に調査区の設定を行っている。調査区の設定の際には、計画路線のうち路線中心線115ｋ100ｍ～115ｋ500ｍが直線であることから、これを基線とした。大平遺跡・大平４遺跡が同系の座標に入るように基線に対して平行・直交する方格を組み、方格設定の原点として115ｋ100ｍ～115ｋ500ｍ点間の115ｋ300ｍ（調査方格名称M40）･115ｋ400ｍ（調査方格名称M60）を選定した。平成22年度の調査範囲は路線中心線を含んでいないことから、この平成21年度に設定した調査区を利用して平成22年度調査区を設定している。

方格の間隔は５ｍとした。方格を区画する線にはアルファベット（北東－南西方向）とアラビア数字（北西－南東方向）を与え、調査区（グリッド）の名称は方格の西角で交差する２つの線名を合わせて読む。さらに、５ｍ方格を2.5ｍ四方に分割して、反時計回りに西角からａ・ｂ・ｃ・ｄと呼ぶ小調査区（小グリッド）を設置し、調査の便宜を図った。

平成22年度調査範囲の平面直角座標は第ＸＩ系で、以下のとおりである。合わせて、記載した杭の杭高を記す。

補償道路部分：調査方格名称 Ｄ60杭　　Ｘ＝－256234.841　Ｙ＝16622.650
北緯41度41分34.94057秒　東経140度26分58.90848秒　　杭高12.867ｍ

町道振替部分：調査方格名称 Ｒ37杭　　Ｘ＝－256367.984　Ｙ＝16602.704
北緯41度41分30.62612秒　東経140度26分58.03251秒　　杭高8.707ｍ
調査方格名称 Ｒ42杭　　Ｘ＝－256348.791　Ｙ＝16618.723
北緯41度41分31.24708秒　東経140度26分58.72761秒　　杭高9.996ｍ

この平面直角座標は「世界測地系」に基づいた「測地成果2000」の座標である。

ｂ　蛇内２遺跡

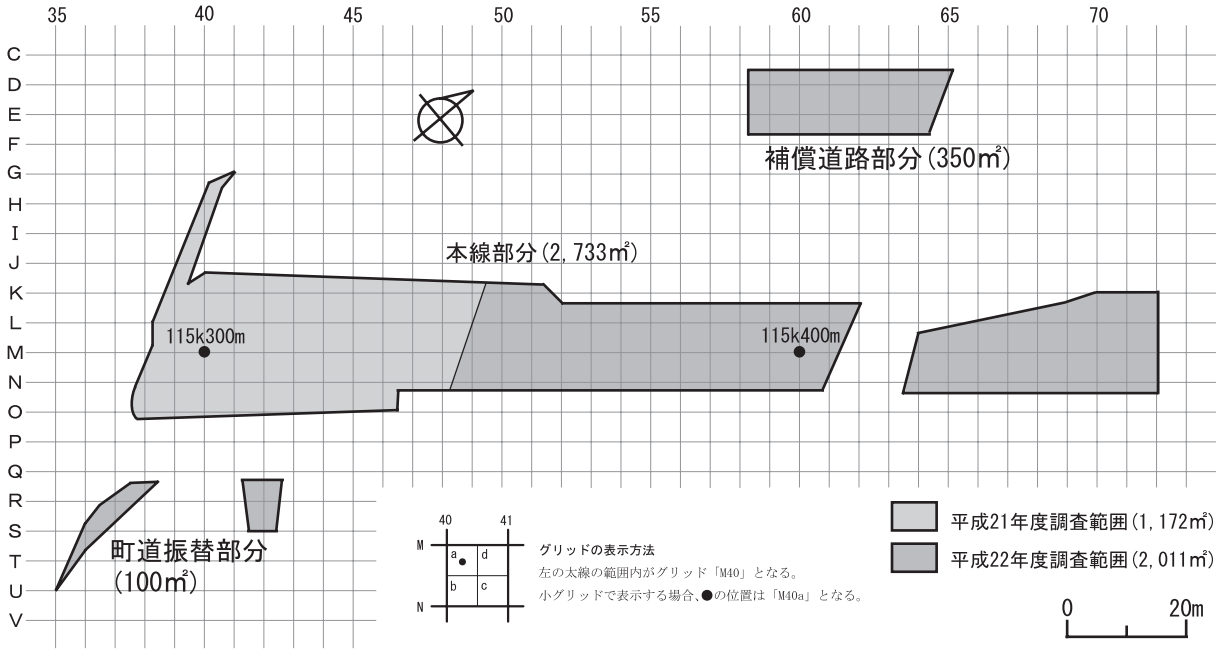
平成21年度調査の際に調査区の設定を行っている。調査区の設定の際には、計画路線のうち路線中心線115ｋ900ｍ～116ｋ100ｍが直線であることから、これを基線とした。調査区全体が座標に入るように基線に対して平行･直交する方格を組み、方格設定の原点として116ｋ000ｍ（調査方格名称Ｊ20）・116ｋ100ｍ（調査方格名称Ｊ40）を選定した。平成23年度の調査範囲は路線中心線を含んでいないことから、この平成21年度に設定した調査区を利用して平成23年度調査区を設定している。

方格の間隔は５ｍとした。方格を区画する線にはアルファベット（北東－南西方向）とアラビア数字（北西－南東方向）を与え、調査区（グリッド）の名称は方格の西角で交差する２つの線名を合わせて読む。さらに、５ｍ方格を2.5ｍ四方に分割して、反時計回りに西角からａ・ｂ・ｃ・ｄと呼ぶ小調査区（小グリッド）を設置し、調査の便宜を図った。

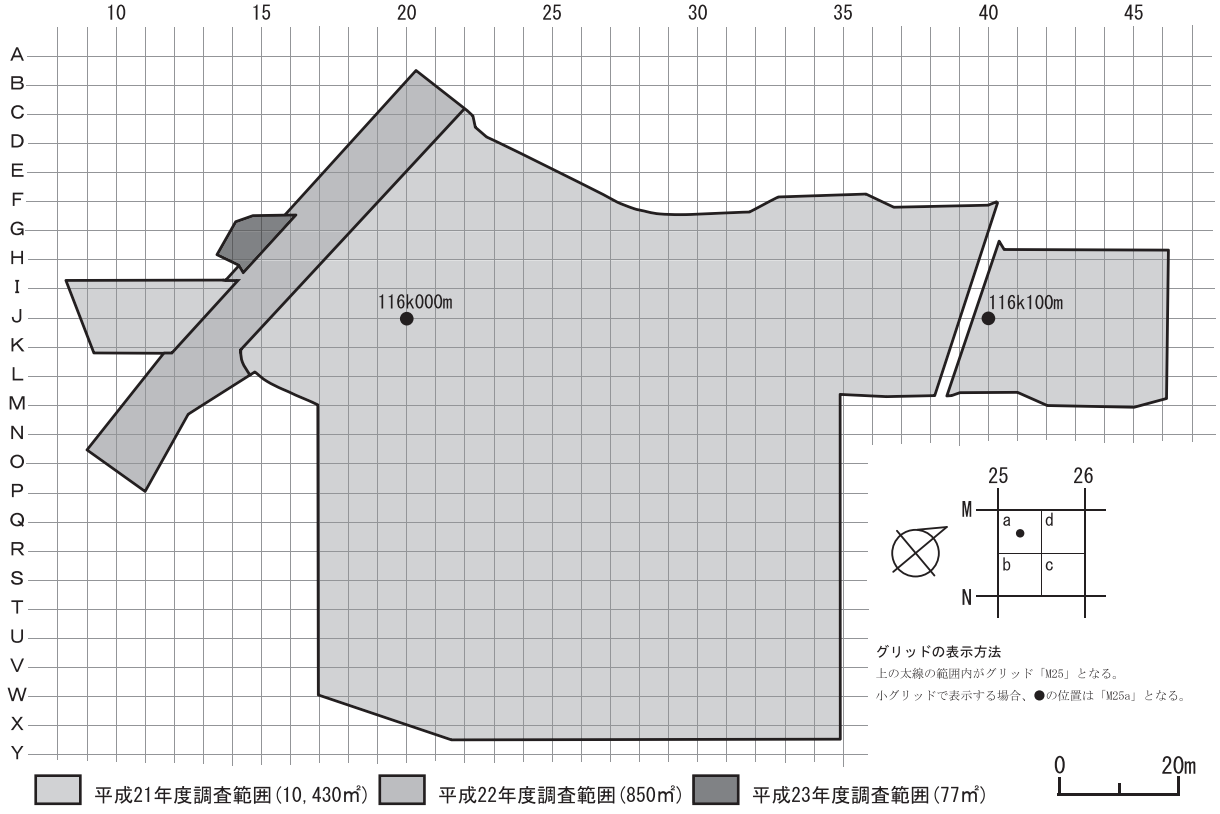
平成23年度調査範囲の平面直角座標は第ＸＩ系で、以下のとおりである。合わせて、記載した杭の杭高を記す。

調査方格名称 Ｇ15杭　　Ｘ＝－255812.611　Ｙ＝17014.118
北緯41度41分48.59772秒　東経140度27分15.88221秒　　杭高11.533ｍ

この平面直角座標は「世界測地系」に基づいた「測地成果2000」の座標である。



図Ⅲ－１　大平４遺跡　調査区設定図・年度別調査範囲図



図Ⅲ－２　蛇内２遺跡　調査区設定図・年度別調査範囲図

２　土工

（１）掘削

掘削作業には主に移植ゴテ、ねじり鎌を使用した。遺構・遺物の検出状況に応じて、竹べら・竹串を使用して遺構・遺物を傷つけること事のないように配慮して掘削した。精査・清掃の際には炉箒、ブラシなどを併用した。移植ゴテでは掘ることが困難な場所や、遺構・遺物の見られない範囲、撹乱などではスコップを併用した。

遺構は乾燥や降雨による流水によって崩壊しやすいため、ジョウロや噴霧器による適度な散水、コンパネやブルーシートをかけるなどの乾燥や降雨への対策をとりながら調査を進めた。また、黒色腐植土は水分を含むと滑りやすくなるため、排土場に到る道や通路に歩み板や麻袋を敷いて転倒防止に努めた。

（２）埋め戻し

大平４遺跡の補償道路部分・町道振替部分は、調査終了後に重機による埋め戻しを行った。

３　測量と記録

（１）測量・図化

５ｍ×５ｍ方眼の交点に打設した方格杭を平面測量の基準とした。20ｍごとに打設した基準杭にはそれぞれの杭に打たれた釘の標高を記入し、この標高を水準測量の基準とした。水準測量にはオートレベルと１㎜目盛のアルミ製スタッフを用いて、基準杭の標高と測量対象の比高を直接観察した。平面測量は測量杭を基準として手測りによって行った。

遺構･遺物の出土状況等の実測図は、Ｂ３版セクションフィルムに基本的に１／20縮尺で記録した。遺物出土状況等の詳細図については１／10縮尺を用い、図版にはそれぞれスケールを付した。（酒井）

（２）現場での撮影

a　撮影方法

発掘現場での撮影は６×７判カメラと35㎜判カメラを使用した。また、写真整理用としてデジタルカメラを使用した。基本的にモノクロ、カラーリバーサルとも２コマを同露出で撮影し、１セットとした。撮影の際は撮影方向、出土位置など出来るだけ多くの情報を入れることに留意した。

b　撮影機材

撮影機材・フィルムは下記を使用した。

カ　メ　ラ：Mamiya RZ67PROⅡ（6×7判）、ニコン Ｆ３（35㎜判）、
　　カシオ EX－Z2000・EX－Z80・EX－H30（デジタルカメラ）

フィルム：コダック Ｔ－Ｍａｘ100（6×7判 モノクロ）、フジフィルム ネオパン100ACROS（6×7判 カラーリバーサル）、フジフィルム PROVIA100F（35㎜判 カラーリバーサル）

c　撮影データ

発掘現場での撮影データ（カット№、撮影日、被写体、出土位置、層位、撮影方向、フィルム種類）を野帳に記入し、デジタルカメラの画像と照合して写真台帳を作成した。（立川）

４　整理の方法

（１）一次整理作業

遺跡内より出土した土器・石器等は、野外作業と並行して現地で水洗・乾燥・分類・遺物カードの添付・遺物台帳の作成・注記作業を行った。水洗はボンドブラシや歯ブラシなどを使用して、遺物に

付着した土を洗い落とした。乾燥は新聞紙等を敷いた乾燥かごに遺物を入れて、屋外もしくは屋内において行った。室内では除湿機などを用いて乾燥を促した。水洗・乾燥の終了した遺物は、収集の単位ごとに分類して遺物名と点数を決定し、それぞれに遺物番号を与えた後に、遺物台帳に登録した。

遺物台帳は、土器・土製品と石器等に分けて作成している。Ｂ５判の様式を印刷して手作業で記入し、遺構・包含層を分けて全遺物を登録した台帳を作成した。台帳には出土遺構またはグリッド名のほか、遺物番号・取上日・層位・遺物名・分類・材質（石器等の場合）・点数その他を記入した。台帳登録の終わった遺物は、台帳と同一の内容を記入した遺物カードと共に遺物番号ごとにチャック付ポリ袋に納めた。遺物カードは土器等と石器等で色を分けている。大平４遺跡では、土器を「黄緑色」石器等を「白色」とした。蛇内２遺跡では土器を「灰色」石器等を「黄色」とした。

注記は手書きによって行った。注記対象は、土器片が微細なものを除く大多数、石器等が礫・礫片を除く狭義の石器である。注記できなかった遺物は、遺物番号ごとに「未注記」と記入したポリ袋に納め、注記済みのものと同封した。注記は、遺跡名の略号、遺構番号またはグリッド名、遺物番号、出土層位の順に記した。遺跡の略号は、大平４遺跡が「オ４」、蛇内２遺跡が「へ２」とした。

注記例　大平４遺跡　　蛇内２遺跡

遺　構：オ４．Ｈ－１．２．床面　　遺　構：へ２．Ｈ－11．２．フク土

包含層：オ４．Ｄ60．３．Ⅱ　　包含層：へ２．Ｇ15．３．Ⅱ

なお、遺物台帳は手作業で紙へ記入したものを基にパソコン上で表計算ソフト（Microsoft Excel）に入力し管理している。整理作業の進捗により遺物の分類等に変更があった場合には、手書きの台帳とExcelのデータを同時に修正した。

一次整理作業の終了した遺物は、現地調査終了後に北海道埋蔵文化財センターへ搬送した。

（２）二次整理作業

図面等

遺構や遺物出土状況の原図は訂正などの作業を行った。訂正や変更があった場合はその箇所が確認できるように原図に書き込んでいる。その後、原図から１㎜方眼の方眼紙に鉛筆で素図を作成している。素図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト（Adobe Illustrator CS2・CS5.1）により補正・加工して版下を作成した。（酒井）

土器の整理

土器については、分類の見直しと細分類を行いながら、接合作業を中心に整理を進めた。作業に当たっては遺構と包含層の接合、同一個体の破片を把握することに努めた。接合作業の結果は、分類・出土地点・遺物番号・点数・同一個体破片の有無などを接合台帳に記入した。接合関係が認められた個体は、接合の程度によりＡ～Ｄの４段階に分類した。Ａは完形もしくは口縁～底部が全体の１／３以上残存するもの。Ｂは口縁～胴部または胴～底部が全体の１／３以上残存するもの。Ｃは口縁～胴部または胴～底部が全体の１／３未満残存するもの。Ｄは縄文または無文のみの胴部が接合したものである。概ねＡ・Ｂは立体復元、Ｃは土器拓本、Ｄは未掲載としたが、ＢとＣは個体ごとに適宜判断し図化した。未接合の破片資料のうち、文様構成・器形のわかる口縁部・胴部・底部については、土器拓本を作成した。立体復元は、遺物台帳と破片の照合→再接合→破片接着→樹脂充填の手順をとった。立体復元と拓本断面については人手による原寸実測を行い、２／３縮尺素図をもとに墨入れを行った。接合・復元作業と並行して、集計表・分布図を作成した。（芝田）

石器等の整理

石器については、分類の見直しを行いながら、破損品の接合作業を行った。遺構・包含層ごとに完

形品を中心に人手による原寸実測を行い、剥片石器は原寸で、礫石器は２／３縮尺素図をもとに墨入れを行った。これらの作業と並行して集計表・分布図の作成を行った。（酒井）

写真

ａ　スタジオ撮影

撮影方法：光源は撮影用レフランプを使用している。土器片や石器などの俯瞰撮影はトヨ無影撮影台を使用して撮影した。遺物は発泡スチロールや脱脂粘土などで傾きや高さを調整した。復元土器は蛍光剤が少ないスーパーホワイトの背景紙を撮影台に垂らして立面撮影を行った。モノクロ、カラーリバーサルともに同露出で２コマ撮影し、１セットとした。

撮影機材：スタンドはトヨウェイトスタンドを使用した。カメラはMamiya RZ67PROⅡを使用した。フィルムはモノクロがコダック Ｔ－Ｍａｘ100、カラーリバーサルがコダックＴ64を使用した。

ｂ　現像

フィルム現像：モノクロフィルムは自動現像機（ILFORD ILFOLAB FP40）を使用して、自家処理を行っている。

ペーパー現像：モノクロ写真の焼付けはフジプロバリグレードWPを使用し、写真図版を作成した。

ｃ　保管・管理

フィルムは１コマずつ番号をつけ、フィルム種類ごとの連番で管理している。フィルムに触れる時は手袋を着用し、油分からの変化・劣化・カビの発生を防いでいる。同露出で撮影した２コマのうち１コマはオリジナルフィルムとして使用していない。使用頻度や貸し出し依頼の多い写真は、デュープフィルムの作成やスキャニングによるデータ化で対応している。写真アルバムはすべての調査・整理作業が終了した後、常温・定湿の特別収蔵庫に保管される。（立川）

５　保管

今回の報告に関する出土遺物については、調査年度・遺跡名・遺物名・分類・収納番号等を記したラベルを貼ったコンテナに収納し、収納台帳を作成した。図面等は、すべてＡ２判図面ファイルに調査年度・遺跡名を付け収納している。図面等と遺物は、収納台帳と共に木古内町へ返却される予定である。写真フィルム等は、北海道埋蔵文化財センターにて保管される。

６　遺跡の土層

大平４遺跡、蛇内２遺跡の基本的な層序は同じである。

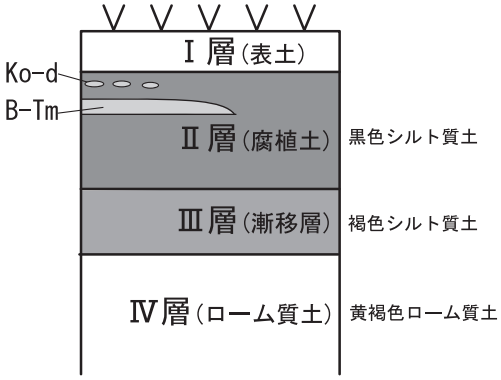
Ⅰ層：表土・耕作土など

Ⅱ層：腐植土層：黒色シルト質土。縄文時代早期～晩期の遺物を包含している。ところによっては、駒ケ岳ｄ降下火山灰（Ko－ｄ、1640年降灰）、白頭山-苫小牧火山灰（Ｂ－Tm、10世紀前半降灰）が斑状に確認できる。

Ⅲ層：漸移層：褐色シルト質土。Ⅱ層とⅣ層の漸移層。縄文時代早期の遺物を包含している。

Ⅳ層：ローム質土層：黄褐色ローム質土。

（酒井）



図Ⅲ－３　土層柱状模式図

7　遺物の分類

（1）土器

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文文化期のものはⅦ群である。また、ａ・ｂ類に二分したものはａ類が前半、ｂ類が後半を意味する。同様にａ・ｂ・ｃ類に三分したものはａ類が前葉、ｂ類が中葉、ｃ類が後葉を意味する。さらに細分を必要とする場合は、アラビア数字の枝番号を付した。なお、今回の調査では、Ⅵ群・Ⅶ群は出土していない。

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群

ａ類　貝殻・沈線文系土器群および条痕文系平底土器群

ｂ類　縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの付された縄文系平底土器群

ｂ－１類　東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に相当するもの

ｂ－２類　コッタロ式に相当するもの

ｂ－３類　中茶路式に相当するもの

ｂ－４類　東釧路Ⅳ式に相当するもの

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群

ａ類　縄文の施された丸底・尖底の土器群

ｂ類　円筒土器下層式土器群

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群

ａ類　円筒土器上層ａ式・ｂ式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの

ｂ類　円筒土器上層式に後続する土器群

ｂ－１類　榎林式に相当するもの

ｂ－２類　大安在Ｂ式に相当するもの

ｂ－３類　ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群

ａ類　天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂３式に相当するもの

ｂ類　ウサクマイＣ式、手稲式、鮭澗（ホッケマ）式に相当するもの

ｃ類　堂林式、三ツ谷式、湯の里３式に相当するもの

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器群

ａ類　大洞Ｂ式、大洞Ｂ－Ｃ式とこれに並行する在地の土器群

ｂ類　大洞C_1式、大洞C_2式とこれに並行する在地の土器群

ｃ類　大洞Ａ式、大洞Ａ′式とこれに並行する在地の土器群　（芝田）

（2）石器等

石器は下記の分類を使用した。点数には破片を含む。

剥片石器群：石鏃、石槍、ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核、Ｒフレイク、Ｕフレイク、剥片

礫石器群：石斧、たたき石、すり石、扁平打製石器、加工痕のある礫、礫・礫片　（酒井）

Ⅳ　大平４遺跡

１　概要

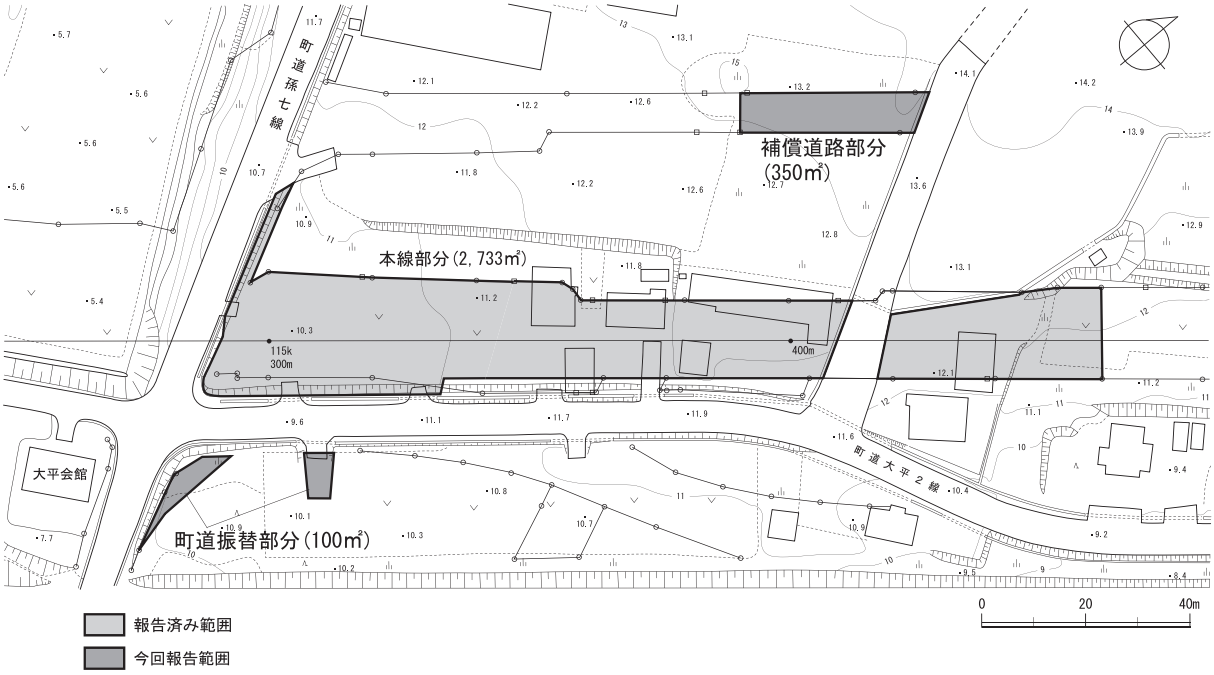
大平４遺跡は平成21・22年度に調査を行った。本線部分の2,733㎡（図Ⅳ－１）については平成22年度に『大平遺跡･大平４遺跡』(北埋調報280）として報告を行っている。本線部分からは土坑26基（縄文時代早期後半22基、前期後半２基、晩期中葉２基)、礫集中１か所（前期後半)、焼土３か所（前期後半)、剥片集中14か所（前期後半）が検出されている。遺物は土器10,265点、石器等30,174点、合計40,439点が出土した（表Ｉ－１)。

今回報告を行う補償道路部分350㎡ は、本線部分から北側に30ｍほど離れた場所にある。遺構は、剥片集中２か所（中期）を検出した。遺物は、土器67点、石器等7,120点、合計7,187点が出土した（表Ｉ－１)。土器は中期（Ⅲ群）のものが多く出土している。町道振替部分100㎡ は本線部分の南側、町道大平２線を挟んで10ｍほど離れた場所にある。竪穴住居跡２軒（早期後半)、土坑２基（前期後半１基、晩期中葉１基）を検出した。遺物は土器596点、石器等5,779点、合計6,475点が出土した（表Ｉ－１)。土器は前期後半（Ⅱ群ｂ類)・早期後半（Ｉ群ｂ－4類）のものが多く出土している。

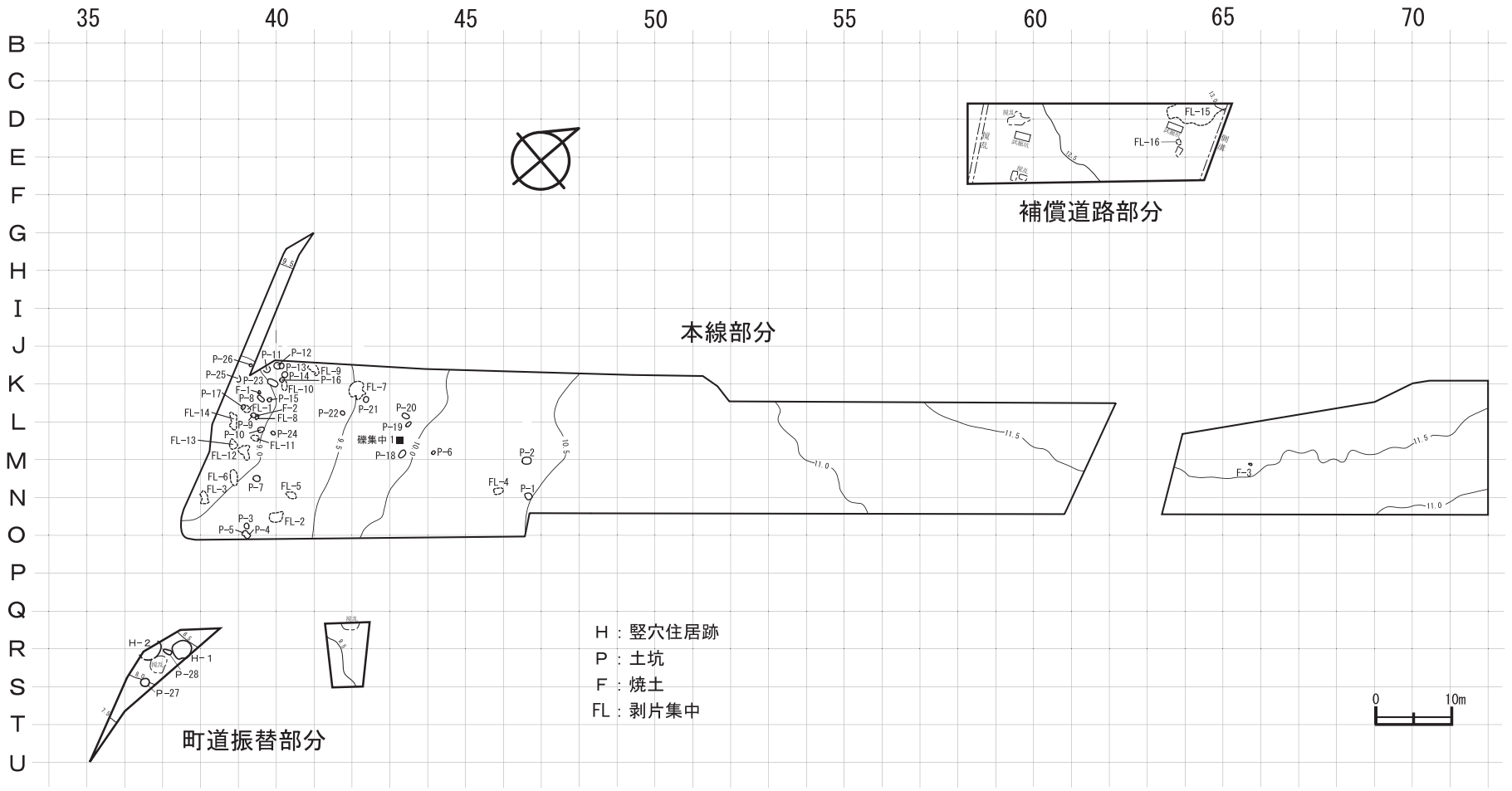
２　遺構

（１）遺構の概要

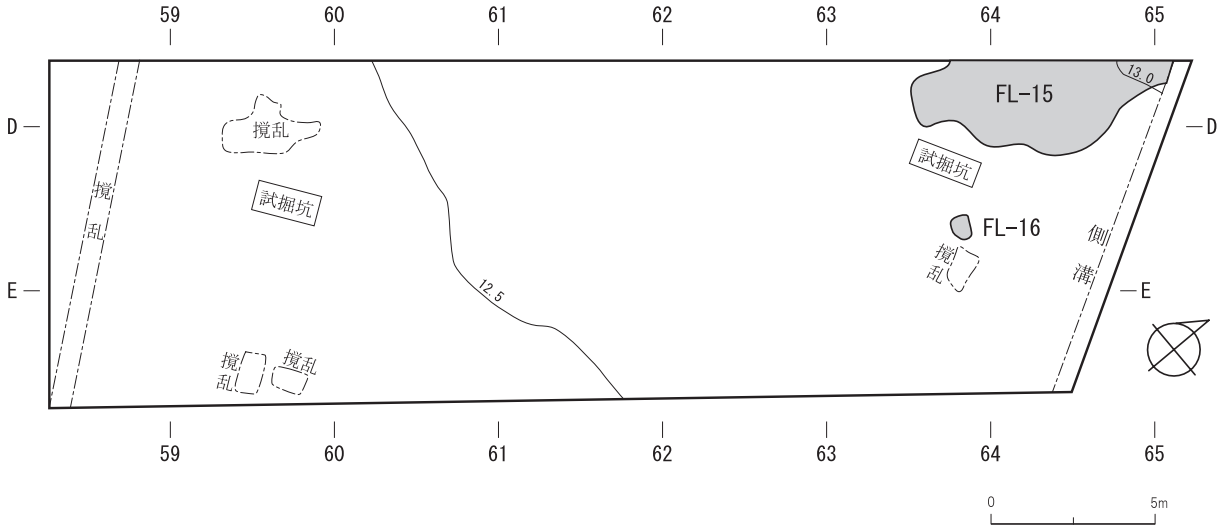
補償道路部分から剥片集中２か所、町道振替部分から竪穴住居跡２軒、土坑２基を検出した。竪穴住居跡は縄文時代早期後半２軒（Ｈ－１・２)、土坑は前期後半１基（Ｐ－27）と晩期中葉１基（Ｐ－28)、剥片集中は中期２か所（FL－15・16）である。Ｐ－28の坑底部からは大洞Ｃ$_2$式の完形の壺形土器が横倒しの状態で出土している。（酒井）



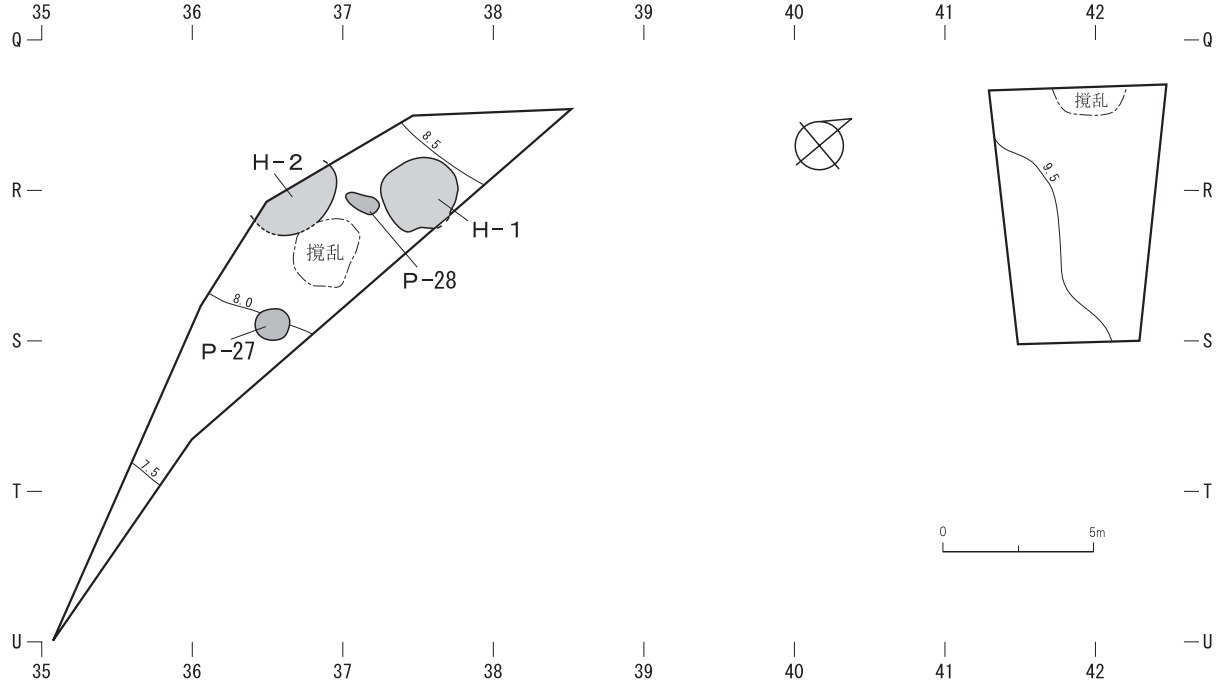
図Ⅳ－１　大平４遺跡調査範囲図


35
40
45
50
55
60
65
70
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
本線部分
補償道路部分
町道振替部分
礫集中 1
H：竪穴住居跡
P：土坑
F：焼土
FL：剥片集中
0
10m

図Ⅳ－２　遺構位置図（全体）



図Ⅳ－３　遺構位置図（補償道路部分）



図Ⅳ－４　遺構位置図（町道振替部分）

（２）住居跡

Ｈ－１（図Ⅳ－５／表１～４／図版２）

確認・調査　調査範囲（町道振替部分）北側の緩斜面上に掘り込まれた竪穴住居跡。Ⅲ層上面で、Ⅱ層起源の黒色土の落ち込みとして検出した。当初土坑を想定して南東側を半截したが、底面が広く平坦で、固くしまっていたことから住居跡と認定した。掘り込みはⅡ層下位と推測される。南東側のごく一部が調査範囲外である。北西側の一部が、現代の撹乱（建物の柱）により壊される。

覆　土　１層はⅡ層を起源とする腐植土。２層はローム主体で、Ⅲ・Ⅳ層を起源とする壁面からの崩落土。いずれも自然堆積である。

形　態　平面形は楕円形。壁面は明瞭で、垂直ぎみに立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、南側へ緩やかに傾斜する。床面より小土坑３基（ＨＰ－１～３）が検出された。掘り込みの外側に付属遺構は確認されなかった。近隣の蛇内２遺跡で検出された縄文時代早期後半（中茶路式～東釧路Ⅳ式期）の住居跡と形態・規模がよく類似する（北埋調報281）。

付属遺構　ＨＰ－１～３：ＨＰ－１・２は床面中央よりもやや壁際に近い部分で検出され、柱穴としての用途が想定される。坑口部の平面形は円形。掘り込みは、ＨＰ－１が垂直、ＨＰ－２は住居の中心に向かって内傾する。深さは床面から30～40㎝である。ＨＰ－３は床面中央よりも南東側へ少し離れた位置に掘り込まれている。坑口部の平面形は不整な楕円形。掘り込みは擂鉢状。内部および周辺の覆土より炭化材が出土していることから、炉跡の灰層・焼土を削り取った可能性がある。

遺物出土状況　床面直上より剥片、礫が出土した。覆土の上部（Ⅱ層）よりⅡ群ｂ類土器と頁岩製のフレイク・チップが多量に出土しているが、流れ込みによるもので遺構には伴わない。

時　期　周辺の包含層（Ⅱ層下位）出土の遺物と、蛇内２遺跡での類似例から、縄文時代早期後半（東釧路Ⅳ式期）と推測される。（芝田）

Ｈ－２（図Ⅳ－５／表１～４・７・８／図版２・３）

確認・調査　調査範囲（町道振替部分）北側の緩斜面上に掘り込まれた竪穴住居跡。Ⅳ層上面で、Ⅱ層起源の黒色土の落ち込みとして検出した。ほぼ南北方向を長軸として東側を半截したところ、底面が固くしまっていたことから住居跡と認定した。掘り込みはⅡ層下位と推測される。西側の約１／２が調査範囲外である。床～壁面の一部が、現代の撹乱（建物の柱・基礎）により壊される。

覆　土　１層はロームと腐植土の混合で、掘り上げ土の流れ込みと考えられる。２層は腐植土を主体とする床面直上の堆積土。いずれも自然堆積である。

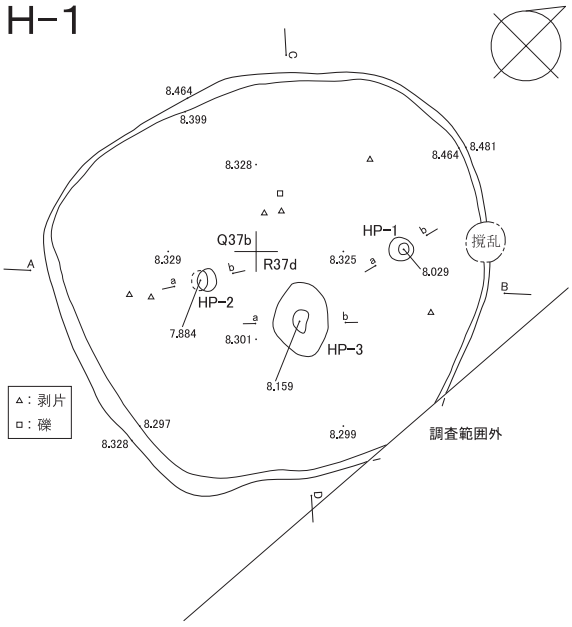
形　態　平面形は円形もしくは楕円形と推測される。壁面は明瞭で、緩やかに立ち上がる。床面は南側へ傾斜する。床面より小土坑１基（ＨＰ－１）が検出された。掘り込みの外側に付属遺構は確認されなかった。隣接するＨ－１や蛇内２遺跡で検出された縄文時代早期後半（中茶路式～東釧路Ⅳ式期）の住居跡と形態・規模がよく類似する（北埋調報281）。

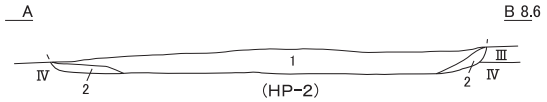
付属遺構　ＨＰ－１：床面の南側で検出された小土坑で、柱穴としての用途が想定される。坑口部の平面形は円形。掘り込みは垂直で、坑底面は平坦。深さは床面から約35㎝である。

遺物出土状況　床面直上よりⅡ群ｂ類土器（１）、つまみ付きナイフ（２）、スクレイパー（３）、原石、剥片、礫が出土した。このうちⅡ群ｂ類土器は出土層位が覆土２層の上面に近く、遺構に伴わない可能性がある。これらの遺物は床面の中央～南側より出土した。

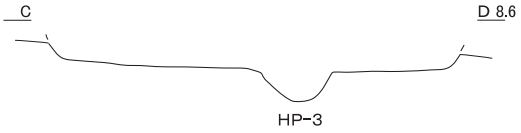
時　期　周辺の包含層（Ⅱ層下位）出土の遺物と、蛇内２遺跡での類似例から、縄文時代早期後半（東釧路Ⅳ式期）と推測される。

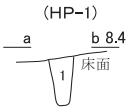
H−1



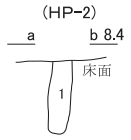


H−1
1 10YR2/1黒色　腐植土主体　ローム　炭化材(φ～10mm)少量混
　粘性やや強　しまり軟
2 10YR3/4暗褐～4/4褐色　ローム主体　黒斑が見られる
　粘性強　しまり軟

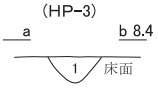




HP−1
1 10YR3/3暗褐～4/4褐色　腐植土主体
　ローム・ブロックあり　粘性強　しまりなし

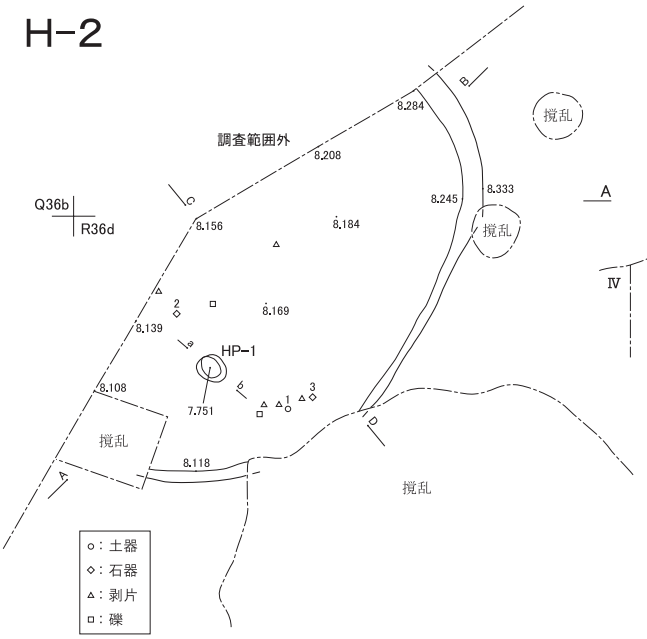


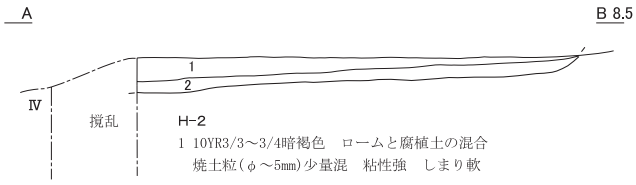
HP−2
1 10YR2/2黒褐色　腐植土主体
　ローム少量混　粘性強　しまり軟



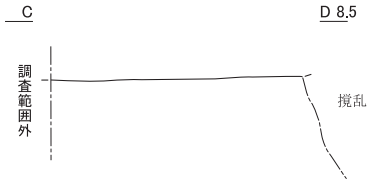
HP−3
1 10YR2/3黒褐色　腐植土とロームの混合
　炭化材(φ～5mm)少量混　粘性強　しまり軟

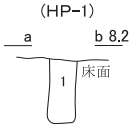
H−2





H−2
1 10YR3/3～3/4暗褐色　ロームと腐植土の混合
　焼土粒(φ～5mm)少量混　粘性強　しまり軟
2 10YR2/2黒褐色　腐植土主体　ロームが斑状に混ざる
　炭化材(φ～10mm)混　粘性やや強　しまり軟





HP−1
1 10YR2/3黒褐色　腐植土主体
　ローム少量混　粘性やや強　しまり軟

0　1m

図Ⅳ−５　Ｈ−１・２

遺　物　土器：１はⅡ群ｂ類。円筒土器下層ｂ式に相当する。胴部片で、ＬＲ斜走縄文が施されるが、ナデにより不鮮明になっている。胎土は細砂礫を多く含む。（芝田）

石器：２はつまみ付きナイフ。下半部を折損している。片面加工で両側縁に刃部を作出している。３はスクレイパー。剥片の片面周縁を調整して刃部を作出している。（酒井）

（３）土坑

Ｐ－27（図Ⅳ－６／表１～４・７・８／図版２・３）

特　徴　調査範囲（町道振替部分）南側の斜面上に掘り込まれた土坑。Ⅲ層上面で黒色土が落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はⅡ層下位と推測される。平面形は楕円形で、断面はⅢ形を呈する。坑底面はほぼ平坦。覆土は自然堆積で、壁際の崩落土以外はⅡ層土の落ち込みである。坑底面より、土器はⅠ群ｂ－４類（１ａ・ｂ）、Ⅱ群ｂ類（２・３）、石器等はつまみ付きナイフ（４・５）、両面調整石器（６）、北海道式石冠片、剥片、礫が出土した。

時　期　出土遺物から縄文時代前期後半である。

遺　物　土器：１ａ・ｂはⅠ群ｂ－４類。東釧路Ⅳ式に相当する。胴部片で、細い撚糸文が施されるが、磨滅により不鮮明。内外面の剥落が著しい。胎土は細砂礫を少量含む。２・３はⅡ群ｂ類。円筒土器下層ｂ式に相当する。いずれも胴部片。２はＬＲＬ複節縄文、３はＬＲ縄文が施されるが、磨滅により不鮮明。内面に炭化物が付着する。胎土は繊維・細砂礫に富む。（芝田）

石器：４・５はつまみ付きナイフ。４は片面加工のもの。正面右側に直線的な刃部を作出している。５は縦長剥片の上部に左右から抉りをいれてつまみ部を作出したもの。左右側縁に加工や使用痕は見られない。６は両面調整石器。両面を加工して箆状の形状を作出している。上端を折損している。（酒井）

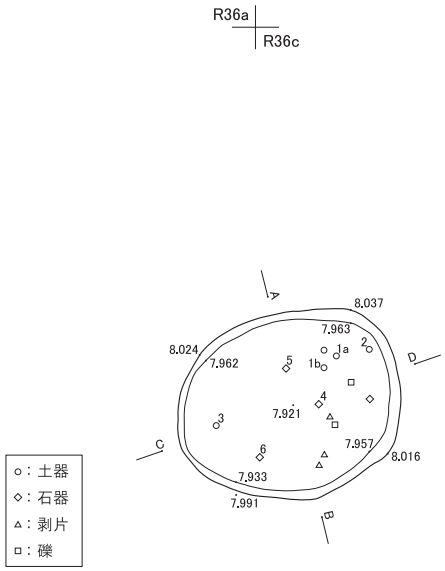
Ｐ－28（図Ⅳ－６／表１～４・７／図版２・３）

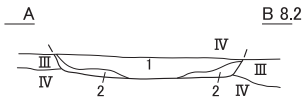
特　徴　調査範囲（町道振替部分）北側の緩斜面上に掘り込まれた土坑。Ⅳ層上面で暗褐色土が落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はⅡ層中と推測される。平面形は楕円形で、掘り込みは垂直である。坑底面は南東側へやや傾く。覆土は、１層がロームと腐植土の混合で、埋め戻しによるものと考えられる。２層は粘性の強い黒色土で、坑底直上に堆積する。坑底面より、小型の壷形土器１個体（１）が出土した。壷は横倒しの状態で、口縁部を南東側へ向けている。壷の内部には覆土１層と同質の土が入り込んでおり、他の遺物は出土しなかった。近隣の札苅遺跡での調査例（木古内町教委1974、北海道開拓記念館1976）などから、墓の可能性が高い。

時　期　出土遺物から縄文時代晩期中葉である。

遺　物　土器：１はⅤ群ｂ類で、札苅Ⅱ群（大洞Ｃ$_2$式並行）に相当する。小型の壷で、ほぼ完形。口径10.7㎝、肩部の最大径15.8㎝、底径7.1㎝、高さ17.3㎝を測る。広口で、肩部がやや高い位置で張り出し、底部へ向かって細くなる器形。頸部は短めで、わずかに内傾する。底部は平底。口縁～頸部は無文。口外帯上には浅い横走沈線１条を挟んで上下に２個１対の瘤状突起が４か所貼付される。このうち上部の瘤状突起はほとんどが欠損しており、２か所各１個のみ残存する。肩部には浅い沈線３条が巡り、その間に２個１対の瘤状突起が１か所貼付される。肩～胴部には細いＬＲ縦走縄文。内外面ともに丁寧に調整されており、頸部にはヘラ状工具による縦方向の調整痕が残る。色調は褐色～暗褐色を呈する。外面には黒斑が見られる。焼成は良好で、器面が固くしまる。胎土は緻密で、細砂礫が少量混入する。底内面の中央部が剥落する。（芝田）

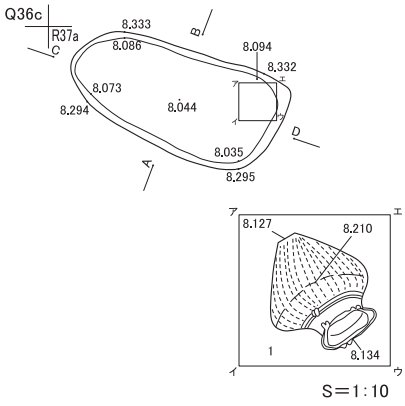
P−27

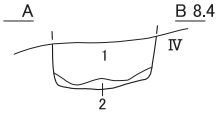




P−27
1 10YR1.7/1黒色　腐植土　粘性中　しまり軟
2 10YR3/4暗褐〜4/6褐色　ローム主体　黒斑あり
　粘性やや強　しまり軟

P−28





P−28
1 10YR3/3暗褐〜4/6褐色　腐植土とロームの混合　ローム・ブロックあり
　粘性やや強　しまり軟　埋め戻し土
2 10YR1/2黒色　腐植土主体　ローム微量混　ねっとりしている
　粘性強　しまり軟

0　1m

図Ⅳ−６　Ｐ−27・28

（4）剥片集中

ＦＬ－15（図Ⅳ－７／表１～４・７・８／図版１・３・４）

特　徴　調査範囲（補償道路部分）北側の緩斜面上で検出された剥片集中。検出面はⅡ層中位。8.2×2.9ｍほどの範囲より、5,775点の遺物が出土した。このうち剥片が5,725点を占める。剥片の大部分は、白～灰色の頁岩で構成される。出土した頁岩剥片は5,724点で重量は19,935ｇである。接合を試みたが、数点のみが接合するものが多く、特に図化は行わなかった。５～10㎝大のやや大きめの剥片を中心として、それ以下の小さめの剥片が疎らに分布する。層厚は中心部が最大15㎝ほどで、縁辺部へ次第に薄くなっていく。また、上位よりも下位のほうが濃密である。北西端で道路側溝による撹乱を受ける。剥片の集中は、さらに北側の調査範囲外へ続いていくと予想される。遺物は剥片のほか、Ⅲ群土器（１・２）、石鏃（３）、つまみ付きナイフ（４）、両面調整石器（５・８～10）、スクレイパー（６・７）、たたき石（11）、礫などが少数出土した。

時　期　出土遺物から縄文時代中期である。

遺　物　土器：１・２は微細な破片であるため、器厚や胎土などからⅢ群に分類したが、細分はできなかった。１は口縁部片。ＬＲ横走縄文が強めに施される。２は胴部片。磨滅により施文は不明。胎土は細砂礫に富み、２は繊維が少量含まれる。（芝田）

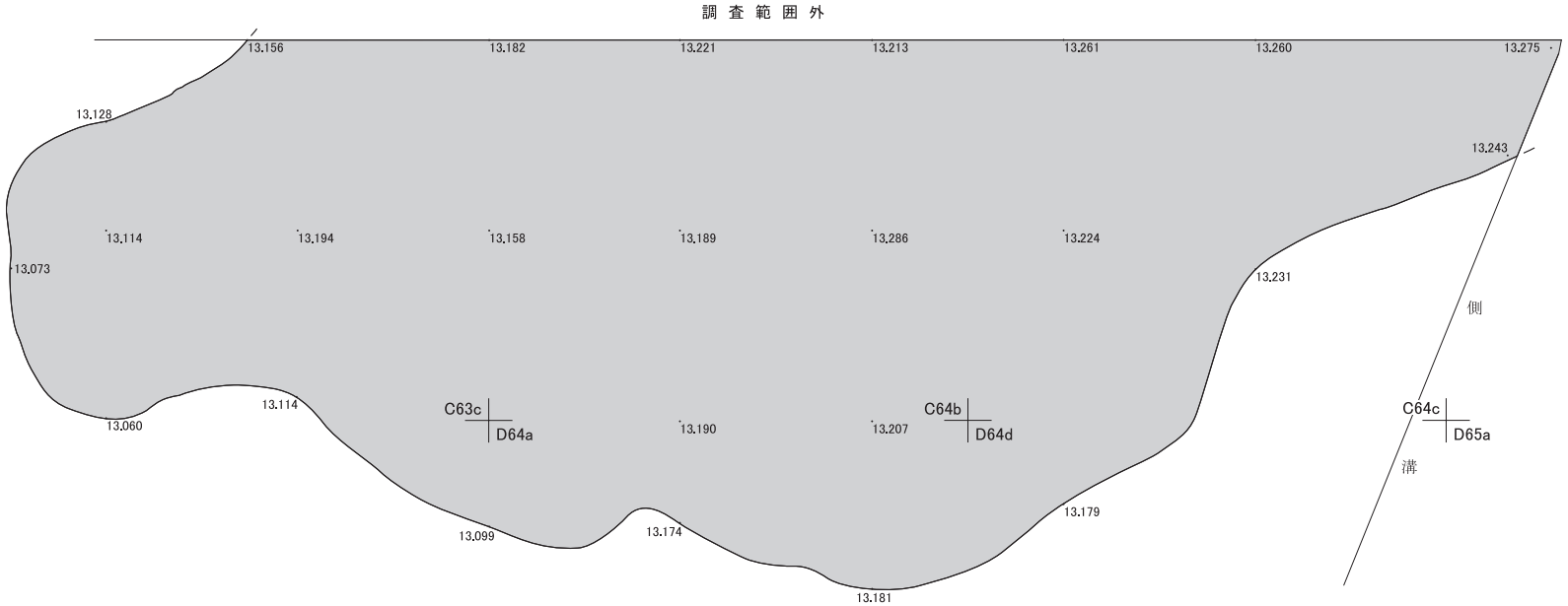
石器：３は石鏃。平基で二等辺三角形の形状をしている。細かい球果の入る黒曜石を使用している。４はつまみ付きナイフ。裏面右側側縁に微細な剥離による加工が施され、正面の全体が二次加工される。両側縁はほぼ平行で、切り出し形の形状をしている。６・７はスクレイパー。６は破片。正面下端・側縁に急角度の直線的な刃部を設けている。７は剥片の一部に二次加工を施して刃部を設けたもの。５・８～10は両面調整石器。５・８・９は破片。５は両端部を折損している。石槍等の基部の可能性がある。８・９は同一個体とみられるが接合しない。粗い調整を両面に施した柳葉形のものの破片と考えられる。10は柳葉形の形状をしたもの。３点が接合している。裏面にある器厚調整のために側縁から行った剥離の際に破損したとみられる。両面の調整は粗いが、側縁には細かい調整がみられる。表面と先端部に礫面が残る。長さ21.2㎝、幅7.9㎝、重さ396.3ｇになる大型のものである。11はたたき石。扁平な楕円礫の両端と左側縁に敲打痕がある。２点が接合している。（酒井）

ＦＬ－16（図Ⅳ－７／表１～４／図版１）

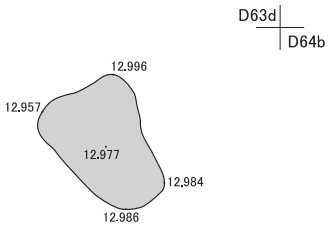
特　徴　調査範囲（補償道路部分）北側の緩斜面上で検出された剥片集中。検出面はⅡ層中位。0.7×0.5ｍほどの狭い範囲より、剥片151点が出土した。剥片は、白～灰色の頁岩で構成される。重量は642.5ｇになる。大部分が５㎝以下の小さめの剥片である。層厚は約３㎝。近接するＦＬ－15と同時期と考えられる。

時　期　周辺の包含層から出土した遺物から、縄文時代中期と考えられる。（芝田）

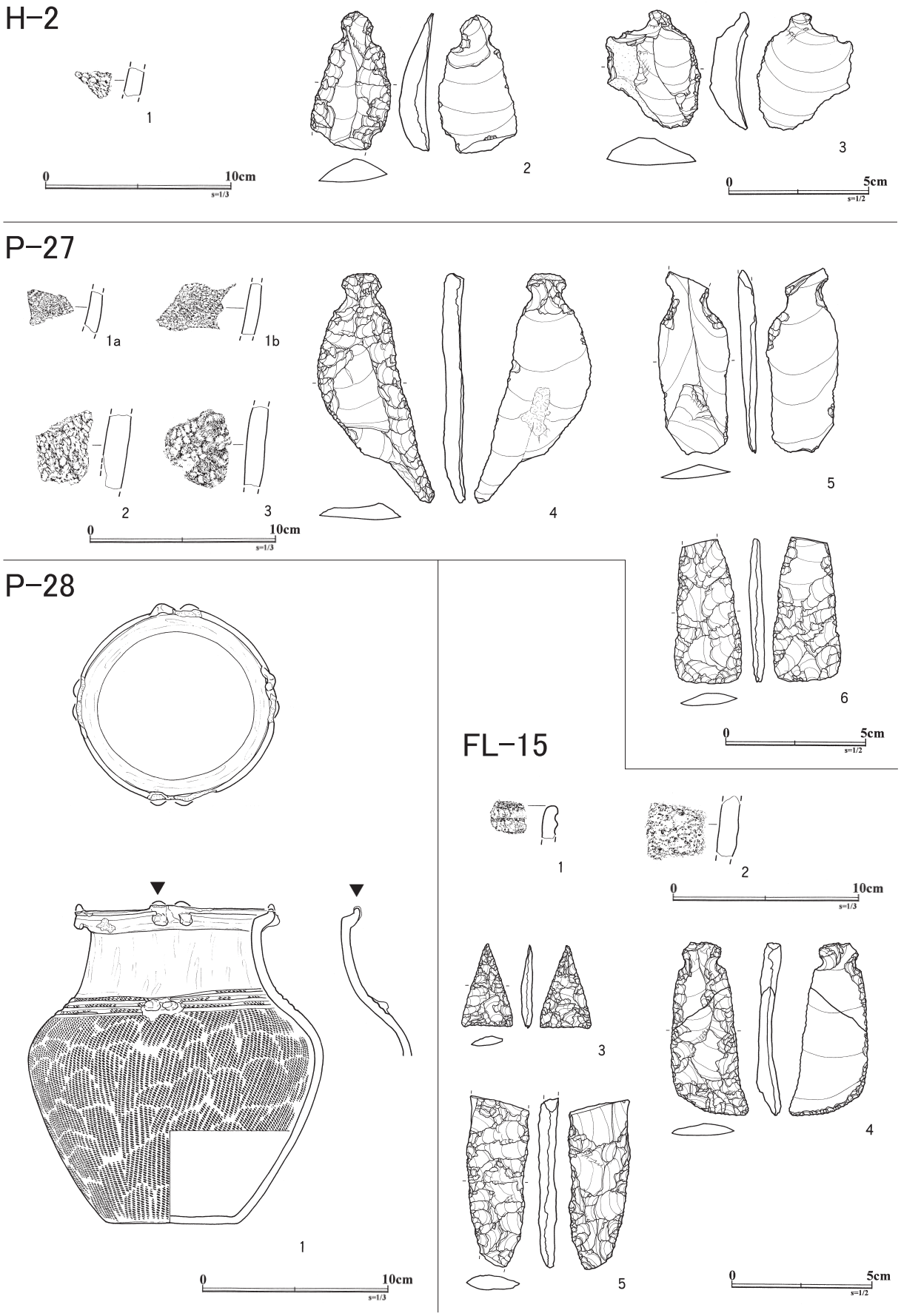
FL−15



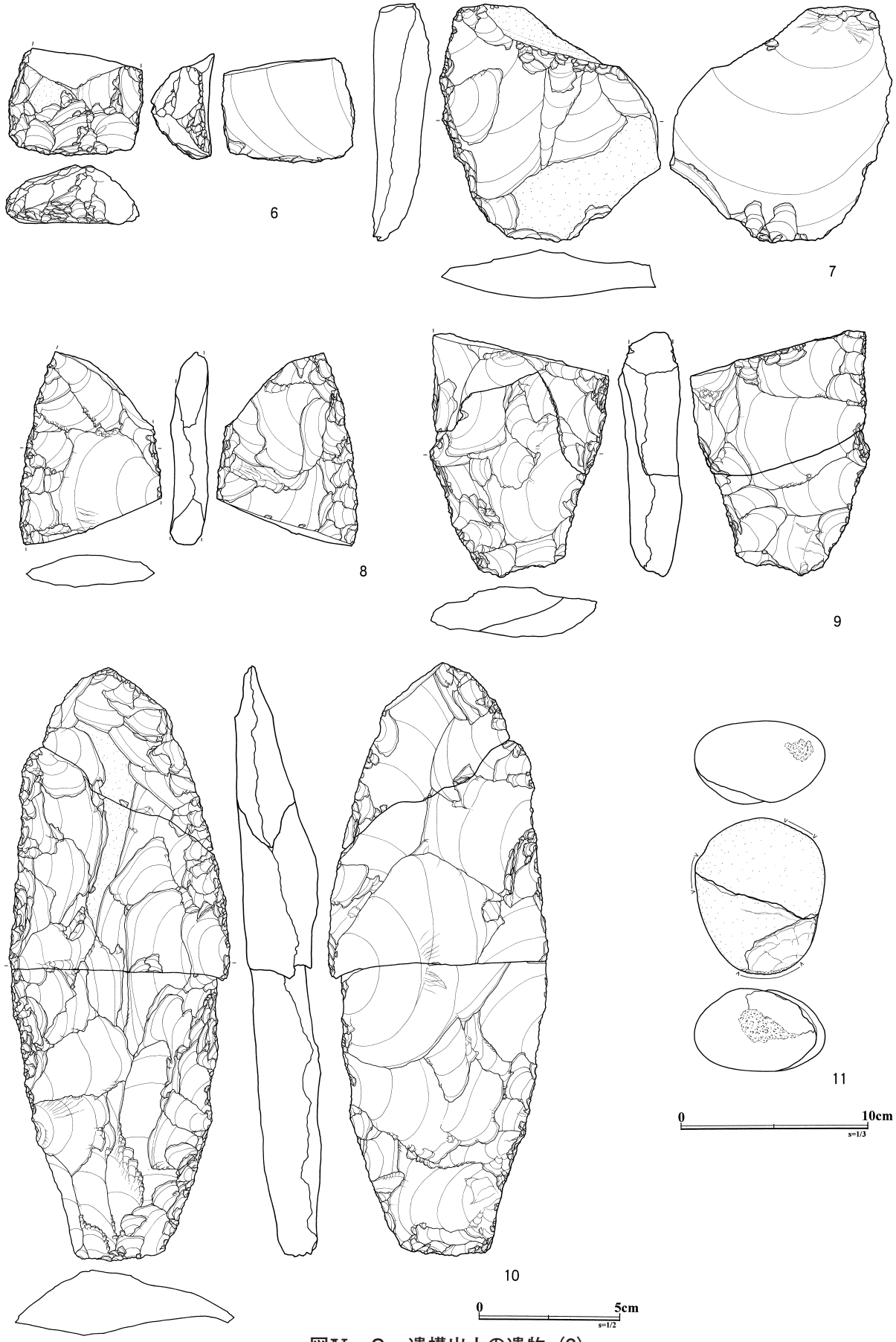
FL−16



図Ⅳ−７　FL−15・16



図Ⅳ－８　遺構出土の遺物（1）



図Ⅳ－９　遺構出土の遺物（2）

３　包含層出土の遺物

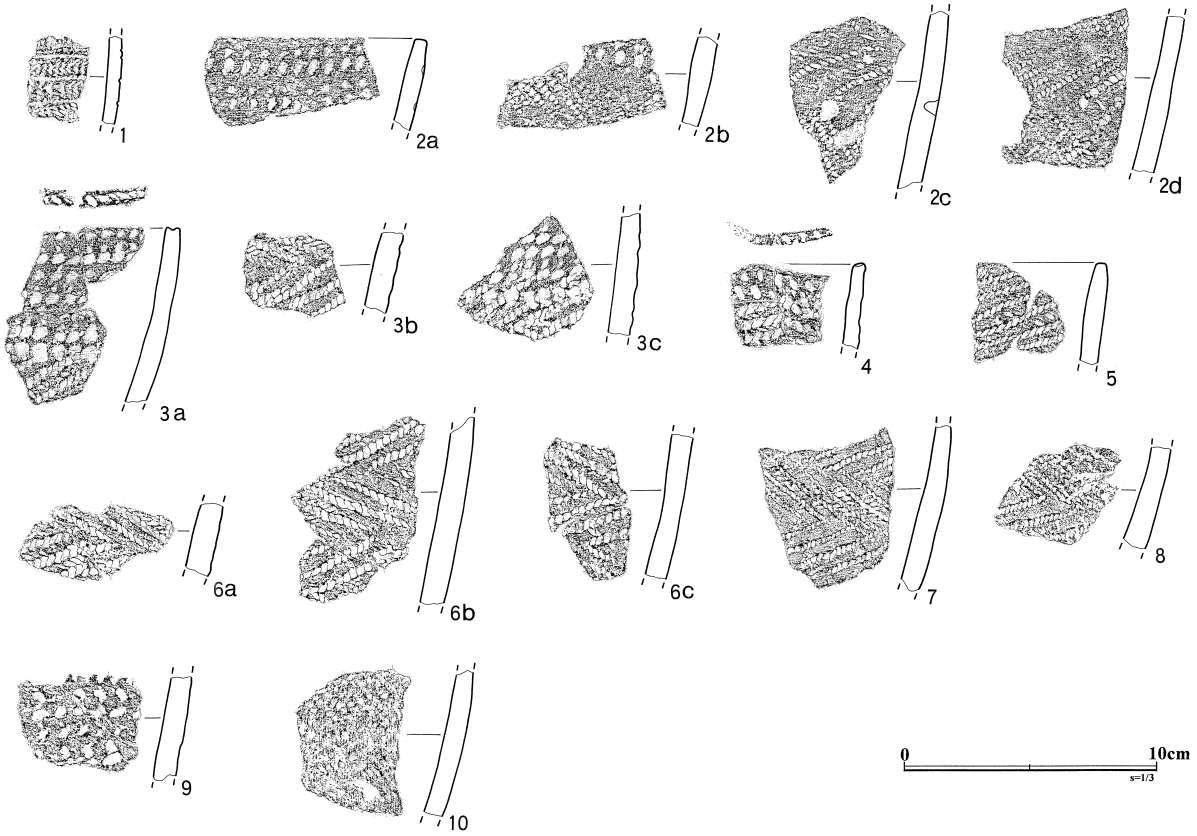
（１）概要

今回報告する補償道路部分と町道振替部分の包含層から出土した遺物は、土器633点、石器等6,965点、合計7,598点である（表Ｉ－２・３）。土器は補償道路部分から縄文時代中期、町道振替部分から早期後半、前期後半のものが多く出土している。石器等は剥片がほとんどを占める。定型的な石器では、スクレイパーやたたき石が多く見られる。報告済みの本線部分と合わせると土器10,935点、石器等31,839点、合計42,774点が出土している。（酒井）

（２）土器

包含層から土器は633点出土している。補償道路部分から45点、町道振替部分から588点出土した（図Ⅳ－15、表Ｉ－１・２）。時期は、縄文時代早期～晩期のものがある。縄文時代前期後半（Ⅱ群ｂ類）が401点と最も多く、早期末葉（Ｉ群ｂ－４類）が182点で次ぐ。早期後葉（Ｉ群ｂ－３類）は１点、晩期中葉（Ｖ群ｂ類）は３点と非常に少ない。補償道路部分より出土した土器の大部分が、磨滅した微細な破片であったため、胎土などの特徴からⅢ群に分類した（43点）。

土器の出土分布は遺構とほぼ一致しており、Ｉ群ｂ－４類・Ⅱ群ｂ類・Ｖ群ｂ類は当該期の遺構が検出された町道振替部分に集中している（図Ⅳ－16・17）。これらの出土傾向は、北側の本線部分より続いていると考えられる（北埋調報280）。



図Ⅳ－10　包含層出土の土器（1）

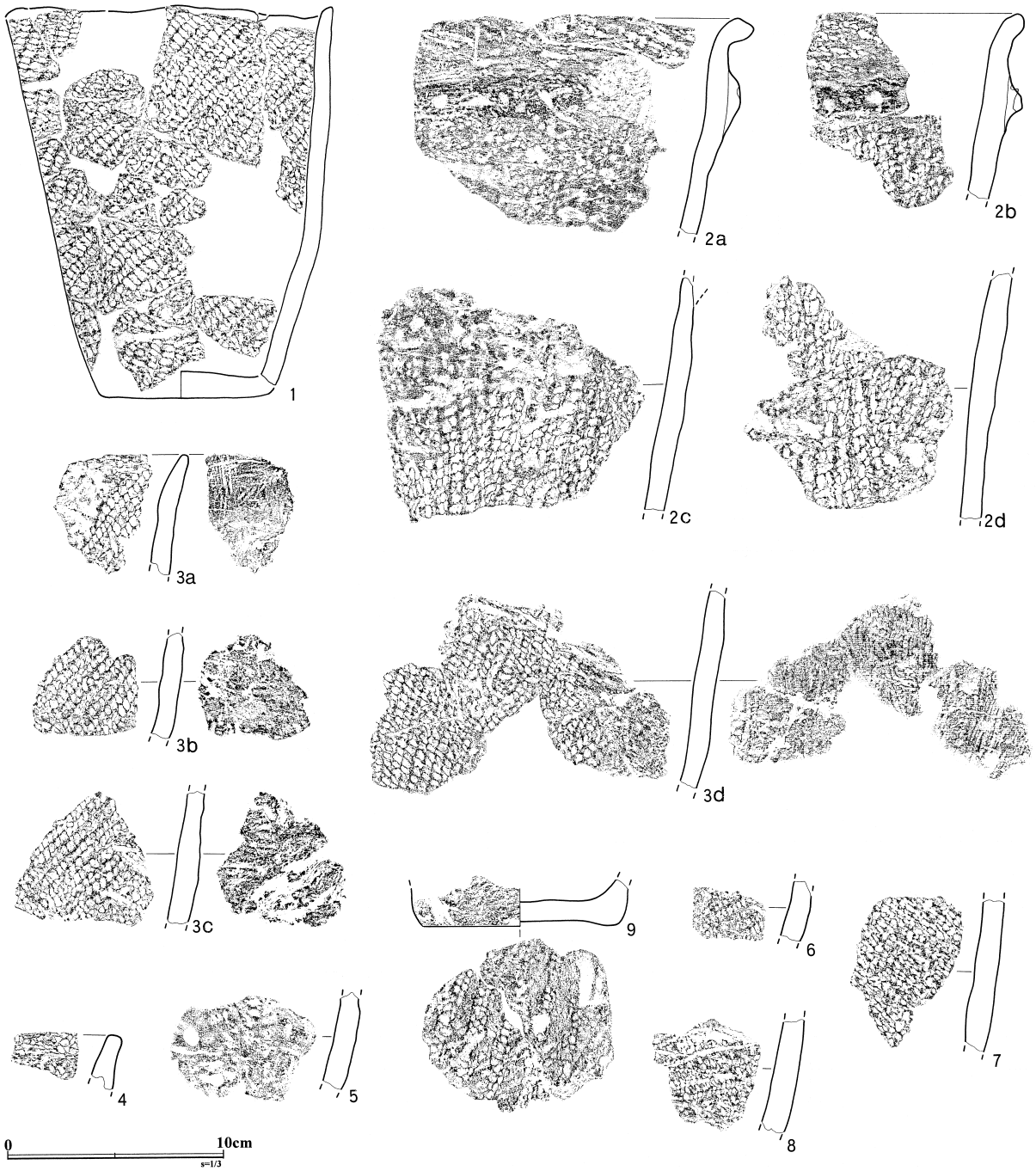
縄文時代早期後半の土器（図Ⅳ－10／表９／図版５）

Ⅰ群ｂ－３類：中茶路式に相当するもの（１）

１は胴部片。器厚は0.7㎝。器面に細い縄線を平行に巡らせ、内部に絡条体圧痕文を施す。焼成がよく、硬くしまっている。色調は暗褐色～黒褐色を呈する。胎土は細砂礫が多く混入する。

Ⅰ群ｂ－４類：東釧路Ⅳ式に相当するもの（２～10）

２～10は口縁～胴部の破片資料。口縁部の形態は平縁のもの（２・３）と緩やかな波状を呈するもの（４・５）がある。口唇断面は２～４が角形で、５が尖りぎみである。器厚は0.5～0.8㎝で、Ⅰ群ｂ－３類よりもやや厚いものが目立つ。口縁部に文様帯を設けるものは、縄端が連続圧痕される（２～



図Ⅳ－11　包含層出土の土器（2）

４)。文様帯が区画されないもの（５）もある。３は縄側面圧痕、４は縄端の連続圧痕が端面に施される。器面には自縄自巻的な原体による羽状の縄文（２)、棒を軸とした羽状の撚糸文（３・５～８・９)、２段の縄による縄文（４)、縄端の連続圧痕文（９）が施される。色調は褐色～黒褐色を呈する。焼成がよく、硬くしまっている。胎土は概ね緻密で、長石・輝石に富むものが多い。

縄文時代前期後半の土器（図Ⅳ－11／表９／図版６・７）

Ⅱ群ｂ類：円筒土器下層ｂ式に相当するもの（１～９）

１は口縁～底部が復元された小型の深鉢。口径15.1㎝、底径8.0㎝、高さ18.2㎝を測る。口縁部は平縁で、わずかに外反する器形。口唇断面は丸い。底部は平底。器外面に節の粗いＬＲ斜走縄文を施す。口縁部内面にはヘラ状工具による調整痕が見られる。２は口縁部が平縁で、外反する器形。端面は外傾。口縁部と胴部の境に太い貼付帯を巡らす。貼付帯上には棒状工具の先端による円形刺突列が加えられている。口径に比して口縁部の幅は狭く、横ナデにより無文帯。器外面に複節ＲＬＲ縦走縄文を施す。３・４は平縁。いずれも器外面にＬＲ斜走縄文。３の内面には細い条痕が疎らに縦走・横走する。５～８は胴部片。５・６はＬＲ斜走縄文、７は複節ＲＬＲ縄文、８は撚糸文が施される。９は底部。平底だが、底縁がやや高い。底外面に複節ＬＲＬ縄文。いずれも色調は暗赤褐色～暗褐色。焼成はもろく、器面の剥落が著しい。胎土に繊維と白色～褐色の凝灰岩礫を多く含む。

縄文時代中期の土器（図Ⅳ－12／表９／図版４）

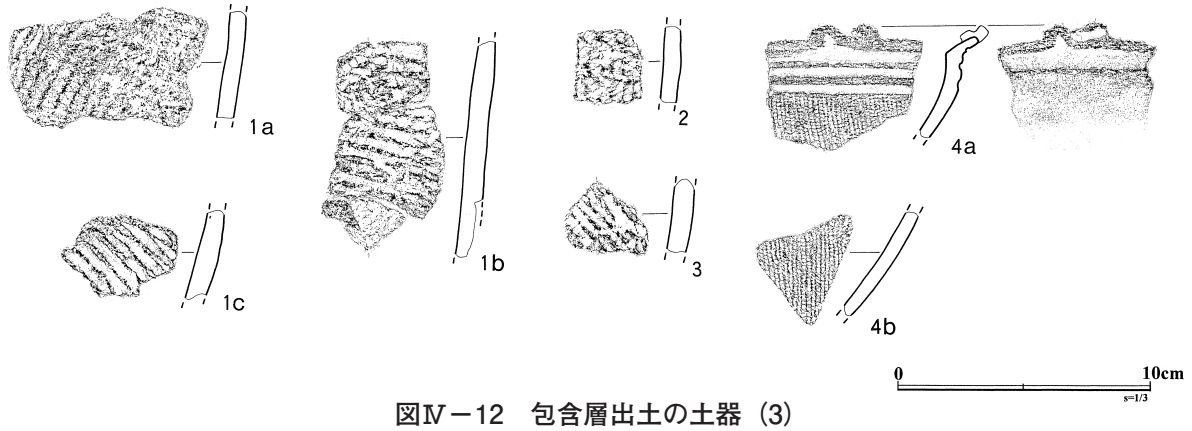
Ⅲ群：細分不明なもの（１～３）

１～３は胴部。１・２は羽状縄文、３は斜走縄文が施されるが、いずれも磨滅により不鮮明。色調は、１・２が褐色、３が黒褐色を呈する。胎土は砂礫の混入が目立ち、粒径の大きなものは器面に浮き出ている。これらは胎土に繊維をほとんど含まないことから、Ⅲ群に分類した。

縄文時代晩期中葉の土器（図Ⅳ－12／表９／図版４）

Ⅴ群ｂ類：札苅Ⅱ群（大洞Ｃ$_2$式並行）に相当するもの（４）

４は鉢形土器の口縁～胴部破片。口縁部が外反し、胴上部が膨らむ器形。端面は丸みを帯びる。口唇直下に沿って肥厚帯が設けられ、Ｂ状突起が貼り付けられる。口縁部は無文で、浅い横走沈線３条が巡る。胴部は非常に細い原体によるＬＲ縦走縄文が施される。内面に炭化物が付着する。焼成がよく、器面は固くしまる。色調は外面が褐色～赤褐色、内面が暗褐色である。胎土は緻密で、細砂礫がごく少量混入する。（芝田）



図Ⅳ－12　包含層出土の土器（3）

（３）石器等

包含層から石器等は6,965点出土している。補償道路部分から1,216点、町道振替部分から5,749点である（表Ⅰ－３）。補償道路部分からは、剥片石器29点、礫石器6点、剥片1,174点、礫・礫片７点、町道振替部分からは、剥片石器55点、礫石器21点、剥片5,392点、礫・礫片281点が出土している。出土層位はⅡ層が98％を占める。この中から定型的で完形のものを中心に抽出し掲載した。

利用する石材は、剥片石器類は頁岩が98％を占める。ほかには黒曜石・メノウ・チャートがみられる。礫石器類は安山岩、凝灰岩が多い。分類別ではスクレイパー･たたき石が多い。石器等の分布は、補償道路部分では剥片集中のある北側で多く、町道振替部分では遺構周辺から多く出土している（図Ⅳ－15）。

石鏃（図Ⅳ－12－１／表10／図版７）

石鏃は、補償道路部分から１点が出土した。

１は有茎鏃で茎部は凸基である。頁岩製。

石錐（図Ⅳ－12－２／表10／図版７）

石錐は、町道振替部分から２点が出土した。

２は縦長剥片の下端部に機能部を作出したものである。頁岩製。

スクレイパー（図Ⅳ－12－３～５／表10／図版７・８）

スクレイパーは15点出土した。石材はすべて頁岩である。

３は剥片の下部に円弧状の急角度の刃部を作出したもの。４は三角形状の剥片の底辺に急角度の刃部を作出している。５は箆状石器と称されるもの。２点が接合している。側縁は表面の大きな剥離で形状を整えた後、裏面で細かい調整を行っている。

両面調整石器（図Ⅳ－12－６・７／表10／図版８）

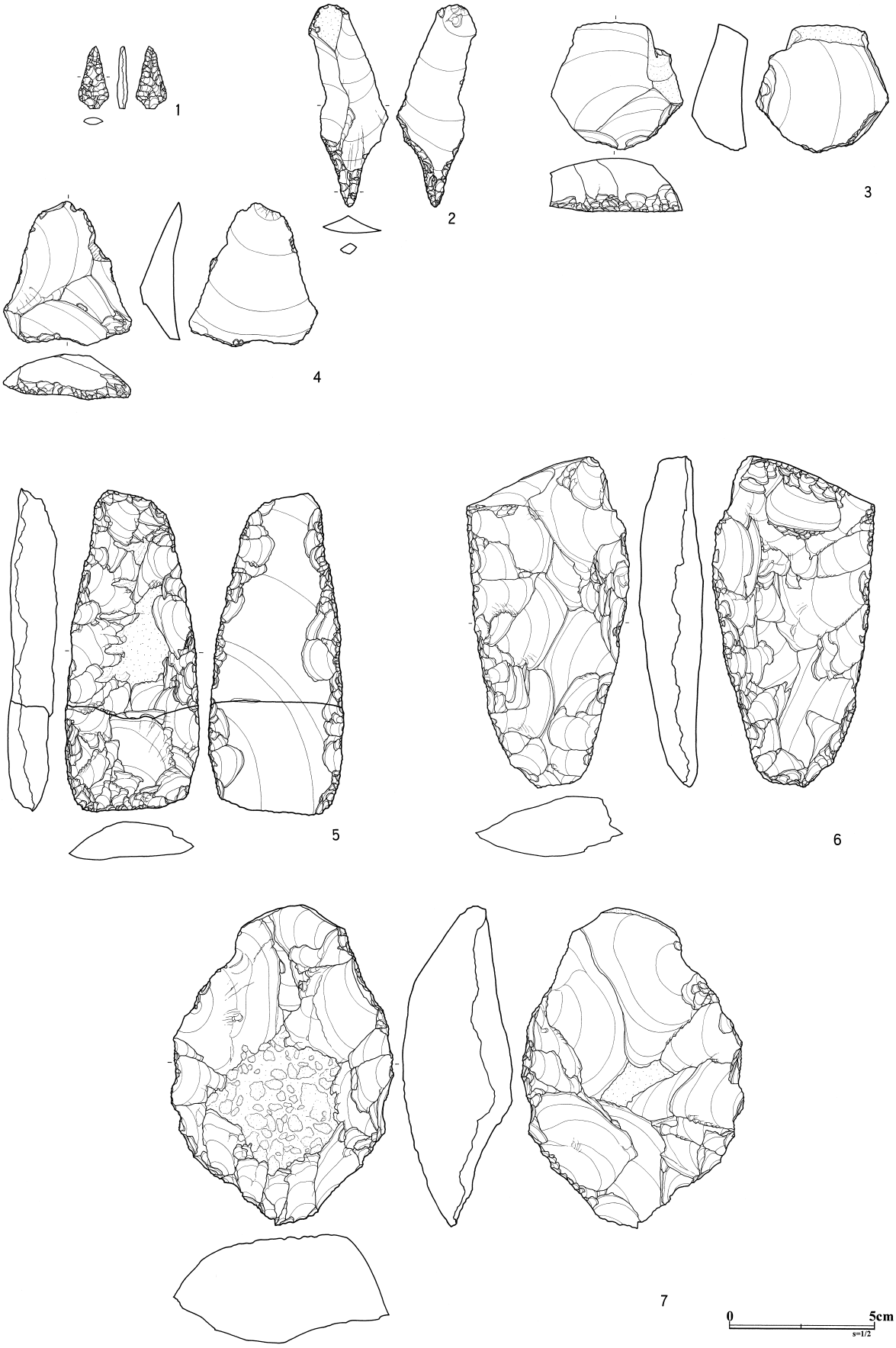
両面調整石器は２点出土した。定型器種の分類が出来なかったもので、粗い加工のものである。このまま使用されたものや、未製品のものがあると考えられる。石材はすべて頁岩である。

６は上部を折損している。折損部分の一部に再加工がみられる。元は柳葉形の形状をしていたと考えられる。部分的に微細な剥離が見られる。FL－15出土の図Ⅳ－９－10と同様のものと考えられる。７は亀甲形をしている。両面に礫面を残すことから扁平な円礫を用いたと考えられる。裏面を大まかな剥離によって調整した後、表面を調整しており一部に微細剥離がある。

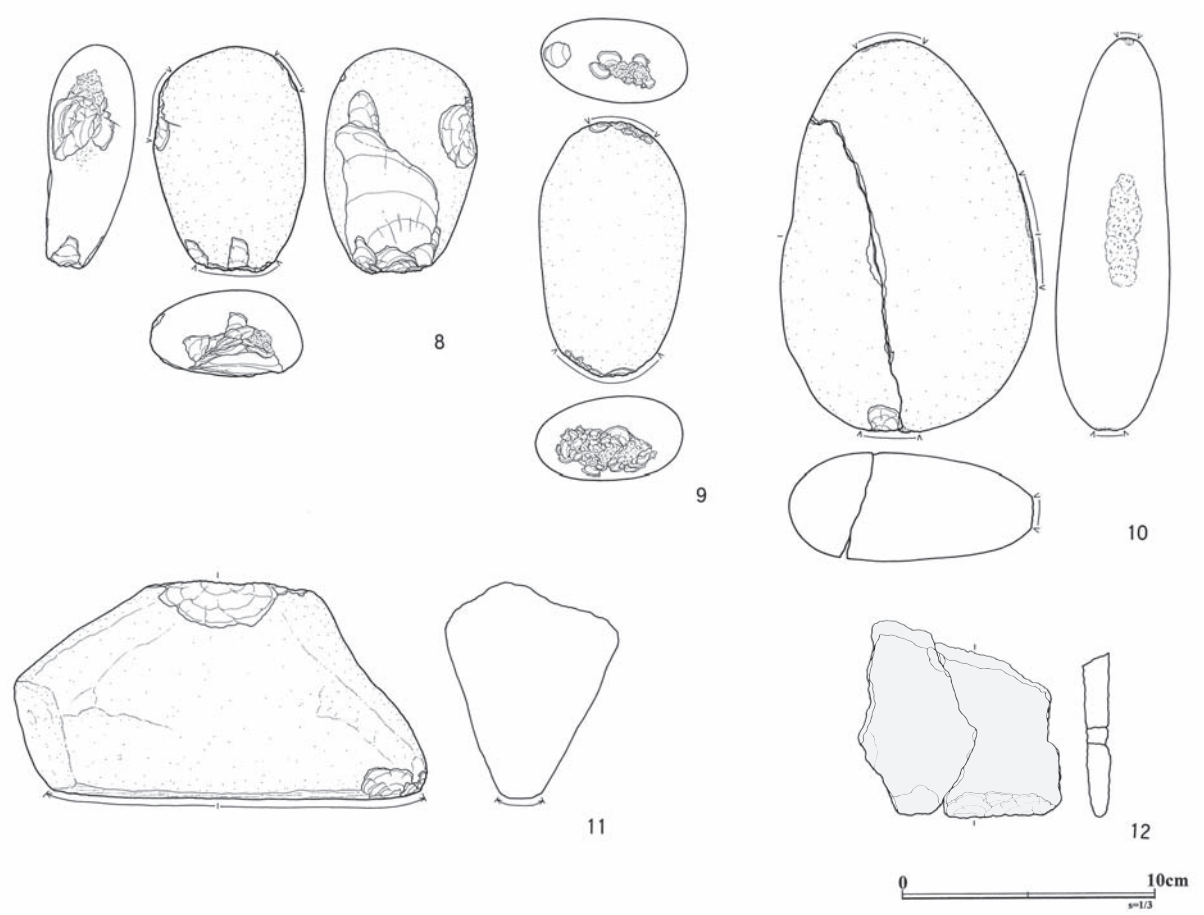
たたき石（図Ⅳ－13－８～10／表10／図版８）

たたき石は破片を含めて17点出土した。石材は安山岩が多く、頁岩･チャート･砂岩などがある。町道振替部分の南側に多く出土している。

８は下端部と上部側縁両端に敲打痕が見られる。敲打による大きな剥離がみられる。チャート製。９は扁平な楕円礫の長軸両端部に敲打痕がみられる。頁岩製。10は扁平礫の長軸両端と正面右側縁に敲打痕がみられる。下端部の敲打によって破損したと考えられる。



図Ⅳ－13　包含層出土の石器（1）



図Ⅳ－14　包含層出土の石器（2）

すり石（図Ⅳ－13－11／表10／図版８）

すり石は２点出土した。断面三角形の稜を擦ったものと破片が各１点出土している。石材は凝灰岩と安山岩である。

11は断面が三角形の礫の稜を擦ったもの。石材は安山岩である。

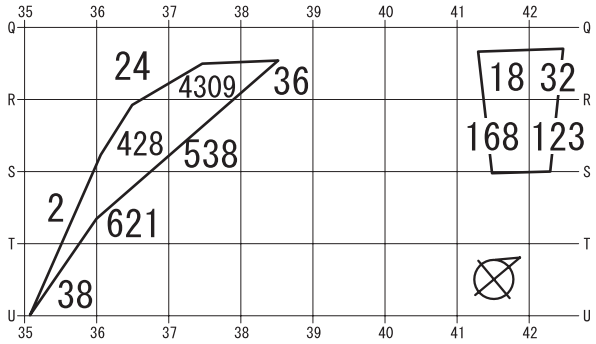
扁平打製石器（図Ⅳ－13－12／表10／図版８）

扁平打製石器は１点出土した。

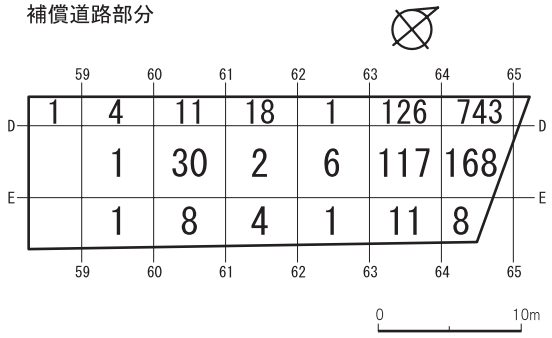
12は破片である。板状扁平礫を方形状に打ち欠いて、長軸縁辺に両面加工を施して刃部としている。全体にやや黒ずみ、ところによって赤色化していることから、被熱したものと思われる。石材は安山岩である。（酒井）

包含層出土遺物総計　7,598 点

町道振替部分

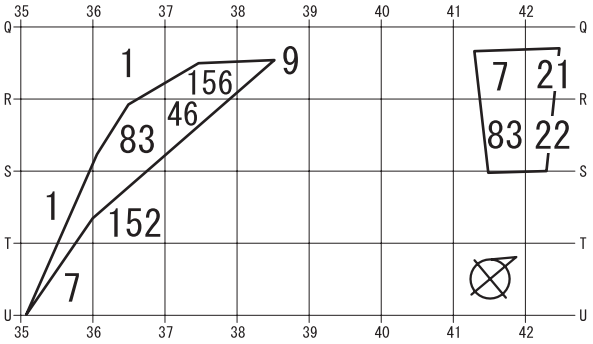


補償道路部分

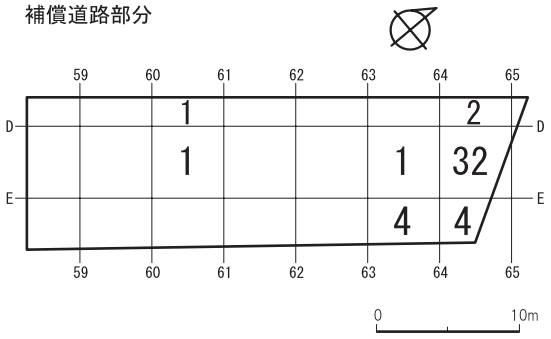


包含層出土土器総計　633 点

町道振替部分

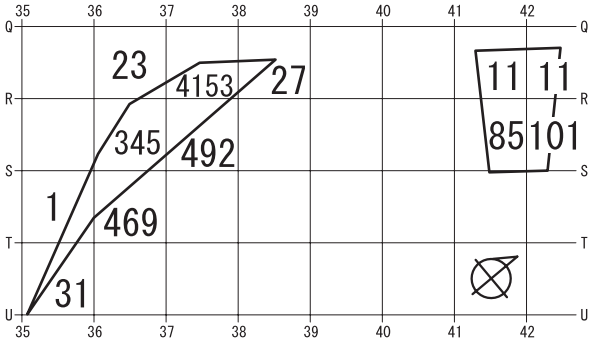


補償道路部分

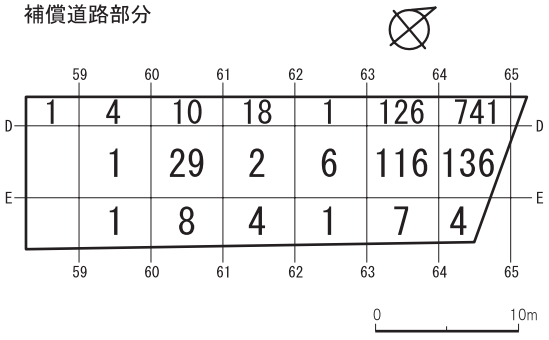


包含層出土石器等総計　6,965 点

町道振替部分



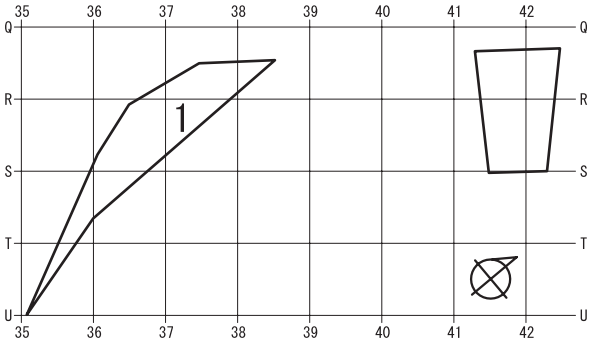
補償道路部分



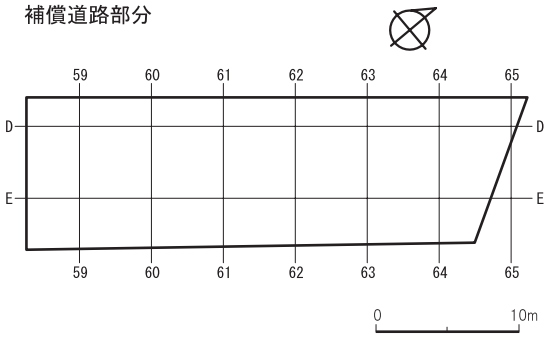
図Ⅳ－15　遺物分布図（1）

Ⅰ群ｂ－3類　1点

町道振替部分

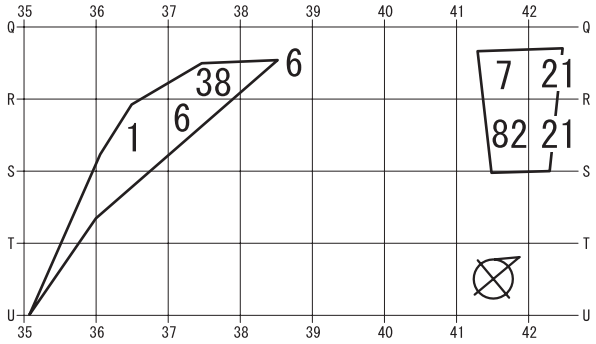


補償道路部分

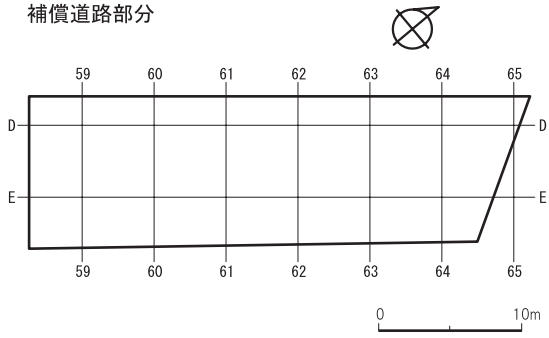


Ⅰ群ｂ－4類　182点

町道振替部分

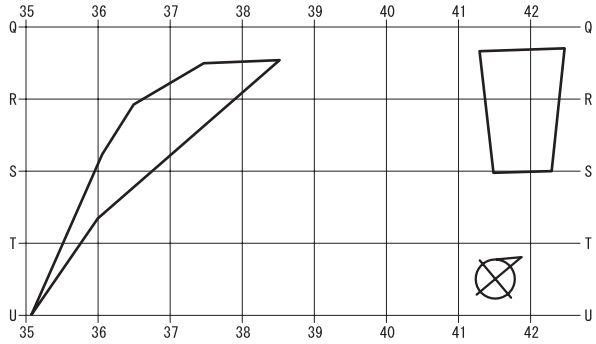


補償道路部分

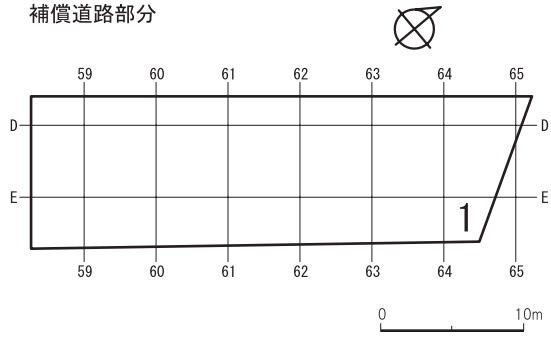


Ⅱ群　1点

町道振替部分

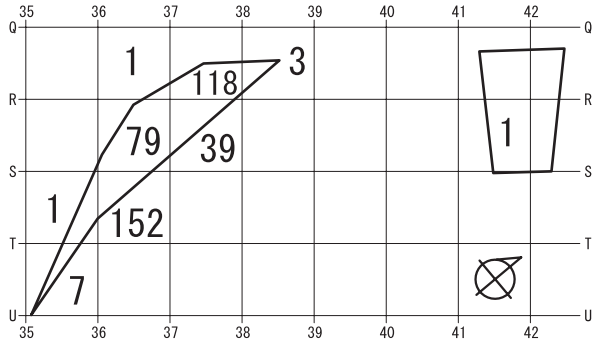


補償道路部分

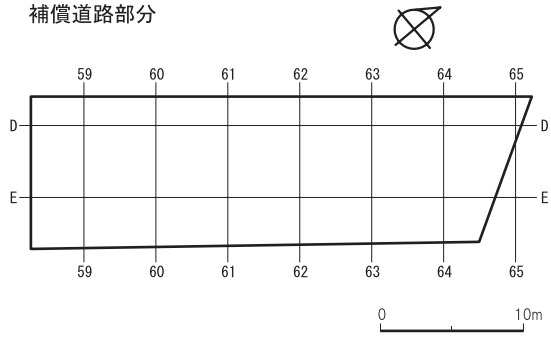


Ⅱ群ｂ類　401点

町道振替部分



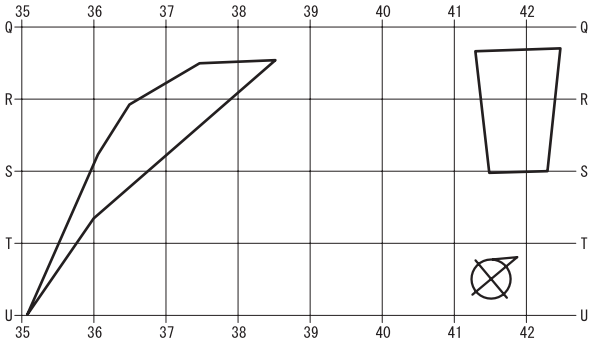
補償道路部分



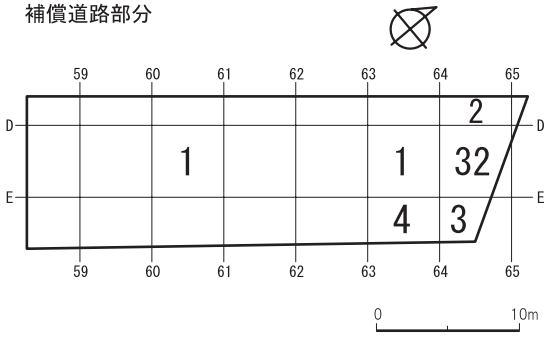
図Ⅳ－16　遺物分布図（2）

Ⅲ群　43 点

町道振替部分

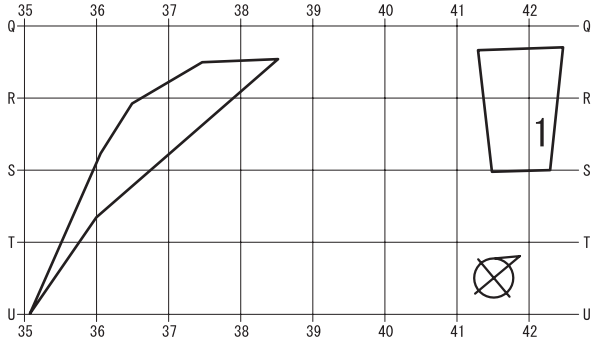


補償道路部分

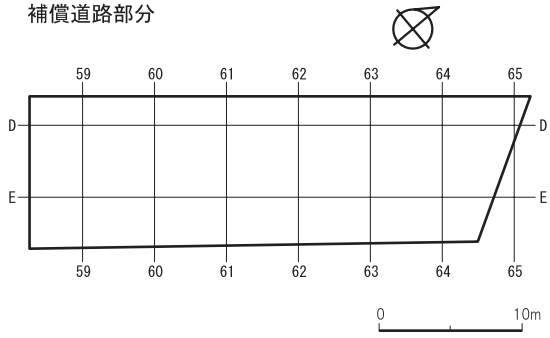


Ⅲ群ｂ類　1 点

町道振替部分

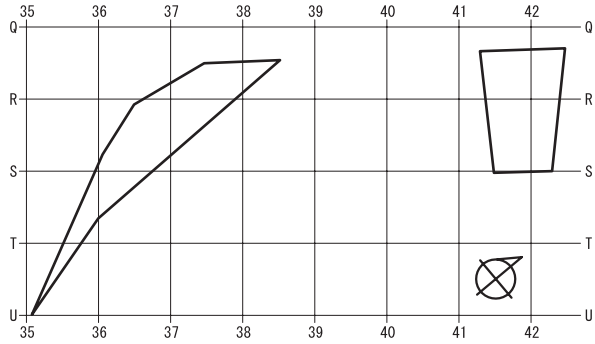


補償道路部分

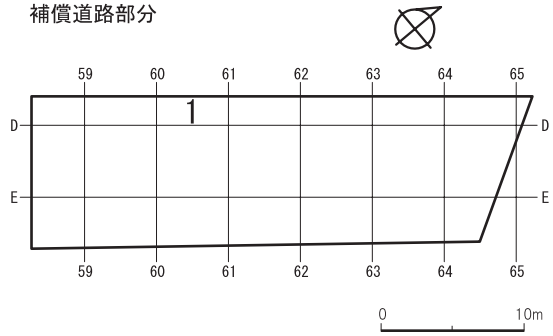


Ⅳ群　1 点

町道振替部分

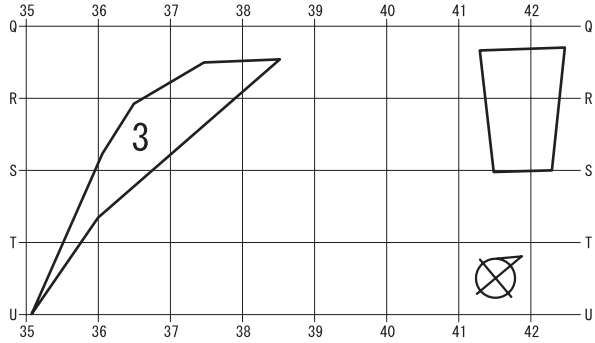


補償道路部分

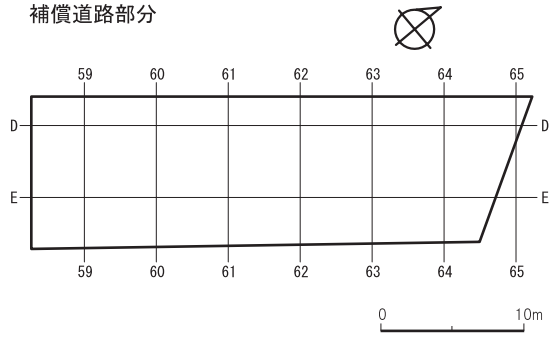


Ⅴ群ｂ類　3 点

町道振替部分



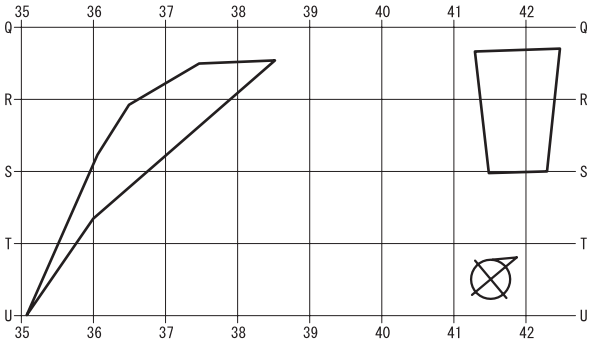
補償道路部分



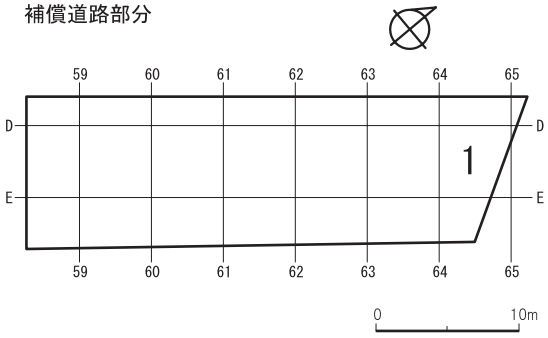
図Ⅳ－17　遺物分布図（3）

石鏃　１点

町道振替部分

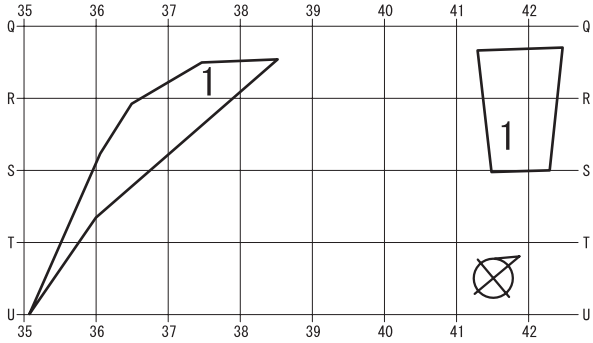


補償道路部分

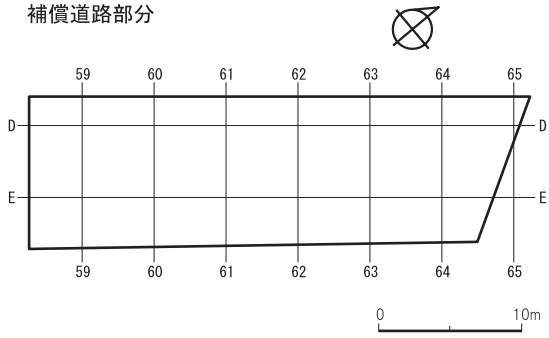


石錐　２点

町道振替部分

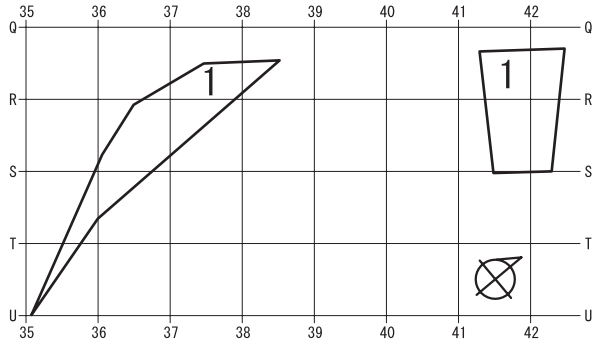


補償道路部分

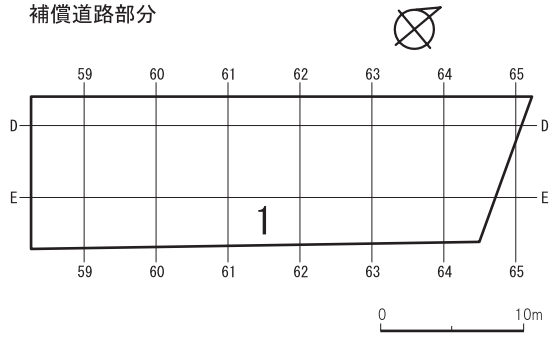


石槍・ナイフ　3点

町道振替部分

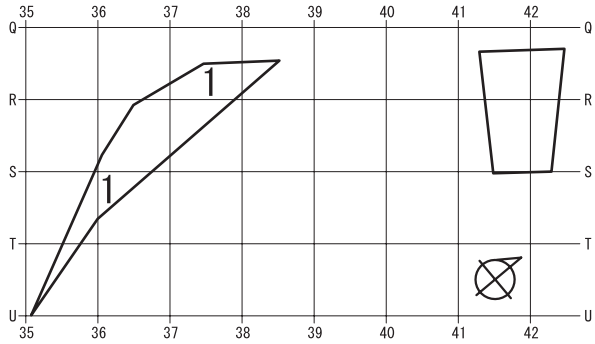


補償道路部分

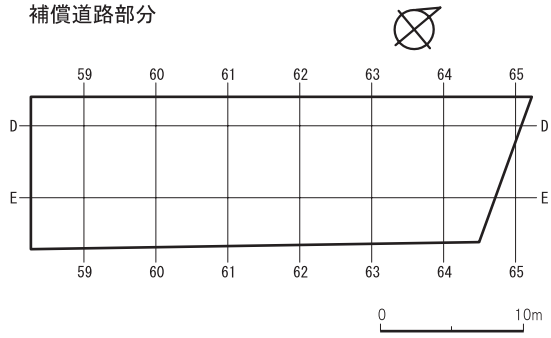


つまみ付きナイフ　２点

町道振替部分



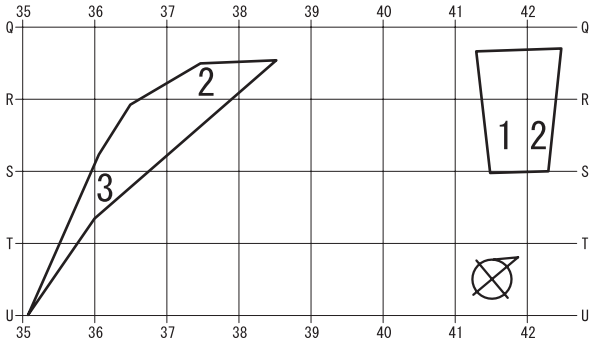
補償道路部分



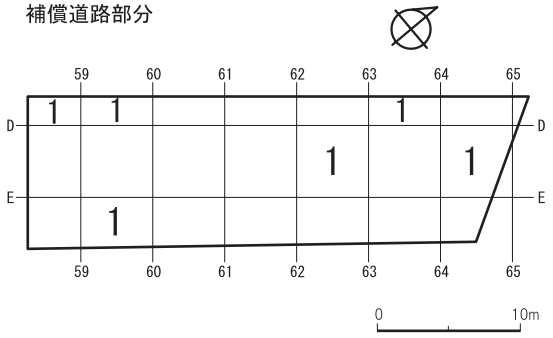
図Ⅳ－18　遺物分布図（4）

スクレイパー　14 点

町道振替部分

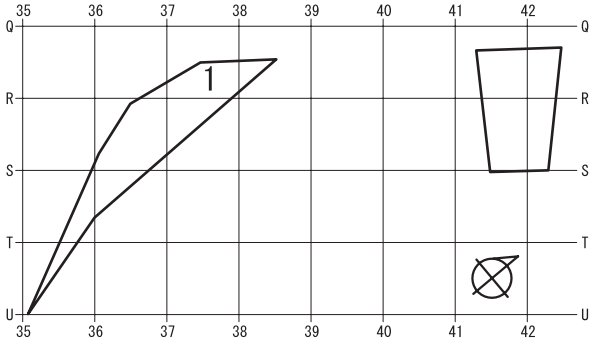


補償道路部分

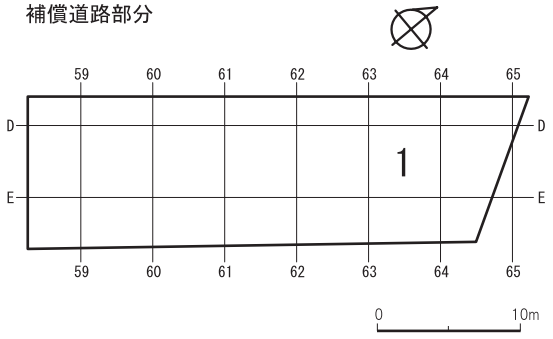


両面調整石器　2 点

町道振替部分

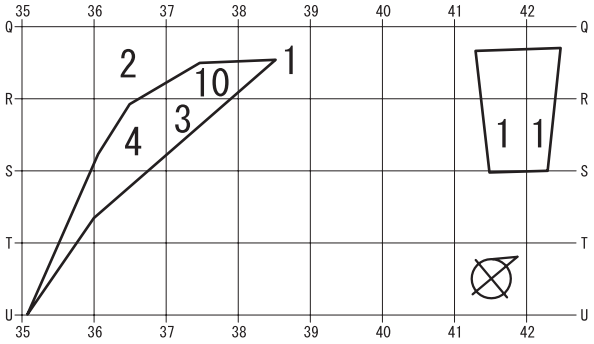


補償道路部分

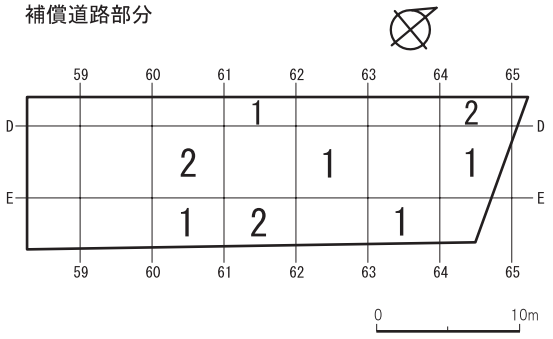


Ｒフレイク　33 点

町道振替部分

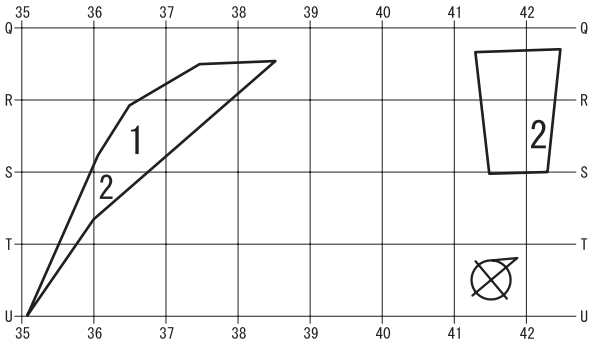


補償道路部分

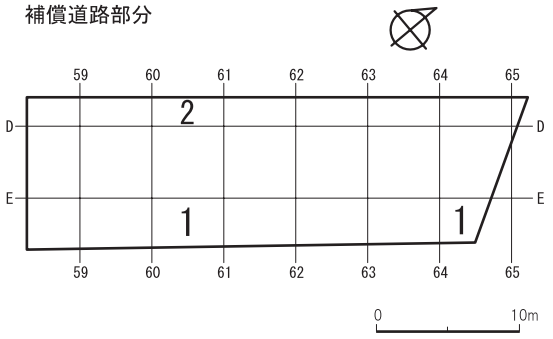


Ｕフレイク　9 点

町道振替部分



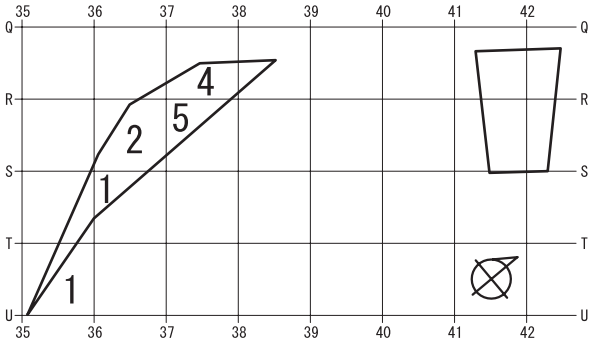
補償道路部分



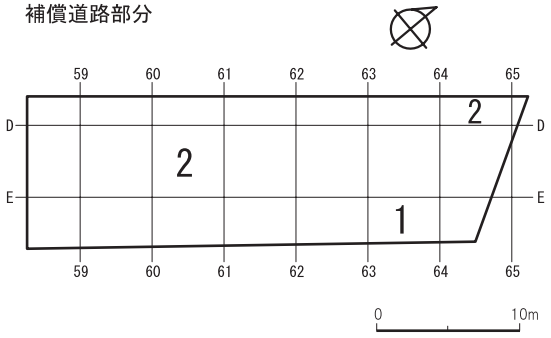
図Ⅳ－19　遺物分布図（5）

石核　18 点

町道振替部分

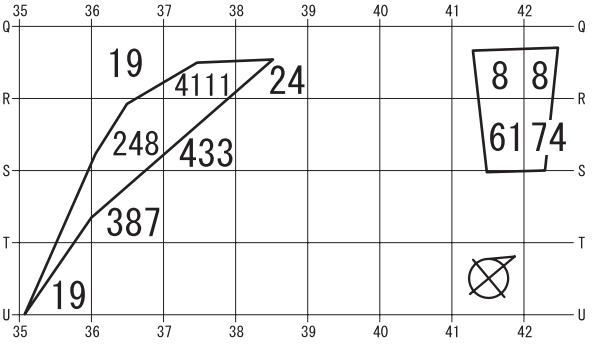


補償道路部分

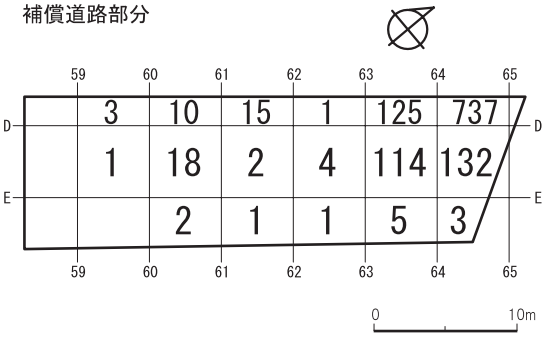


剥片　6,566 点

町道振替部分

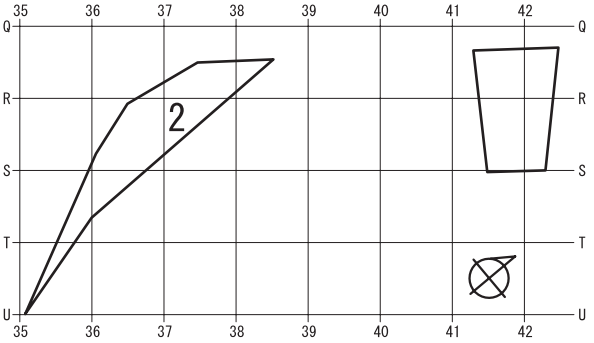


補償道路部分

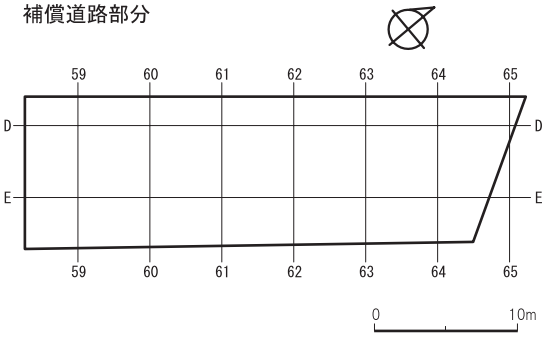


石斧　2 点

町道振替部分

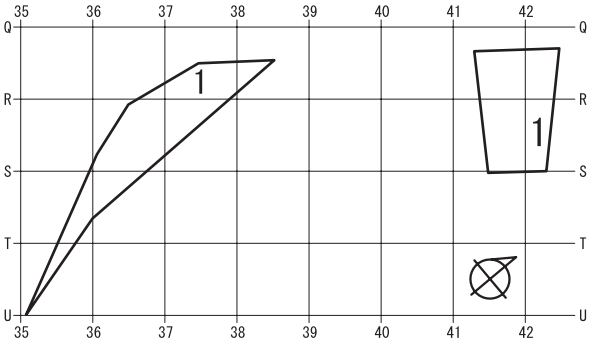


補償道路部分

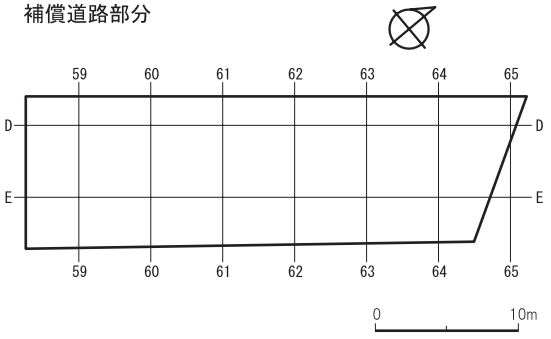


すり石　2 点

町道振替部分



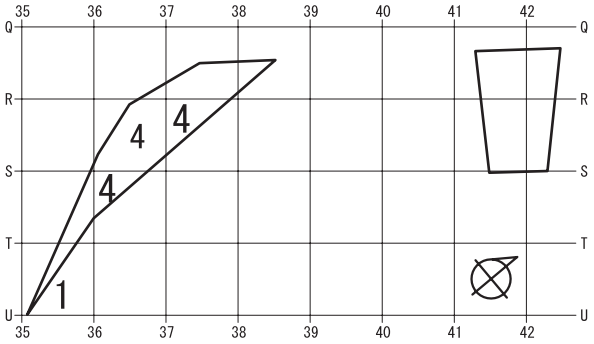
補償道路部分



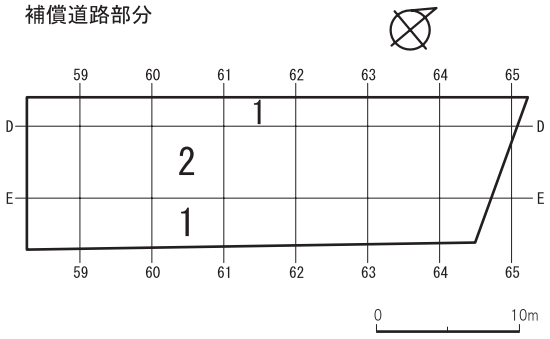
図Ⅳ－20　遺物分布図（6）

たたき石　17 点

町道振替部分

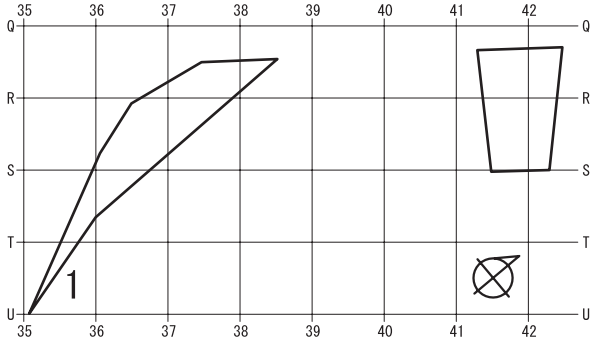


補償道路部分

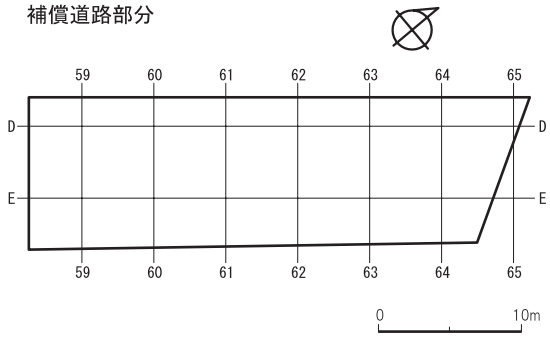


扁平打製石器　1 点

町道振替部分

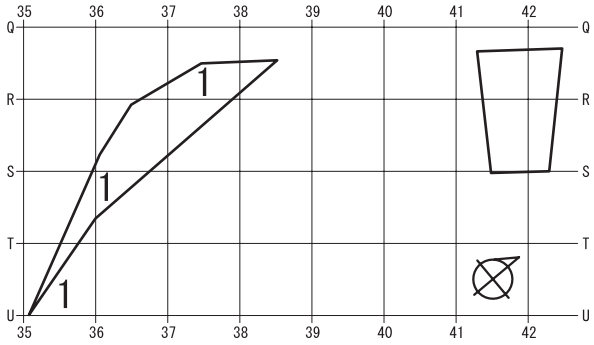


補償道路部分

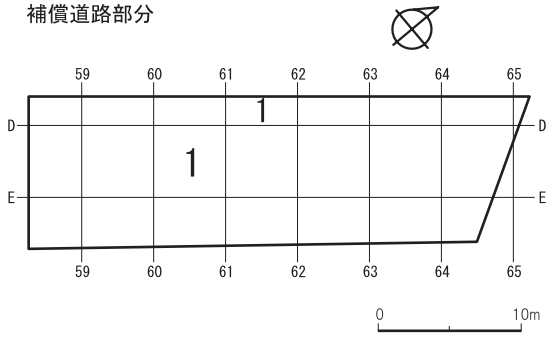


加工痕のある礫　5 点

町道振替部分

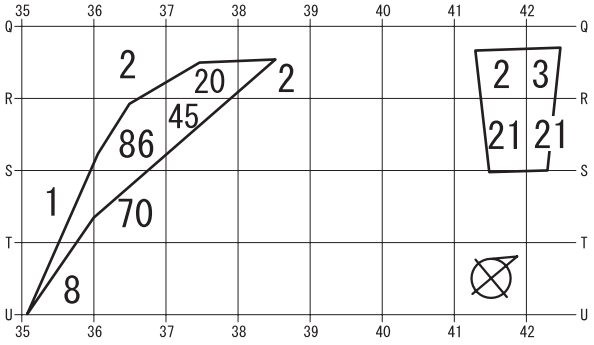


補償道路部分

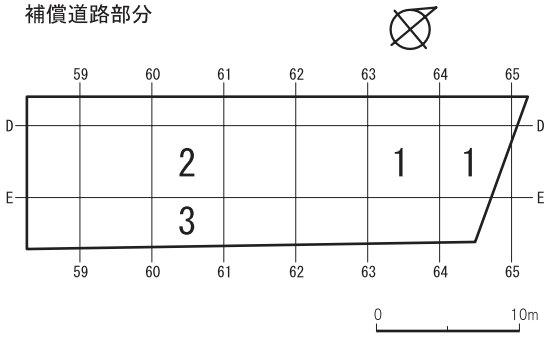


礫・礫片　288 点

町道振替部分



補償道路部分



図Ⅳ－21　遺物分布図（7）

Ⅴ　蛇内２遺跡

１　概要

調査は、これまで平成21年度に新幹線本線および付帯施設部分10,430㎡、平成22年度に新幹線本線と交差する町道蛇内線の改良工事に関わる部分850㎡が実施された。今年度は、昨年度の調査範囲に隣接する工事用道路の迂回路部分77㎡を調査した。総面積は11,357㎡である。

３か年で検出された遺構は、竪穴住居跡15軒、土坑96基、焼土14か所、集石１か所、剥片集中９か所、一括土器５か所である。

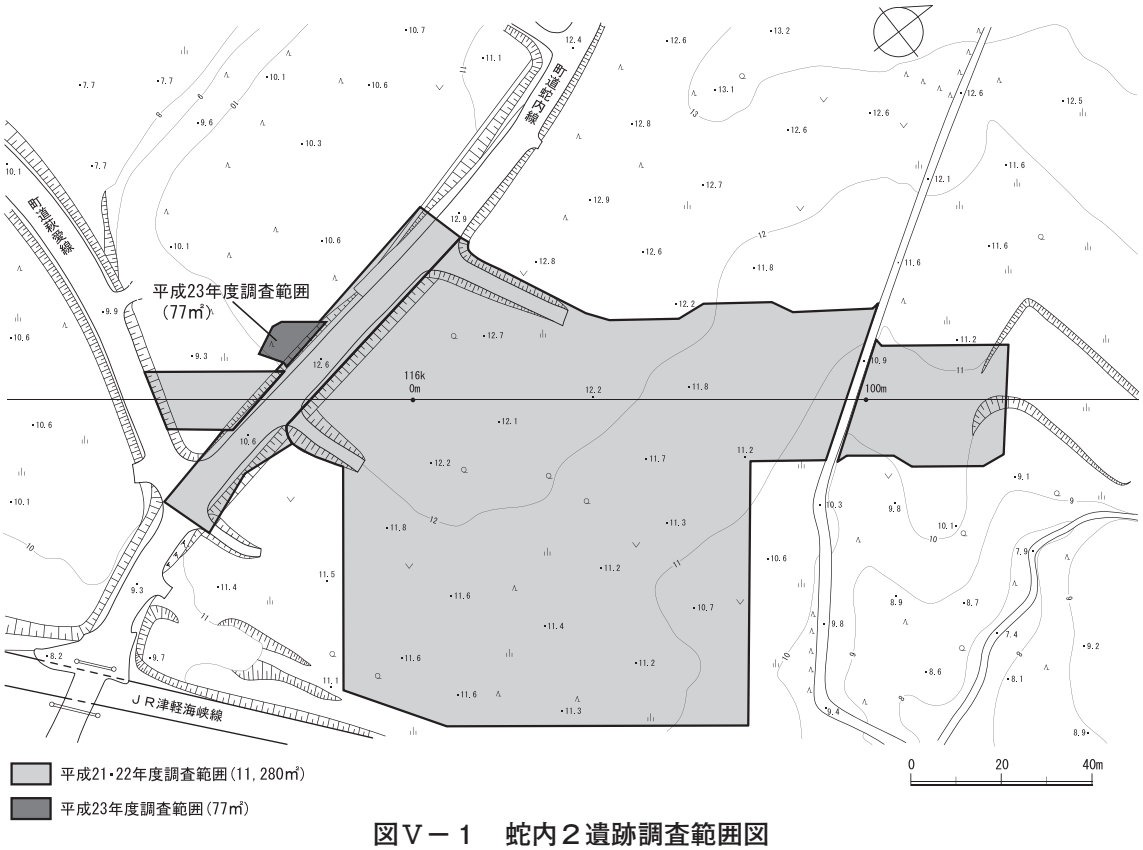
竪穴住居跡の時期は、縄文時代早期後半２軒（中茶路式期・東釧路Ⅳ式期）、前期後半１軒（円筒土器下層式期）、中期後半１軒（ノダップⅡ式期）、後期前葉10軒、不明１軒である。

土坑の時期は、縄文時代前期前半が多い。４基の土坑から、春日町式土器が出土した。フラスコ状土坑は、前期前半１基、前期後半５基、後期後葉３基が検出された。

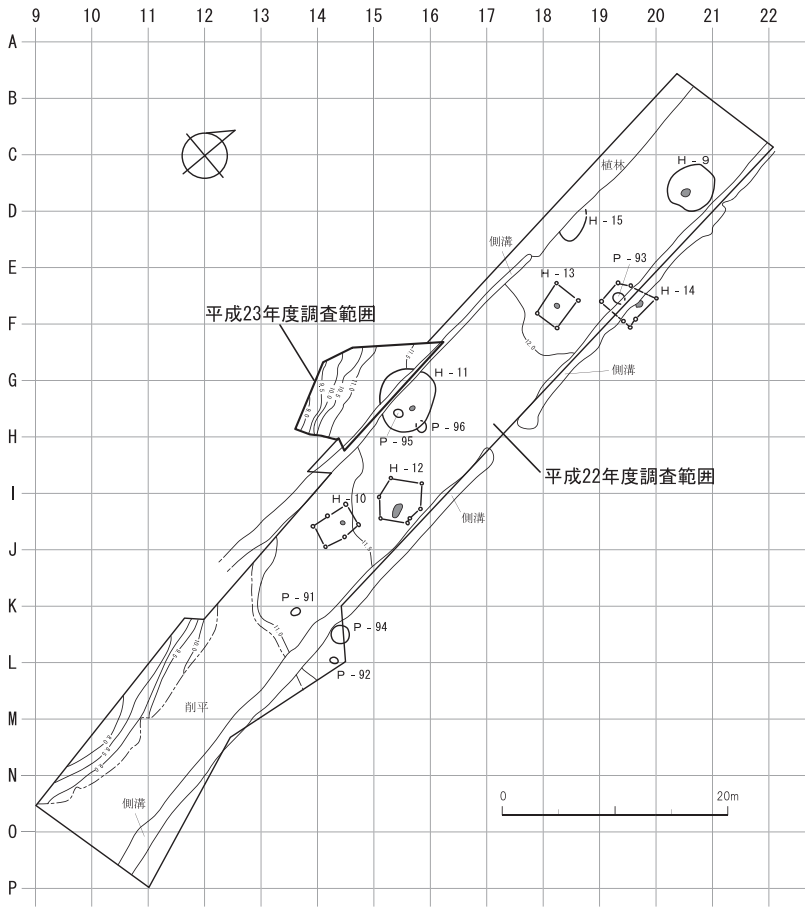
遺物は３か年の調査で、土器が33,004点、石器等が93,343点出土した（表Ⅰ－４）。縄文時代の各時期のものが出土している。なかでも縄文時代後期後葉（Ⅳ群ａ類）が最も多く、全体の約半数を占める。次いで前期後半（Ⅱ群ｂ類）が多い。剥片石器の石材は大部分が頁岩である。器種では、スクレイパー・つまみ付きナイフが約30％を占める。礫石器では、たたき石が多い。

今年度は、平成22年度に検出された竪穴住居跡（Ｈ－11）の未調査部分の調査を行った。新たに柱穴１基（ＨＰ－７）を確認した。

遺物は、土器116点、石器等59点が出土した。土器は、前期後半（円筒土器下層式期）が多い。



図Ⅴ－１　蛇内２遺跡調査範囲図



図Ⅴ－２　遺構位置図（平成22･23年度調査範囲）

２　遺構

Ｈ－11（図Ⅴ－３～５／表11～14／図版10）

確認・調査　昨年度はⅡ層を除去した段階で、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。今年度は東側の未調査部分の調査を行い、ＨＰ－７を確認した。

覆　土　上位（１層）は自然堆積層で、下位（２層）は多量のロームや炭化物を含む層が床面まで堆積している。

形　態　平面形は長円形である。床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。東側の床・壁の一部は側溝構築時に壊されている。南西側の床の一部に撹乱がみられる。

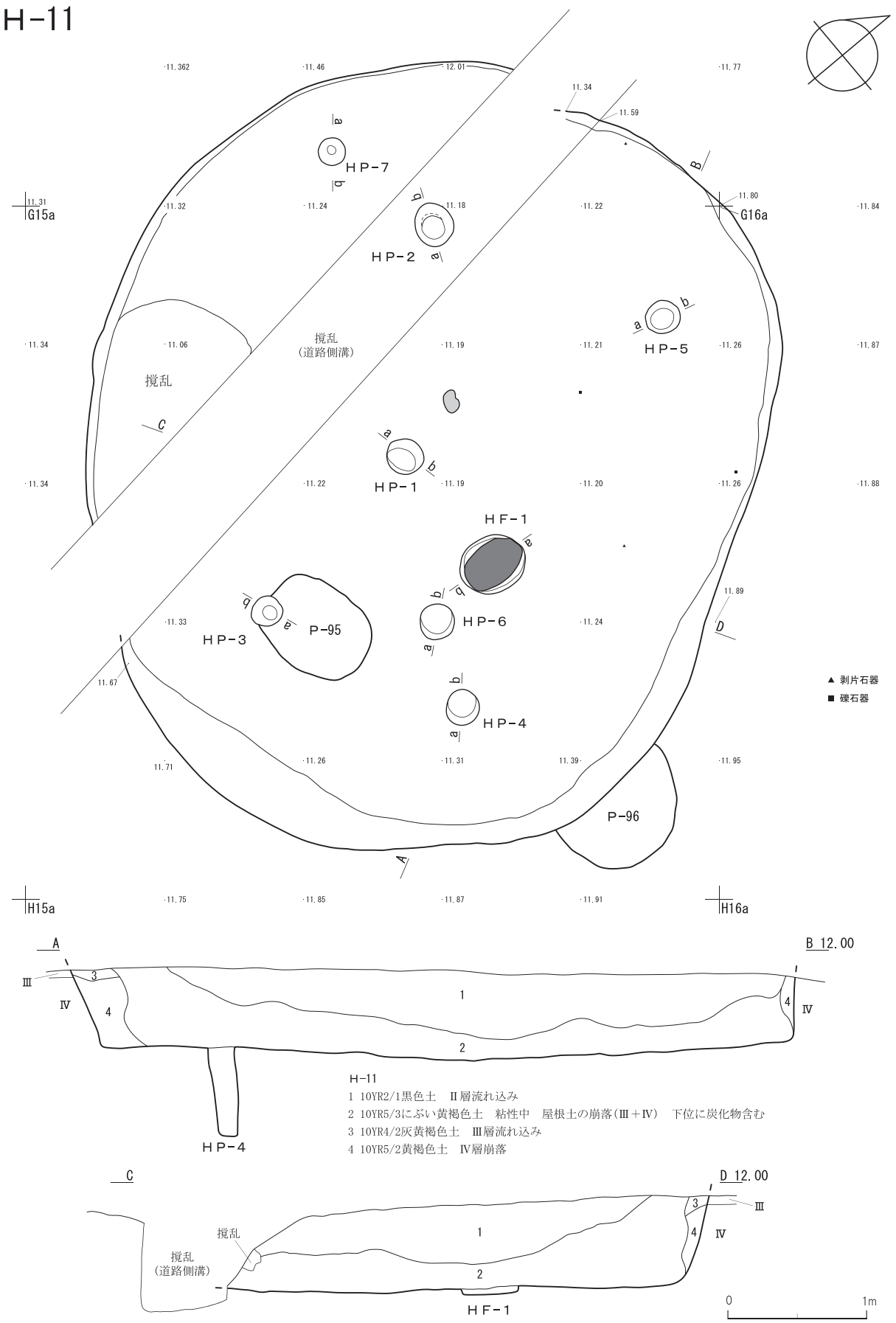
付属遺構　**ＨＦ－１**：炉は床面中央より東側で検出された。浅い掘り込みをもち、炭化物を含む。

ＨＰ－１：中央の床面で浅い柱状の小ピットが検出された。性格は不明である。

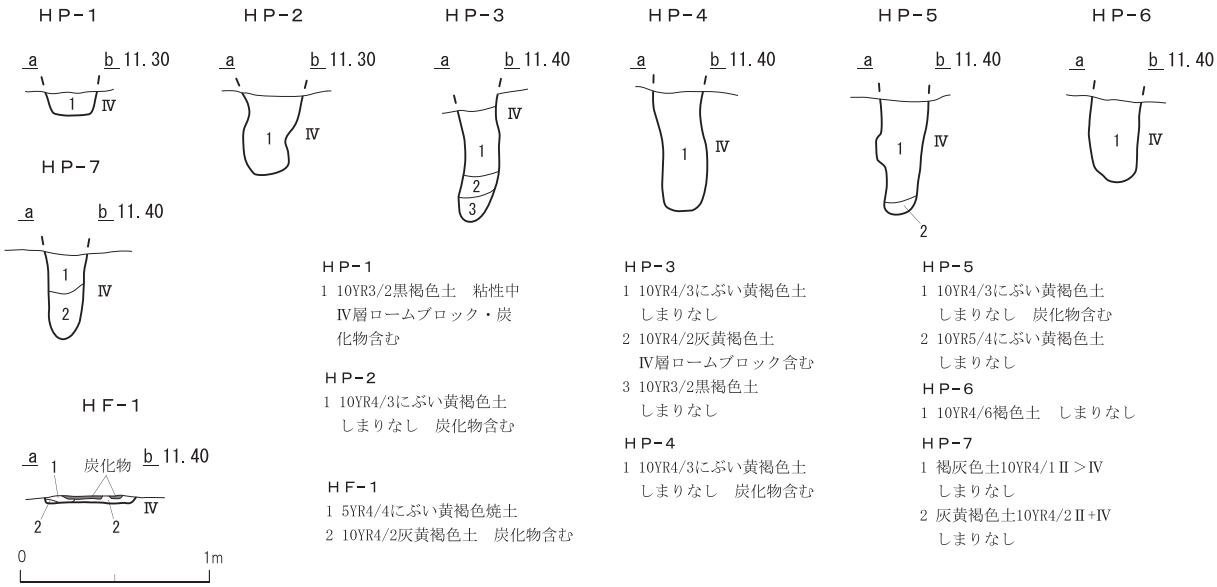
ＨＰ－２～７：柱穴は６基検出された。このうち主柱穴と思われるものが４基ある（ＨＰ－２～５）。ＨＰ－６・７は位置関係からみてＨＰ－４・２の補助的な性格のものと思われる。

遺物出土状況　昨年度は床面直上からスクレイパー・石のみ・すり石が出土した。北西側の１層からⅡ群ｂ類土器がまとまって出土した。今年度は覆土中より土器（Ⅱ群ｂ類）、スクレイパー・Ｕフレイク・剥片・礫が出土した。

時　期　出土したⅡ群ｂ類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。


H-11
HP-7
HP-2
HP-5
HP-1
HF-1
HP-6
HP-3
P-95
HP-4
P-96
撹乱
撹乱
(道路側溝)
G15a
G16a
H15a
H16a
▲ 剥片石器
■ 礫石器
A
B 12.00
C
D 12.00
H-11
1 10YR2/1黒色土　Ⅱ層流れ込み
2 10YR5/3にぶい黄褐色土　粘性中　屋根土の崩落(Ⅲ＋Ⅳ)　下位に炭化物含む
3 10YR4/2灰黄褐色土　Ⅲ層流れ込み
4 10YR5/2黄褐色土　Ⅳ層崩落
0
1m

図Ⅴ－３　Ｈ－11 (1)

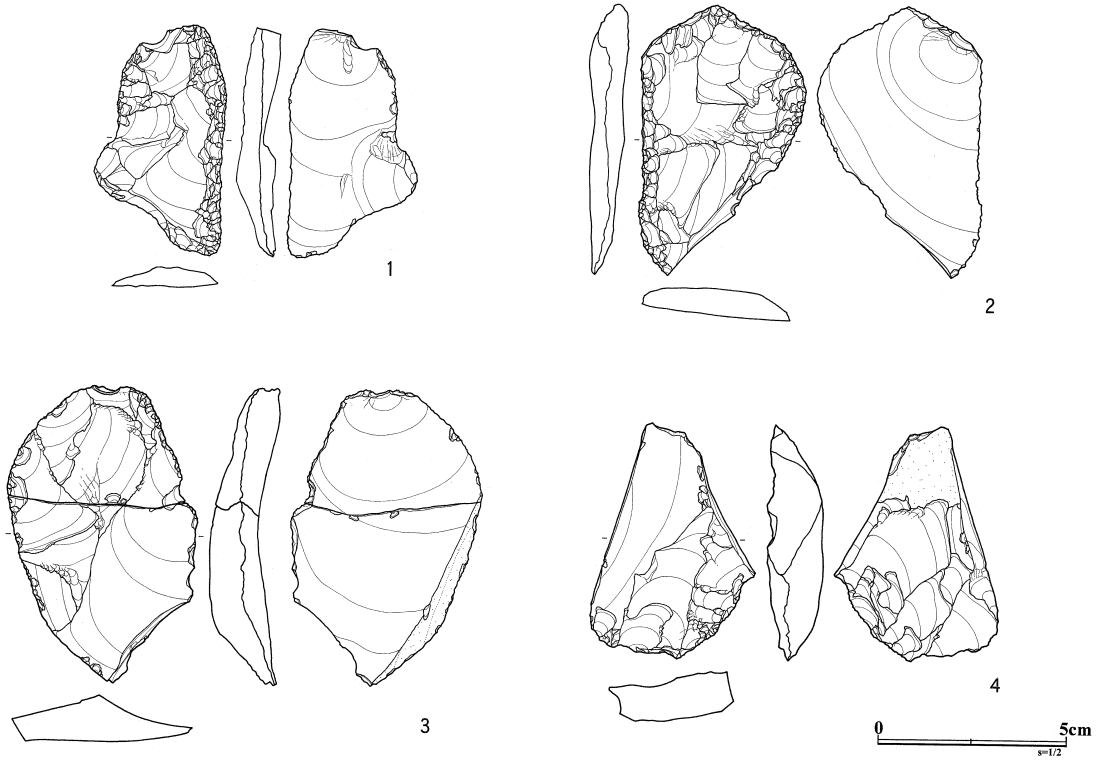


図Ⅴ－４　Ｈ－11（2）

３　出土遺物（図Ⅴ－５／表14／図版10）

Ｈ－11からは土器27点、石器等21点が出土している。１～３はＨ－11出土の遺物。１・２はスクレイパー。剥片の側縁に刃部が作りだされる。３はＵフレイク。背面側縁上部に使用痕がある。包含層出土のものと接合している。

包含層からは土器89点、石器等38点が出土している。土器は前期後半と後期前半のものが出土している。石器等はＲフレイク、Ｕフレイク、剥片、礫・礫片が出土している。４はＲフレイク。下端・側縁の一部に加工痕がある。腹面に自然面を残す。（佐藤）



図Ⅴ－５　遺構・包含層出土の石器

表１　大平４遺跡　検出遺構規模一覧

遺構種別	遺構名	調査区	規模(m) 上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	深さ	時　期 (縄文時代)	特　徴	図番号	図版番号
住居跡	H－1	Q・R37	2.52	2.40	2.46	2.25	0.16	早期後半		図Ⅳ－5	図版2
	H－2	Q・R36	(2.80)	(1.47)	(2.62)	(1.44)	0.21	早期後半		図Ⅳ－5	図版2
土　坑	P－27	R36	1.21	1.02	1.15	0.90	0.11	前期後半		図Ⅳ－6	図版2
	P－28	R37	1.17	0.58	1.08	0.53	0.29	晩期中葉	底面に完形の壷	図Ⅳ－6	図版2
剥片集中	FL－15	C63・64・65／D63・64	(8.20)	(2.90)	—	—	—	中期		図Ⅳ－7	図版1
	FL－16	D63	0.72	0.51	—	—	—	中期		図Ⅳ－7	図版1

表２　大平４遺跡　遺構出土遺物一覧

遺構種別	遺構名	層　位	遺物名	分　類	石　材	点　数	備　考
住居跡	H－1	床面直上	剥片石器	剥片	頁岩	5	
					メノウ	1	
			礫石器	礫	珪岩	1	
		小　計				7	
	H－2	床面直上	土器	Ⅱ群ｂ類		1	
			剥片石器	つまみ付きナイフ	頁岩	1	
				スクレイパー	頁岩	1	
				剥片	頁岩	5	
					黒曜石	1	
			礫石器	礫	泥岩	1	
					メノウ	1	
					珪岩	1	
		小　計				12	
土　坑	P－27	坑底	土器	Ⅰ群ｂ－4類		2	
				Ⅱ群ｂ類		3	
			剥片石器	石槍・ナイフ	頁岩	1	
				つまみ付きナイフ	頁岩	2	
				剥片	頁岩	3	
			礫石器	すり石	安山岩	1	北海道式石冠片
				礫・礫片	砂岩	1	
					泥岩	1	
		小　計				14	
	P－28	坑底	土器	Ⅴ群ｂ類		1	完形の壷形土器
		覆土	土器	Ⅴ群ｂ類		1	
			剥片石器	剥片	頁岩	2	
			礫石器	礫	泥岩	1	
		小　計				5	
剥片集中	FL－15	Ⅱ	土器	Ⅱ群		19	
				Ⅲ群		3	
			剥片石器	石鏃	黒曜石	1	
				つまみ付きナイフ	頁岩	2	
				スクレイパー	頁岩	3	
				両面調整石器	頁岩	4	
				Ｒフレイク	頁岩	8	
				石核	頁岩	3	
				剥片	頁岩	5,724	
					チャート	1	
			礫石器	たたき石	チャート	1	
					安山岩	1	
				礫	石英	2	
					砂岩	1	
					泥岩	1	
					凝灰岩	1	
		小　計				5,775	
	FL－16	Ⅱ	剥片石器	剥片	頁岩	151	
		小　計				151	
合　計						5,964	

表３　大平４遺跡　遺構出土土器点数一覧

遺構種別	遺構名	分類								合計
		Ⅰ群b－3類	Ⅰ群b－4類	Ⅱ群	Ⅱ群b類	Ⅲ群	Ⅲ群b類	Ⅳ群	Ⅴ群b類	
住居跡	H－2	0	0	0	1	0	0	0	0	1
土坑	P－27	0	2	0	3	0	0	0	0	5
	P－28	0	0	0	0	0	0	0	2	2
剥片集中	FL－15	0	0	3	0	19	0	0	0	22
合計		0	2	3	4	19	0	0	2	30

表４　大平４遺跡　遺構出土石器等点数一覧

遺構種別	遺構名	分類																合計
		石鏃	石錐	石槍・ナイフ片	つまみ付きナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク	石核	剥片	石斧片	すり石	たたき石	扁平打製石器	加工痕ある礫	礫・礫片	
住居跡	H－1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	1	7
	H－2	0	0	0	1	1	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	3	11
土坑	P－27	0	0	0	2	0	1	0	0	0	3	0	1	0	0	0	2	9
	P－28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	3
剥片集中	FL－15	1	0	0	2	3	4	8	0	3	5,725	0	0	2	0	0	5	5,753
	FL－16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	151	0	0	0	0	0	0	151
合計		1	0	0	5	4	5	8	0	3	5,893	0	1	2	0	0	12	5,934

表５　大平４遺跡　包含層出土土器点数一覧

層位	分類								合計
	Ⅰ群b－3類	Ⅰ群b－4類	Ⅱ群	Ⅱ群b類	Ⅲ群	Ⅲ群b類	Ⅳ群	Ⅴ群b類	
Ⅱ層	1	145	1	399	41	0	1	3	591
Ⅲ層	0	37	0	2	2	1	0	0	42
合計	1	182	1	401	43	1	1	3	633

表６　大平４遺跡　包含層出土石器等点数一覧

層位	分類																合計
	石鏃	石錐	石槍・ナイフ片	つまみ付きナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク	石核	剥片	石斧片	すり石	たたき石	扁平打製石器	加工痕ある礫	礫・礫片	
Ⅱ層	1	2	2	2	13	1	33	9	18	6,436	2	2	17	1	5	278	6,822
Ⅲ層	0	0	1	0	1	0	0	0	0	62	0	0	0	0	0	9	73
撹乱	0	0	0	0	0	1	0	0	0	68	0	0	0	0	0	1	70
合計	1	2	3	2	14	2	33	9	18	6,566	2	2	17	1	5	288	6,965

表７　大平４遺跡　遺構出土掲載土器一覧

遺構名	図番号		遺構名・遺物番号×点数	層　位	部　位	分　類	備　考	図版番号
H－２	図Ⅳ－８－１		H－２・１×１	床面直上	胴部	Ⅱｂ		図版３
P－27	図Ⅳ－８－１	a	P－27・３×１	坑底	胴部	Ⅰｂ－４	同一個体	図版３
		b	P－27・４×１					
	図Ⅳ－８－２		P－27・１×１	坑底	胴部	Ⅱｂ		
	図Ⅳ－８－３		P－27・14×１	坑底	胴部	Ⅱｂ		
P－28	図Ⅳ－８－１		P－28・４×１	坑底	復元個体（口縁～底部）	Ⅴｂ		図版３
FL－15	図Ⅳ－８－１		FL－15・２×１	Ⅱ	口縁部	Ⅲ		図版３
	図Ⅳ－８－２		FL－15・４×１	Ⅱ	胴部	Ⅲ		

表８　大平４遺跡　遺構出土掲載石器一覧

遺構名	図番号	遺物番号	層　位	分　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材　質	備　考	図版番号
H－２	図Ⅳ－８－２	9	床面直上	つまみ付きナイフ	(5.00)	2.70	0.85	10.4	頁岩		図版３
	図Ⅳ－８－３	1	床面直上	スクレイパー	4.25	3.30	1.05	13.5	頁岩		
P－27	図Ⅳ－８－４	8	坑底	つまみ付きナイフ	8.25	3.00	0.70	15.5	頁岩		図版３
	図Ⅳ－８－５	7	坑底	つまみ付きナイフ	(6.60)	2.55	0.55	7.9	頁岩		
	図Ⅳ－８－６	13	坑底	両面調整石器	(5.20)	2.40	0.50	7.0	頁岩	篦状	
FL－15	図Ⅳ－８－３	1	Ⅱ	石鏃	3.00	1.80	0.40	1.6	黒曜石	三角形平基	図版３
	図Ⅳ－８－４	2・3	Ⅱ	つまみ付きナイフ	6.20	2.40	0.70	7.1	頁岩		
	図Ⅳ－８－５	13	Ⅱ	両面調整石器片	(6.10)	2.20	0.65	10.5	頁岩		
	図Ⅳ－９－６	7	Ⅱ	スクレイパー片	3.80	4.80	2.20	39.4	頁岩		
	図Ⅳ－９－７	6	Ⅱ	スクレイパー	8.50	7.70	2.10	114.0	頁岩		
	図Ⅳ－９－８	4	Ⅱ	両面調整石器片	(6.90)	5.00	1.20	46.1	頁岩		
	図Ⅳ－９－９	9	Ⅱ	両面調整石器片	(8.75)	6.20	2.20	57.4	頁岩		図版４
	図Ⅳ－９－10	8	Ⅱ	両面調整石器	21.20	7.90	2.70	396.3	頁岩		
	図Ⅳ－９－11	22	Ⅱ	たたき石	8.35	6.95	4.40	335.0	チャート		

表９　大平４遺跡　包含層出土掲載土器一覧

図番号		調査区・遺物番号×点数	層位	部　位	分 類	備　考	図版番号
図Ⅳ－10－１		R37・1×1	Ⅱ	胴部	Ⅰｂ－3		図版５
図Ⅳ－10－２	a	Q37・3×1	Ⅱ	口縁部	Ⅰｂ－４	同一個体	
	b	Q37・3×2		胴部			
	c	Q37・3×1		胴部			
	d	Q37・3×1		胴部			
図Ⅳ－10－３	a	Q42・2×3	Ⅲ	口縁部	Ⅰｂ－４	同一個体	
	b	Q42・1×1	Ⅱ	胴部			
	c	Q42・2×1	Ⅲ	胴部			
図Ⅳ－10－４		Q37・3×3	Ⅱ	口縁部	Ⅰｂ－４		
図Ⅳ－10－５		R42・1×2	Ⅱ	口縁部	Ⅰｂ－４		
図Ⅳ－10－６	a	Q42・1×2	Ⅱ	胴部	Ⅰｂ－４	同一個体	
	b	Q42・1×3		胴部			
	c	Q42・1×1,R42・1×１　計２		胴部			
図Ⅳ－10－７		R42・1×１	Ⅱ	胴部	Ⅰｂ－４		
図Ⅳ－10－８		R41・4×1	Ⅲ	胴部	Ⅰｂ－４		
図Ⅳ－10－９		R41・3×2	Ⅱ	胴部	Ⅰｂ－４		
図Ⅳ－10－10		Q37・3×1	Ⅱ	胴部	Ⅰｂ－４		
図Ⅳ－11－１		Q37・5×38,Q37・6×16　計54	Ⅱ	復元個体(胴～底部)	Ⅱｂ		図版６
図Ⅳ－11－２	a	R37・3×3	Ⅱ	口縁部	Ⅱｂ	同一個体	
	b	R37・3×2		口縁部			
	c	R37・4×2		胴部			
	d	R37・3×2		胴部			
図Ⅳ－11－３	a	S36・1×1	Ⅱ	口縁部	Ⅱｂ	同一個体	図版７
	b	S36・1×1		胴部			
	c	S36・1×1		胴部			
	d	S36・1×6		胴部			
図Ⅳ－11－４		S36・1×1	Ⅱ	口縁部	Ⅱｂ		
図Ⅳ－11－５		T35・1×2	Ⅱ	胴部	Ⅱｂ		
図Ⅳ－11－６		S35・1×１	Ⅲ	胴部	Ⅱｂ		
図Ⅳ－11－７		R36・5×1	Ⅱ	胴部	Ⅱｂ		
図Ⅳ－11－８		R36・1×1	Ⅱ	胴部	Ⅱｂ		
図Ⅳ－12－１	a	C64・1×1,D64・1×2　計３	Ⅱ	胴部	Ⅲ	同一個体	図版４
	b	D64・1×3		胴部			
	c	D60・1×1		胴部			
図Ⅳ－12－２		D60・1×1	Ⅲ	胴部	Ⅲ		
図Ⅳ－12－３		E64・3×1	Ⅲ	胴部	Ⅲ		
図Ⅳ－12－４	a	R36・2×１	Ⅱ	口縁部	Ⅴｂ	同一個体	
	b	R36・2×1		胴部			

表10　大平４遺跡　包含層出土掲載石器一覧

図番号	調査区	遺物番号	層位	分　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材　質	備　考	図版番号
図Ⅳ－13－１	D64	5	Ⅱ	石鏃	2.15	1.00	0.35	0.5	頁岩	有茎凸基	図版７
図Ⅳ－13－２	Q37	33	Ⅱ	石錐	7.00	2.35	0.90	8.6	頁岩		
図Ⅳ－13－３	Q37	12	Ⅱ	スクレイパー	4.40	4.60	1.70	38.1	頁岩		
図Ⅳ－13－４	S36	2	Ⅱ	スクレイパー	5.00	4.40	1.15	20.1	頁岩		
図Ⅳ－13－５	C63 D62	1 1	Ⅱ	スクレイパー	11.20	4.65	1.40	79.0	頁岩	篦状 ２点接合	図版８
図Ⅳ－13－６	D63	2	撹乱	両面調整石器	11.50	5.65	2.10	133.7	頁岩		
図Ⅳ－13－７	Q37	13	Ⅱ	両面調整石器	11.10	7.70	3.80	281.7	頁岩		
図Ⅳ－14－８	R37	12	Ⅱ	たたき石	8.85	6.00	3.40	249.2	チャート		
図Ⅳ－14－９	R36	34	Ⅱ	たたき石	10.10	5.80	3.30	239.7	頁岩		
図Ⅳ－14－10	R36 S36	35 9	Ⅱ	たたき石	15.50	10.10	4.45	963.0	砂岩	２点接合	
図Ⅳ－14－11	R42	8	Ⅱ	すり石	8.65	16.30	6.90	1282.0	安山岩		
図Ⅳ－14－12	T35	5	Ⅱ	扁平打製石器片	7.45	8.20	1.25	99.8	安山岩		

表11　蛇内２遺跡　検出遺構規模一覧

遺構種別	遺構名	調査区	規模（m）					時　期 (縄文時代)	特　徴	図番号	図版番号
			上端		下端		深さ				
			長軸	短軸	長軸	短軸					
住居跡	H－11	F・G15	5.74	4.87	5.45	4.72	0.67	前期後半		図Ⅴ－３	図版10

表12　蛇内２遺跡　遺構出土遺物一覧

遺構種別	遺構名	層　位	遺物名	分　類	石　材	点　数	備　考
住居跡	H－11	覆土	土器	Ⅱ群ｂ類		27	
			剥片石器	スクレイパー	頁岩	2	
				Ｕフレイク	頁岩	1	
				剥片	頁岩	10	
			礫石器	礫	安山岩	8	
		小　計				48	
合　計						48	

表13　蛇内２遺跡　出土遺物点数一覧

遺構種別	遺構名 層位	分　類									合計
		土器			石器類						
		Ⅱ群ｂ類	Ⅳ群ａ類	小計	スクレイパー	Ｒフレイク	Ｕフレイク	剥片	礫・礫片	小計	
住居跡	H－11	27	0	27	2	0	1	10	8	21	48
包含層	Ⅱ　層	71	18	89	0	1	1	13	23	38	127
合　計		98	18	116	2	1	2	23	31	59	175

表14　蛇内２遺跡　掲載石器一覧

図番号	遺構名 調査区	遺物番号	層位	分　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備　考	図版番号
図Ⅴ－5－1	H－11	7	覆土	スクレイパー	6.10	3.40	1.00	17.47	頁岩		図版10
図Ⅴ－5－2	H－11	6	覆土	スクレイパー	7.20	4.35	1.00	25.31	頁岩		
図Ⅴ－5－3	H－11 F13	10 2	覆土 Ⅱ	Ｕフレイク	7.95	5.00	1.45	48.56	頁岩	２点接合	
図Ⅴ－5－4	F13	4	Ⅱ	Ｒフレイク	6.30	4.10	1.45	31.86	頁岩		

写真図版

調査風景（補償道路部分）

完掘（補償道路部分）

FL－16　検出状況

FL－15　検出状況

完掘（町道振替部分東側）

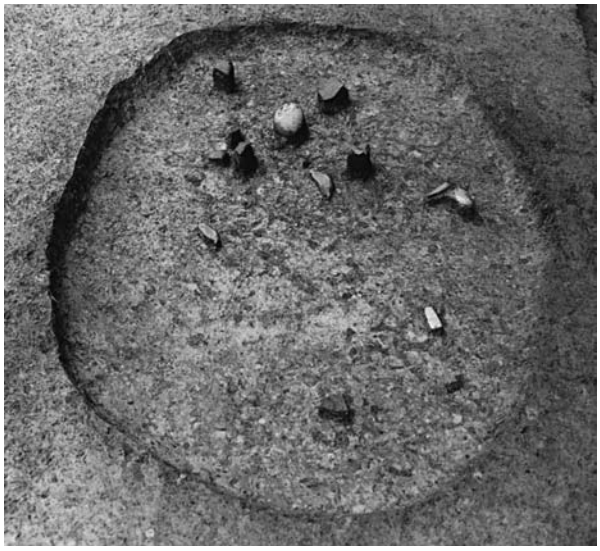
調査風景（町道振替部分西側）

大平４遺跡　調査状況・遺構（1）

図版２

Ｈ－１　完掘

Ｈ－２　完掘



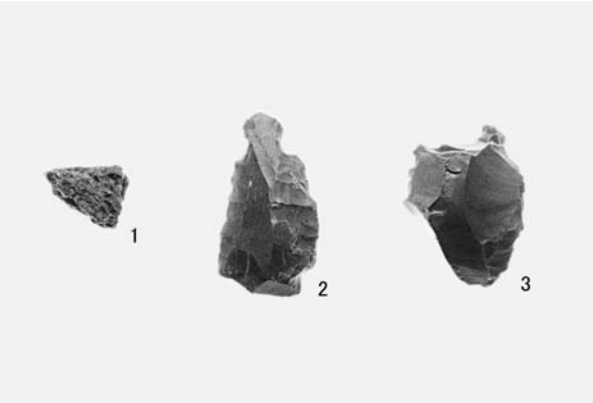
Ｐ－27　遺物出土状況

Ｐ－27　セクション

Ｐ－28　壷形土器検出状況

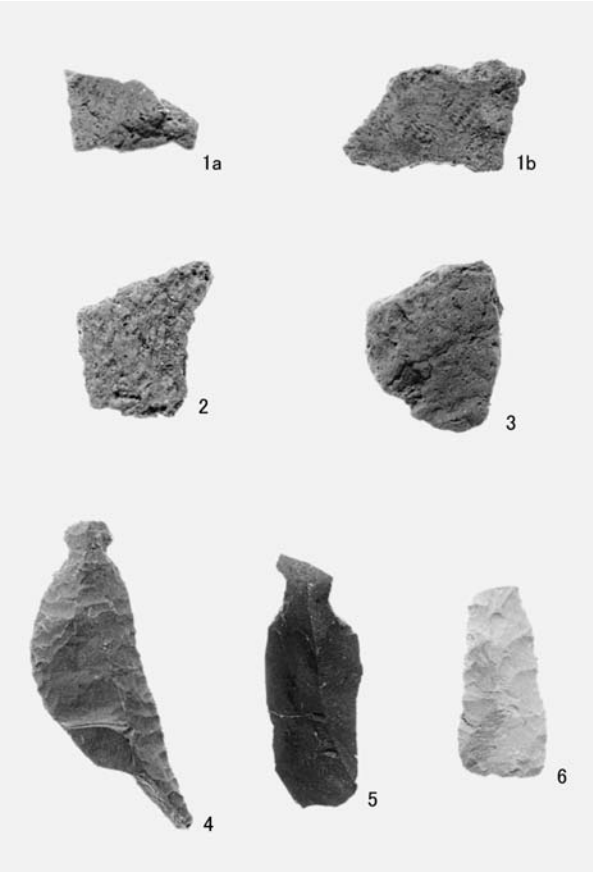
Ｐ－28　遺物出土状況

大平４遺跡　遺構（2）

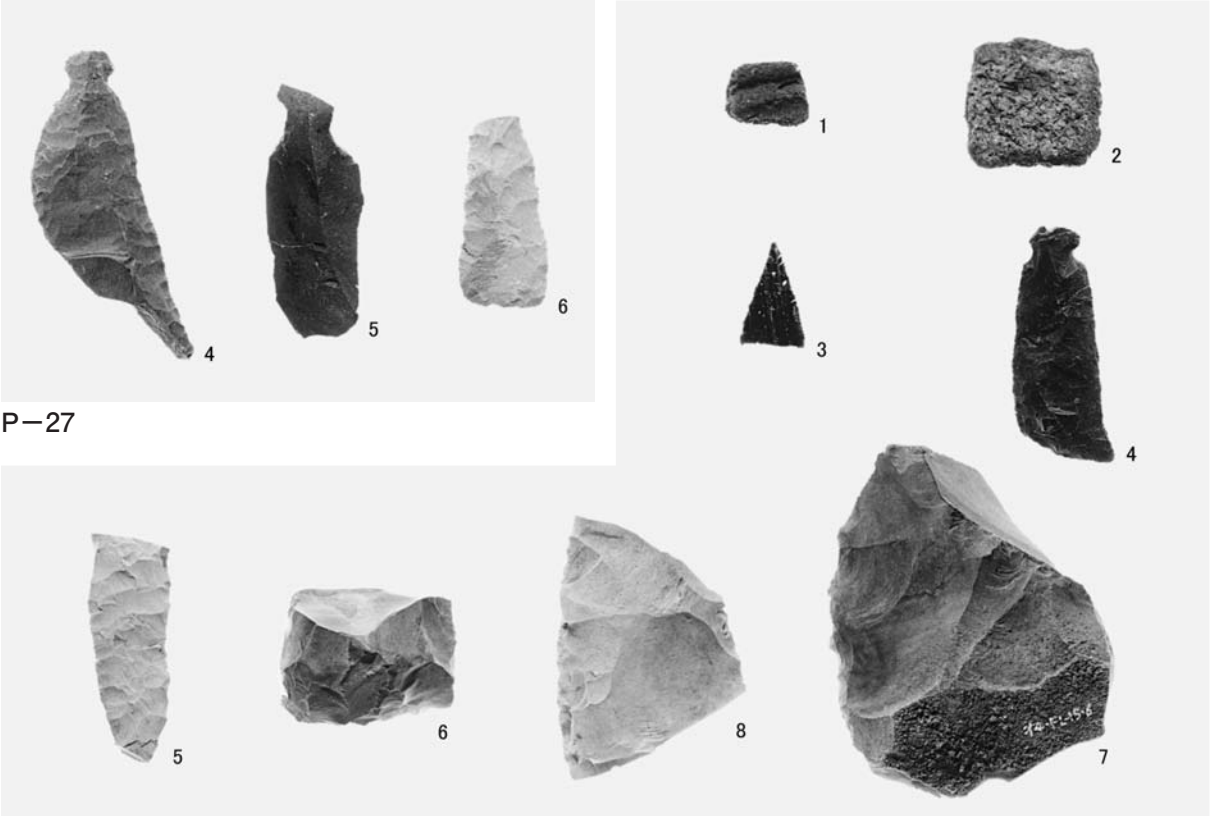


H－２

P－28



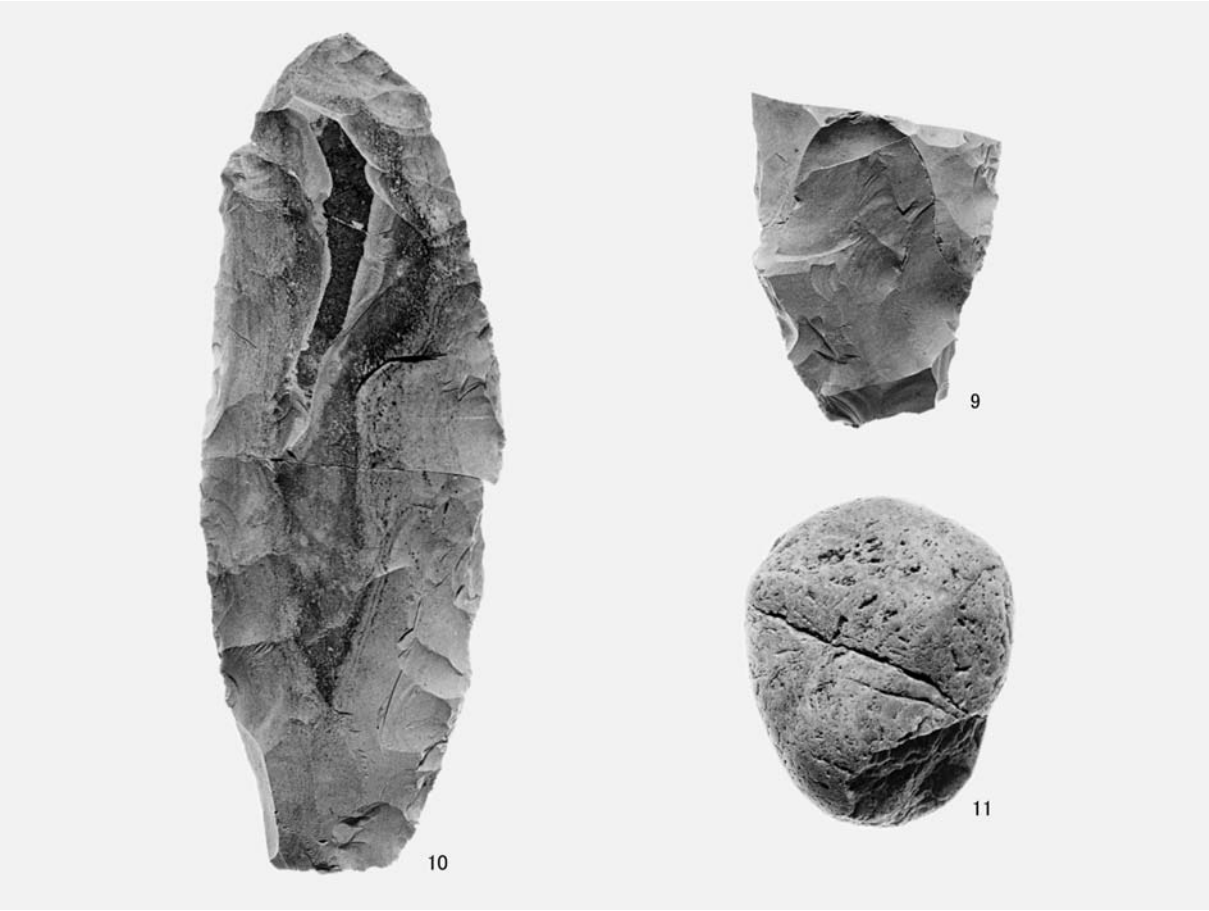
P－27



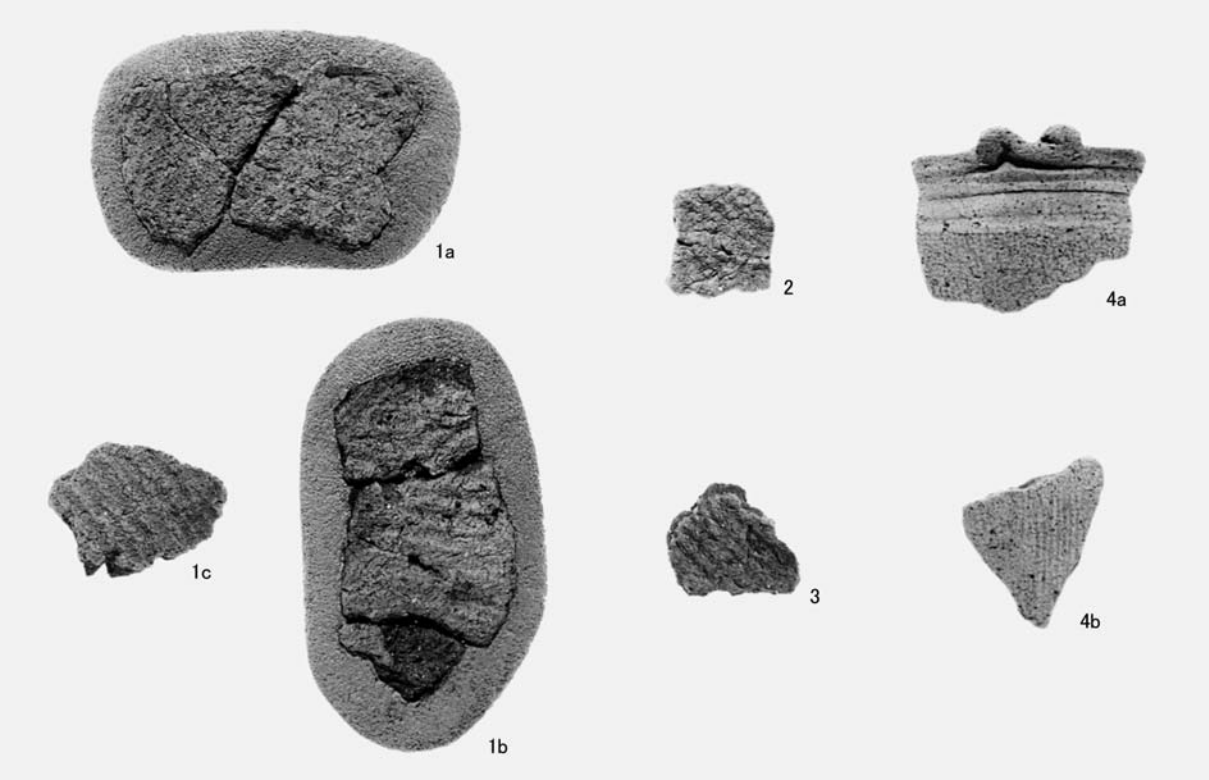
FL－15

大平４遺跡　遺構出土の遺物（1）

図版４

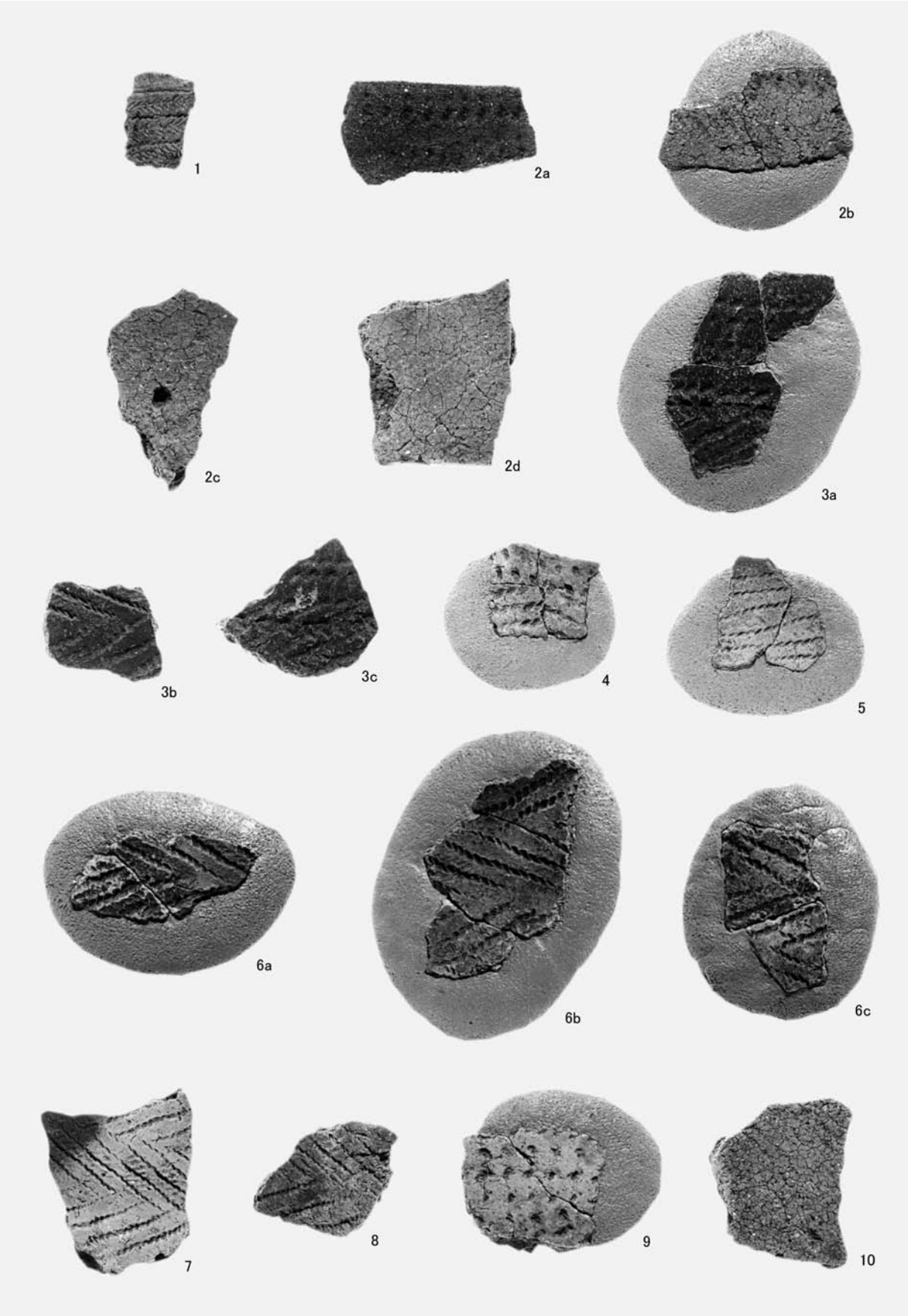


FL－15



縄文時代中期・晩期中葉の土器

大平４遺跡　遺構出土の遺物（2）・包含層出土の土器（1）



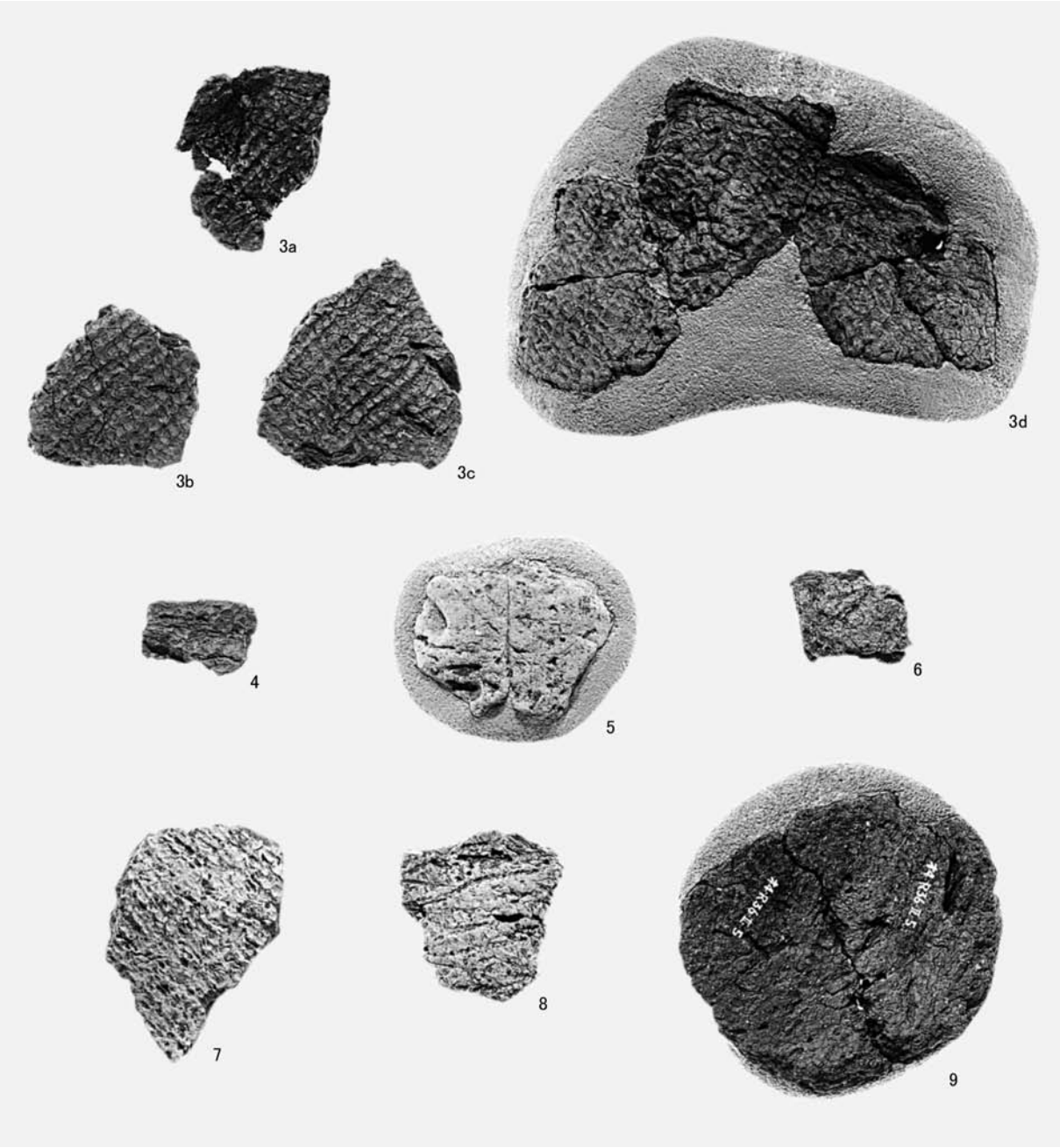
縄文時代早期後半の土器

大平４遺跡　包含層出土の土器（2）

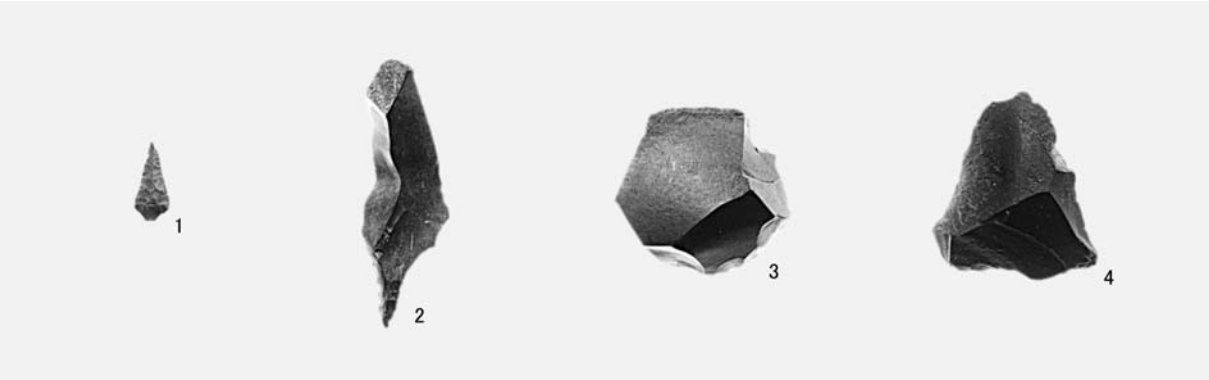
図版６

縄文時代前期後半の土器（1）

大平４遺跡　包含層出土の土器（3）



縄文時代前期後半の土器（2）



包含層出土の石器（1）

大平４遺跡　包含層出土の土器（4）・石器（1）

図版８

包含層出土の石器（2）

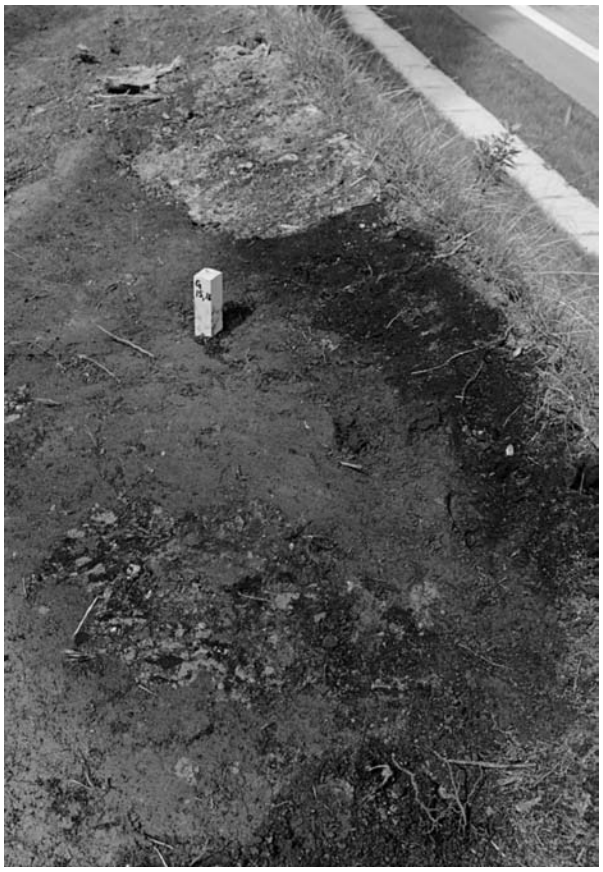
大平４遺跡　包含層出土の石器（2）

伐木後全景

調査風景

蛇内２遺跡　調査状況

図版10

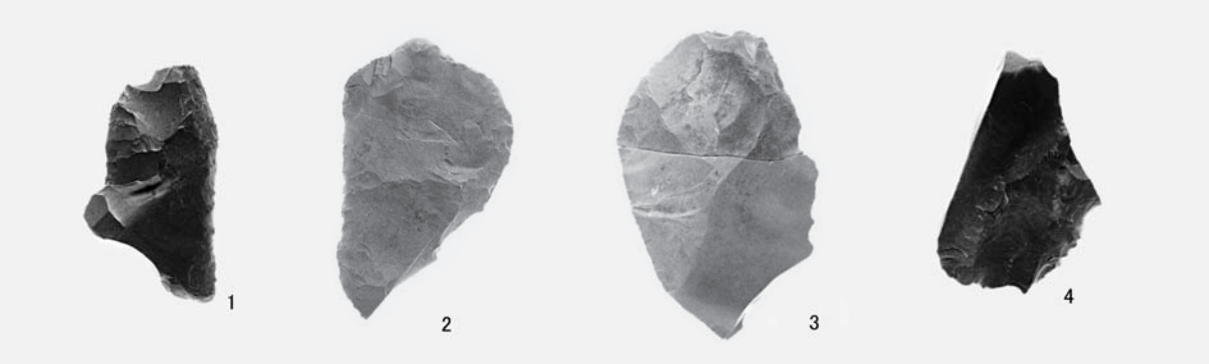


H－11　確認状況

H－11　完掘

H－11　土層

遺跡完掘



H－11出土の石器（1～3）、包含層出土の石器（4）

蛇内２遺跡　H－11、掲載石器

引用参考文献

論文・書籍等

石岡憲雄　1986　「施文原体の変遷－円筒土器」『季刊考古学17』 雄山閣
大沼忠春　1981　「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌66- 4』 日本考古学会
大沼忠春　1984　「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学20』 北海道考古学会
大沼忠春　1986a　「道南の縄文前期土器群の編年について（Ⅱ）」『北海道考古学22』 北海道考古学会
大沼忠春　1986b　「施文原体の変遷－東釧路式土器」『季刊考古学17』 雄山閣
小笠原忠久　1996　「北海道円筒式土器」『日本土器事典』 雄山閣
茅野嘉雄　2008　「円筒下層式土器」『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会
小山正忠・竹原秀雄　2007　『新版標準土色帖29版』 日本色研事業株式会社
鈴木克彦　1999　「北海道渡島･桧山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学35』 北海道考古学会
高橋正勝　1994　「北海道南部の土器」『縄文文化の研究４（第２版）』 雄山閣
千葉とき子・斎藤靖二　1996　『かわらの小石の図鑑』 東海大学出版会
戸苅賢二・土屋　篁　2000　『北海道の石』 北海道大学図書刊行会
野村　崇　1994　「北海道南部・中部の土器」『縄文文化の研究４（第２版）』 雄山閣
福田裕二　2005　「亀田半島における前期末葉～中期初頭の様相」『東北･北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題－資料集－』 海峡土器編年研究会
三宅徹也　1989　「円筒土器下層様式」『縄文土器大観２』 小学館
三宅徹也　1994　「円筒土器」『縄文文化の研究３（第２版）』 雄山閣
村越　潔　1984　『増補　円筒土器文化』 雄山閣
山田　央　2001　「北海道南西部における縄文時代中期末葉の土器について」『渡島半島の考古学』 南北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会

団体・組織刊行物

木古内町史編纂委員会　1982　『木古内町史』 木古内町
北海道火山灰命名委員会　1982　『北海道の火山灰』 北海道火山灰命名委員会
南北海道考古学情報交換会編　1995　『円筒土器下層式図録集』 南北海道考古学情報交換会
南北海道考古学情報交換会編　1996　『円筒土器下層式図録集Ⅱ　遺構編』 南北海道考古学情報交換会
日本ペドロジー学会　1997　『土壌調査ハンドブック　改訂版』 博友社
地学団体研究会道南班編　2002　『道南の自然を歩く』 北海道大学図書刊行会

埋蔵文化財発掘調査報告書

乙部町教育委員会　1976　『元和』
木古内町教育委員会　1974　『札苅遺跡』
木古内町教育委員会　1991　『釜谷４遺跡』
木古内町教育委員会　1998a　『亀川２遺跡』
木古内町教育委員会　1998b　『泉沢３遺跡』
木古内町教育委員会　1999　『木古内町　釜谷遺跡』
木古内町教育委員会　2001　『新道２遺跡』
木古内町教育委員会　2003a　『大釜谷３遺跡』
木古内町教育委員会　2003b　『泉沢２遺跡Ａ地点』
木古内町教育委員会　2003c　『泉沢２遺跡Ｂ地点』
木古内町教育委員会　2004a　『泉沢２遺跡Ｃ地点』
木古内町教育委員会　2004b　『蛇内遺跡』
函館圏開発事業団　1974　『西桔梗』

函館市教育委員会　2003　『豊原４遺跡』
北海道開拓記念館　1976　『札苅』
北海道第四紀研究会　1974　『西股』
(財)北海道埋蔵文化財センター　1985　『湯の里遺跡群』　北埋調報18
(財)北海道埋蔵文化財センター　1986a　『湯の里３遺跡』　北埋調報32
(財)北海道埋蔵文化財センター　1986b　『木古内町建川１・新道４遺跡』　北埋調報33
(財)北海道埋蔵文化財センター　1986c　『木古内町札苅遺跡』　北埋調報34
(財)北海道埋蔵文化財センター　1987a　『上磯町矢不来２遺跡』　北埋調報37
(財)北海道埋蔵文化財センター　1987b　『木古内町建川２・新道４遺跡』　北埋調報43
(財)北海道埋蔵文化財センター　1988　『木古内町新道４遺跡』　北埋調報52
(財)北海道埋蔵文化財センター　2006b　『森町三次郎川右岸遺跡』　北埋調報233
(財)北海道埋蔵文化財センター　2006c　『森町森川３遺跡（２）』　北埋調報234
(財)北海道埋蔵文化財センター　2007　『北斗市館野遺跡（１）』　北埋調報237
(財)北海道埋蔵文化財センター　2010　『調査年報22』
(財)北海道埋蔵文化財センター　2011a　『木古内町木古内２遺跡』　北埋調報278
(財)北海道埋蔵文化財センター　2011b　『木古内町大平遺跡・大平４遺跡』　北埋調報280
(財)北海道埋蔵文化財センター　2011c　『調査年報23』
(財)北海道埋蔵文化財センター　2012a　『木古内町蛇内２遺跡』　北埋調報281
(財)北海道埋蔵文化財センター　2012b　『調査年報24』

報告書抄録

ふりがな	きこないちょう　おおひら４いせき（２）・へびない２いせき（２）
書名	木古内町　大平４遺跡（２）・蛇内２遺跡（２）
副書名	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	なし
シリーズ名	財団法人　北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）
シリーズ番号	第292集
編著者名	立川トマス・芝田直人・酒井秀治・佐藤和雄
編集機関	財団法人　北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832　江別市西野幌685-1 TEL(011)386-3231　FAX(011)386-3238　E-mail　mail@domaibun.or.jp ホームページ　http://www.domaibun.or.jp
発行機関	財団法人　北海道埋蔵文化財センター
発行年月日	平成24(西暦2012)年３月26日

ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大平４遺跡（おおひら　いせき）	上磯郡木古内町字大平60（かみいそぐんきこない　ちょうあざおおひら）	01334	Ｂ－05－29	Ｄ60杭（補償道路部分） 41度41分34.94057秒	140度26分58.90848秒	20100922～20100930	350㎡	北海道新幹線建設に伴う記録保存
				Ｒ37杭（町道振替部分） 41度41分30.62612秒	140度26分58.03251秒	20101025～20101105	100㎡	
				Ｒ42杭（町道振替部分） 41度41分31.24708秒	140度26分58.72761秒			
蛇内２遺跡（へびない　いせき）	上磯郡木古内町字札苅518－3（かみいそぐんきこない　ちょうあざさつかり）		Ｂ－05－19	Ｇ15杭 41度41分48.59772秒	140度27分15.88221秒	20110822～20110830	77㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大平４遺跡	遺物包含地	縄文時代 早期後半・前期後半・中期・晩期中葉	竪穴住居跡２軒、土坑２基、剥片集中２か所	土器 石器等
蛇内２遺跡	遺物包含地	縄文時代 前期後半	竪穴住居跡１軒	土器 石器等

要約

大平４遺跡の平成22年度調査と蛇内２遺跡の平成23年度調査の報告である。大平４遺跡は補償道路部分と町道振替部分の報告となる。

大平４遺跡の２冊目の報告書となる。遺跡はＪＲ木古内駅から北東へ約２㎞、孫七川左岸の海岸段丘上に立地し、標高は７～13mである。遺構は、補償道路部分から剥片集中を２か所（中期）、町道振替部分から竪穴住居跡を２軒（早期後半）、土坑を２基（前期後半１・晩期中葉１）確認した。遺物は、縄文時代前期後半が最も多く、早期後半・中期・晩期中葉の遺物が出土している。土器663点、石器等12,899点の合計13,562点が出土している。

蛇内２遺跡の２冊目の報告書となる。遺跡はＪＲ木古内駅から北東へ約2.8㎞、蛇内川左岸の海岸段丘上に立地し、標高は８～10mである。主に縄文時代前期後半の遺構・遺物を検出した。遺構は、平成22年度に調査したＨ－11の東側未調査部分を検出している。新たに柱穴１基を確認した。遺物は、土器116点、石器等59点の合計175点が出土している。

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登載番号、経緯度は世界測地系による。

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第292集

木古内町　大平４遺跡（２）・蛇内２遺跡（２）

―北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成24（2012）年３月26日

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地１
TEL（011）386-3231　　FAX（011）386-3238
URL　http://www.domaibun.or.jp
E-mail　mail@domaibun.or.jp

印　　刷　株式会社　総北海　札幌支社
〒065-0021　札幌市東区北21条東１丁目４番６号
TEL（011）731-9500